
闇垢戴天

樹嵐

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇垢戴天

【Nコード】

N2008Q

【作者名】

樹嵐

【あらすじ】

世界は闇に覆われていた。

全人類の敵として世界に存在し続ける化物、闇に魅入られし物。現れては消えて世界を脅かす化物は世界を疲弊させていた。

その化物に抗うために、人間がつくったのはジェルナだった。それは化物を殺すことができる闇狩^{ハンター}をより集めた組織。化物の殲滅を掲げた崇高な理想は年月と共に風化し、権力に色取られていき、世界は彼らによって支配されていた。

そんな二つの闇を抱えた世界は奇妙なバランスで成り立っていた。

ルフィア歴376年。

後に神槌戦争とよばれる世界の真実に迫る戦いは、流浪の闇狩が反ジェルナ組織マッサに巻き込まれる形でゆっくりと幕をあけるのであった。

序

瓦礫に半分埋まった聖像。流れる髪は波打ち、優雅な肢体は薄絹を纏う。人々を見守る瞳は慈愛に満ち溢れる。それは唯一の、そして万能の神ルフィアを象った像。ここにあったはずの教会は崩れ落ち、瓦礫の海となり果てていた。その周辺には、海上を漂うゴミ屑のように、肉の塊が散乱している。それは引きちぎられた人の死体だった。家々は血に染まり、道にもいくつもの血溜まりができていた。

赤く濡れたルフィアは変わらずに微笑みをたたえている
遠くで何かが崩れる音がし、近くでは肉が焦げる音が耳につく。
風が吹く。砂と一緒に止まった時をも流していく。

よく見ると廃墟と化したこの場所に、肉の塊が蠢いている。それが村人たちを「赤」に染めた元凶であった。それは口らしきところから体液を流して、肉と化した骸を喰い漁っている。独特な腐敗臭が辺りに広がっていた。

化物。そう呼ぶにふさわしい生命体。目を覆うような赤くただれた皮膚が体を覆い、本能のままに人間を喰らう。その血に似た赤い瞳は幾千、幾万もの人間を闇に陥れてきた。

ゲウ・グ・ホーグ
闇に魅入られし者。

彼らが何処で生まれ、その名を誰が与えたのか知る者はいない。人間と同じ時間を生きてきたにもかかわらず人間たちが彼らについて知ることは限りなく少なかった。それ故に、余計に人々は彼らのことを恐れ、憎むのであった。

肉を喰らう音の中に、奇怪な雑音が紛れた。あるはずのない跽音。それは瓦礫の海に突き出た像の前で止んだ。

化物を倒しにきた無謀な人間にしては、あまりにも華奢な体つきをした少年だった。少年の視線は、血に彩られた平和の象徴に注がれる。その瞳は、底のない闇に等しく、それと対をなすように、少

年の肌は限りなく白かった。「人形のような」という形容がよく似合う少年だった。その外見は明らかに人間に見えた。が、彼もまた闇に魅入られし者と同類であった。

メーファーズ

一体誰がつけたのか。それが彼の名だった。闇に魅入られし者の中で唯一名を持つ者。

（神よ。もしお前が存在するのなら答えよ。なぜ我らに生を与えた）

風は一層強まり、砂を踊らせた。太陽は遙か彼方に沈みはじめている。夕日に赤く染められたルフィア神。そして蠢く化物たち。

一瞬、風が止んだ。

閃光が街を包み、静かに消えていく。

また一つ、街が闇に喰われ、無に還った。

ただ一つ、殺戮に染まったルフィア神を残して。

ギューン

辺りは静かだった。だから余計にその音が大きく聞こえた。

黄昏に染まった森の中。大陸ヴェルベールの東の中心、世界三大都市の一つであるザフィートに続く街道沿いに照らされて、妖しい光を放っていた。

緊張は指先に集中する。引き金に指をかけたまま、銃口をそれに向け、そして……。

ギューン

もうすでに死んでいたかも知れないが、それに弾を撃ちこむ。その反動で後方に少しだけ動いたが、自ら動くことは二度となかった。闇に魅入られし者は確かに死んだのだった。鼻を覆いたくなるようなひどい臭いが辺りに漂いはじめる。己の体液で、それは自らの骸を溶かしていく。人間には到底真似できない行為。ジユワ、

ジュワワと白い泡がうまれ、
やがてそれは空気となり消えていく。時間が経つにつれて、肉の塊
は小さくなっていく。

うつすらと闇狩^{ハンター}の額に汗がにじむ。それを手の甲で拭うと深く
安した。

闇に魅入られし者を狩る者。それが闇狩である。彼らは人間で
唯一赤眼の魔物を殺せる者。どんなに科学技術を駆使した武器であ
ろうとも、弱点である核を貫かなくてはそれは死なない。そして、
それは全て場所が異なり、闇狩でないと破壊できなかった。つまり、
闇狩は闇に魅入られし者を殺すことのできる特異能力者であった。
(ためらっていたら次は必ず死ぬ)

何度もそう己に言い聞かせてきたが、結果は変わらなかった。
それでもなお、そういい聞かせる自分に彼女は苦笑した。

闇狩の名は、ユリエル・シークエンス。彼女の持つ、滑らかな
栗色の髪も、碧の瞳も、もはや紺碧に浸っていた。まもなくすべて
が闇に落ちる。風が通り抜け、木々がざわめいた。一瞬だけ、闇に
舞う葉を見やる。視線を戻せば、その姿はすでになかった。ある
のはあの臭いだけ。

(あいつは死んだら一体どこに還るのだろう)

ぼんやりとした意識の中に、そんな疑問が生じてくる。

人間が死ねばその骸は腐り、やがて土に還る。だが、骸を自分で
溶かす彼らは一体どこに還るのか。いや、そもそも人類の敵である
あいつらに還るところがあるのだろうか。そんな思いが浮かんでは
消えていく。そして行きつく先はただ一つ。

闇に魅入られし者、奴らはなぜ、この世に生を与えられたのか。
それが長年の彼女の疑問だった。

『変わったことを考えるな』

昔、共に旅をした男がそんな言葉を返したことがあった。

確かにそうである。ユリエルは自分でも不思議になるくらい闇
に魅入られし者に執着していた。憎むのが当然の世の中なのに。そ

の理由もまた彼女は知っていた。それは幼い頃聞いた言葉のせい。
『闇に魅入られし者。彼らは償うことのできない罪を着せられた哀
れな人間たち』

思い出という記憶の中で、ユリエルは今もなおその言葉を聞き続
けていた。

遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえた。口元をわずかにゆるめる
と、身を翻し、闇狩は闇に消えていった。

1章

緑の心地よい匂いの広がる森の中を、走る獣がいた。

淡い茶色の毛はなめらかで美しい。ウサギより一回り大きいこの動物はノルと呼ばれ代表的な狩猟動物であった。

疾走するノルに背後から鈍く光るものが近づいていく。それは空を貫くばかりか、そのきれいな足をも貫いた。それでもなお走り続けようとするノルにさらに矢が刺さり柔らかい草々の上へ、ゆるやかに倒れた。

森の静寂がノルの死を飲み込もうと口を開けたとき、木々の間より二つの影が姿を見せた。その一つは弓を持った十二、三の少年だった。彼は仕留めた獲物に走りよっていく。

「どう、ラグス。それで頼まれたものは全部？」

「はい。大丈夫です」

動かなくなったノルを革袋に入れる手を止め、ラグスと呼ばれた少年は、自分の上に影を落とす女性を見上げた。まだ若い女だったが、歳に似合わない妙な落ち着きを放っていた。その上、体を覆う使い古された外套が女の素性をより不可解なものにしていた。

「そう。……それにしてもラグスは森については博識なのね」

女の揶揄にラグスは気づかず、素直にほお赤らめた。女もその勘違いを訂正しようとはせずに、ただその顔に微笑を浮かべるだけであつた。

「リスルは森に囲まれた村でしたから……。そ、それに僕なんて、ユリエルさんに比べたら何も知らないのと同じですよ」

「そうかしら。現に、わたしはこの薬草の半分をただの草だと思っていたのよ。」

ユリエルは手にしていた袋をラグスに渡すと、ノルの入った革袋を拾いあげた。あまりに自然な動作に、一瞬ラグスは何が起ったのか理解できなかったが、ユリエルに促され、歩きはじめてから

ようやく重い荷物を持って行かれたことに気がつき、さらにラグスはほおを赤くした。

「あの、ユリエルさん？」

「荷物のことだったら気にしないで。ラグスはその分だけ働いたんだから」

「でも…」

確かに袋の中身の大半を手に入れたのはラグスであった。だが、彼が森の中でそれだけの働きができたのも、闇狩であるユリエルがいればこそできることなのである。そうでなければ、いつ闇に魅入られし者に襲われるかわからない森の中で、狩りや採取などできるはずもなかった。実際に、昨夜、二人は闇に魅入られし者を目撃していたのだから。

（そんなこと言ったら、ユリエルさんなんかしばらく何もしないで生きていけるんじゃないかな）

森はどこまでも静かで、小さな住人たちの息づかいすらその中に取り込んでしまっている。半ばラグスもその中にどうかしながら、古びた外套のすぐ後を歩いていく。

「なんならそれも持とうか？」

振り向いたユリエル横顔に、木の葉の穴から光が注がれる。光の中のユリエルの微笑みはルフィアのそれによく似ているとラグスは密かに思った。

「ラグス？」

「えっ？……あ…だ、大丈夫です。自分で持てますから」

とつさに薬草の入った麻袋を胸に抱きしめると、草の青くさい臭いが袋の口より噴き出て、ラグスは顔をしかめることとなった。その顔の滑稽さに、ユリエルは小さく声を漏らして笑った。遠くからその二人を、森の住人たちは興味深げに見つめている。その光景はあたかも世界を覆っている闇とは無関係のようだった。

世界は闇に覆われていた。闇に魅入られし者と呼ばれる血の色をした闇に。その化物が世界に及ぼす影響は計り知れなかった、それ

らについて人類が知ることは無に果てしなく近かった。生息場所、生活習慣、寿命。どれをとっても明確な答えがでることはない。分かっている事実といえば、計り知れぬ能力を持ち、人を食らうこと。そして、化け物を象徴するかのようなあの血色の瞳だけであった。人類とほぼ同じ年数を生きてきたこの生命体はまだ未知に近い存在で、人類はその恐怖から脱するための対策を見だしてはいなかった。

だがそんな人類も長い年月の間に、闇に魅入られし者の弱点である核を察知する能力を身につけた人間を、進化の過程で生み出すこととなった。また、闇に魅入られし者をせん滅するための組織を結成することに成功した。そのジェルナと呼ばれる組織は、闇狩を組織化し、人類の持てる最新の科学技術を駆使して、赤い魔物と戦っているが、いまだ防衛に徹するのみであった。

それに追い打ちをかけるように、現在、世界は上層部の腐敗と没落の混乱期にあり、その様を大きく変貌させようとしていた。

大流出 によりそれははじまることになった。

一五年前、ヘッジと呼ばれる小さな村が闇に魅入られし者に滅ぼされた。その惨劇を最後に、化物の活動は急速に沈静化した。つかの間ともいえる平穏が、人々の心から権力への欲望を揺さぶり起こすのにそう時間はかからなかった。幾多といえる闇に魅入られし者への攻撃に疲弊した都市を引きずり落とそうと街々が結託したのが大流出 のはじまりであった。もちろんそこには都市は常に都市であるという固定観念を持った都市の上層部の腐敗も大きな要因となったことはいまでもないことであった。街は都市よりその特権ともいえる科学力を奪い取り、吸収していった。その現象は、急速に広まり、弱小な都市が次々に力ある街の前に倒れた。まさにその名の通り、科学技術が街に流れ出したのであった。幸か不幸か、闇に魅入られし者の活動はここ一五年の間、山間部で年に数回被害が出る程度で、沈黙を保ったままであった。愚かにも、世界は、いや、人類は内と外の二つの敵を相手にしなくてはならなくなった。

「そういえば、パオロさんたち、無事に商談が成立するでしょうか。昨日のあれのせいで荷がずいぶん減ってしまいましたし」

カサ、カサと落ち葉を踏む一定のリズムに合わせ、ラグスの腰でラジオが揺れた。前に行くユリエルの髪もそれに合わせて外に内にと揺れ動いた。木々はまばらになり、草々間からランコッドの石壁が見え隠れする。

「さあ、どうかしら。それこそ商人としての腕の見せ所ね」

「それって」

「あのよく回る口の本当の使い道はそこじゃないかしら」

「ふふ、確かに。護衛の依頼をされたときから、ずっとパオロさん、ユリエルさんのこと口説きまくっていましたよね。あれだけしゃべれるならきつと大丈夫ですね」

話に気を取られ少し遅れだしたラグスに合わせ、ユリエルも歩調を緩めた。けれど、ラグスが彼女の隣を、ましてやその前に行くことはなかった。

「でも、あの人たちが本当に良かったですね。ユリエルさんのおかげで、僕みたく生き延びることができて」

その言葉にユリエルは顔を少しだけ上げたが、振り返ることができなかった。なぜなら、それが彼女と少年の関係だったからだ。（感謝されたくて闇狩になったわけではない。できればこんな能力なんか欲しくなかった）

ユリエルの瞳に、昨夜の光景が浮かび上がる。

商業の街ランコッドに続く街道で、ユリエルとラグスが護送する商隊が闇に魅入られし者に襲われた。たまたま野営の準備のため車から降りていたのが幸いし、人的被害は最小に食い止めることができた。化物の最初の一撃で車体が倒れ、数人がその下敷きとなった。それだけの被害だったのだ。依頼主のパオロは最大級の賛辞をユリエルに与えた。闇狩がいたからこれだけで済んだ、その言葉は純粹に喜びを表現していたのかも知れない。だが、ユリエルにはそれこそが苦痛であった。闇狩として闇に魅入られし者をいくら倒し、喜

ばれたとしても、愚闇^{バディ}である彼女にはその後に無数の憎悪と敵意の標的にならねばならなかったからだ。現にユリエルはかつて訪れた村で、闇に魅入られし者に襲われ、退治したことがあったが、愚闇がいたから狙われたのだと言いがかりをつけられ村を追われたことがあった。

『愚闇など神の慈悲も受けられぬぞ』

記憶の中で、飛礫と共に投げつけられる罵声。闇狩はジェルナに入り、世界を守るのが使命だと信じる者は多い。そうやって自分は正しいことをしていると思っている人間に限って、当の闇狩の意志など全くの無視だ。それならば都市の上級階級のように自分の富や権力を主張する方がわかりやすくいい。皮肉な笑みが口元に浮かぶ。

（この世に神などいない。いるとすればそれは殺戮を愛する神）

そうでなければ、とユリエルは思い、そこで頭を振った。これ以上考えたとしても無駄だとばかりに、息を吸い込む。まだ壁を越えていないというのに、人の生活臭が口の中に広がった。気づかぬうちに足が止まっていたらしく、ユリエルは背後から何かに押される形となった。

「すみません。……うわっ」

ぶつかった拍子にバランスを崩し、ラグスは勢いよく尻持ちをつく。カラン、とラジオが音を立て、転げ落ちた。

「……ます……の街が、……し者の襲撃により滅亡し……」

突然、なり始めたラジオの声は街道を通り抜ける風にかき消された。後にはジー……というノイズのみが響き渡る。

ただの箱となったラジオをユリエルは拾い上げると、スイッチを切り、ラグスに差し出す。ラジオからユリエルに、視線を動かすラグスの目には不安の色が浮かんでいた。その不安の奥には奇跡を望む切実な思いが秘めているのをユリエルは知っていた。

「ユリエルさ……」

「気にしないこと。いくらわたしでもどうにもできないのよ」

冷たく言い放つことしかできない自分と、それを言わせた彼に
ユリエルは顔を背けた。

ラグスは完全に納得したわけではないだろうが、ユリエルの言葉に頷いた。それでも、不安を隠せないのだろう、目は落ち着かずに辺りを見まわし、ユリエルにぴたりとついて離れなかった。

「行こう、ラグス。依頼人が首を長くして待っているわ」

優しくラグスの淡い黄色の髪に手を置き、促すと、二人は門をくぐり街の中へと入って

ランコツドの中心街。止まり木 と呼ばれる酒場でユリエルは一人、グラスを傾けていた。カウンターの奥、従業員用の扉から男が姿を見せた。

「待たせたな。これが報酬だ」

「四ハーツ？ 引き受けたときは五ハーツだったはずだけど」

渡された四枚の金貨をユリエルは手の中で遊ばせる。

止まり木 ではユリエルのように様々な依頼を受けて生活する渡り鳥 が仕事や情報を売買する非公認のたまり場だった。依頼される仕事も薬師からの薬草採取から要人の暗殺や情報入手など、種々様々であった。もちろん政府も 渡り鳥 の存在知ってはいたが、利用価値があるためその存在は無視されていた。 渡り鳥 はいかれた命知らずども。殺しても罪にはならないが、彼らが何をしても罪にはならない。それが世間の認識だった。

「そいつは仲介料だ。飲み物分も入れといてやるから安心しな」

「ミルクの金額なんてたかが知れてる」

「だったら酒でもおあつてくかい」

「薄い酒を飲んでも、酔えないわよ。酒より価値のあるものがないわ」

仲介者との駆け引きは 渡り鳥 の運命を大きく左右する。話し

すぎても、聞きすぎても自分のためにならないとユリエルは思っていた。例えすぐに旅立つとしても、不利な情報を残すのは賢い 渡り鳥 とはいえなかった。だからユリエルも 止まり木 に来るときは、極力一人で来ることにしていた。ラグスに世の闇を見せたくないというのも理由の一つではあった。

「酒より価値のあるもの、ね。何が聞きたい」

「そうね。最近のマラツサの動きとかは、どう」

「マラツサねえ。荷担しても金にはならねえよ」

「慈善ごっこにつきあう気はないわ。でも、間違えてジェルナに襲撃されるのは避けたい」

「なるほどね」

酒場の亭主は顎に手を当て、思案する。ユリエルもマラツサの動きについては噂で耳にしていた。

ジェルナとマラツサの抗争は今や有名である。世界を裏から動かしていると囁かれるジェルナを打倒しようとしたのがマラツサだ。その名の由来となったマグナス「マラツサの名は稀代の愚か者として世界に知れ渡っている。闇狩であった彼は、一時はジェルナに入ったが、脱走し、ジェルナの闇を糾弾し続け、最後はジェルナにつかまり殺された。闇狩の能力に目覚めたのに愚かな奴だ。それが世間一般の評であったが、ユリエルは闇狩の能力に目覚めなければ彼は平穩に暮らせたのにと同情した。彼も自分もこの能力のせいで不幸になったのだ。マラツサが結成されたのは彼の死後まもなくであった。

片手でグラスを弄ぶ。グラスに残った液体が波立つ。

「最近、赤眼の魔物が活発に動き始めただろ。それでジェルナとマラツサが近々和睦をするらしいって話があったな」

「和睦？」

闇に魅入られし者の名を口にするとやってくる。迷信ともいえる慣習は闇に生きる者でも守る者が多かった。赤眼の魔物は闇に魅入られし者の別名となっていた。

闇に魅入られし者の活発化。誰しも 暗黒時代 の再来を望んではないはずだ。だが、もっともらしい理由での和睦がユリエルには不審でならなかった。権力の亡者になりさがったジェルナの高官が簡単に和睦を認めるだろうか。マラッサの中心メンバーは少数であることを活かし、その存在は一部しか知られていない。と、する…

（和睦を利用してマラッサの根をとるつもりね）

「どこでだかわかる？」

「いや、そこまでは聞いてないな」

口元をあげて男はユリエルを見た。これ以上は別料金だ、そう目は語っていた。これ以上の有益な情報があるかどうか、ユリエルは手の中の硬貨をちらりと見た。

もし推測が正しければ、軍を隠す必要がある。軍を疑いなく隠せる場所。

ユリエルはそれで十分とでも言いたげに、おもむろに立ち上がる。

「ごちそうさま」

立ち去ったユリエルの背後から、悔しそうな舌打ちが聞こえた。

ドアを開けると、街の喧噪がユリエルを待っていた。

道の両側には様々な店が出ていた。ランコッドは三大都市の一つザフィートと目と鼻の距離にあるため、村人が滅多に見ることのできない機械製品が売りに出され、他にない賑わいを見せていた。現に、一つの店ではラジオやタイプライターなどが置かれ、行商に着た村人がその物珍しさに群をなしていた。その人だかりの脇で、皮の外套を着た少年が一人、その群をちらちら見ながら立っていた。少年は待ちくたびれたのか、ふあっとあくびをする。その様子を隣の店主が迷惑そうな顔でじろじろと見ていた。

（ユリエルさん、まだかな）

道を往来する人々からユリエルを探そうと目を向けるも、すり切れた外套を着た栗色の髪的女性はどこにも見あたらなかった。

（やっぱり無理を言ってもついていけば良かった）

森で採取した品々をユリエルは依頼主に届けに行っている。

村に立ち寄った時には、直接依頼主と交渉し、その代価はほとんどが一夜の宿など現物支給である。その時はラグスももちろんユリエルと依頼主の交渉を目の前にする。だが、街や都市で依頼をこなすとき、ユリエルはラグスを交渉の場に居合わせないようにする。

それに不満があるわけではない。ユリエルがいなければ自分など生きていけないのだ。だから、彼女の迷惑になることはなるべくしなくなかった。だから、今回も市場を見て待つことにしたのだ。

足下にあった小石をはじき、小さなため息をもらす。脳裏には先ほど聞いたラジオの声が思い起こされる。

（最近多いよな）

ラグスがユリエルと旅をするようになって、半年が経つ。旅から旅への生活だから、人よりもきな臭い話を聞いてきた。なるべく聞かせないようにユリエルが気を遣っていたことをラグスは薄々気がついていった。それでも、人よりは多く聞いてきたつもりだ。もちろんその話の中には闇に魅入られし者のことも含まれている。

（今月に入ってまだそんなに経ってないのに、もう四件だもの）

こんな時にはユリエルと一緒にいたい。嫌でも自分が闇に魅入られし者に襲われた時のことを思い出してしまふ。

（それに）

街が減んだ。そう続けようとしたとき、近くで何かが割れる音がした。驚いて目をやると、道は赤く染まっている。その血溜まりの中に妹は無惨にも……

からん。欠けたボトルが、勢いよく足下に転がってくる。よく見ると大きな袋を抱えた婦人が、買い込んだワインを落としたらしい。ボトルを避けようとして、店のテーブルにぶつかった。その瞬間、誰かにラグスは腕を捕まれた。

「泥棒だっ」

「えっ！」

「こら、ガキ。うちの店から盗ったもん返しやがれ」

「放してくださいっ。何も盗ってなんか」

もがくラグスを悠々と片手で押さえながら、店主は彼の体を探る。目的の物を見つけ、にやりと口をあげた。

「じゃあ、これは何だ」

男の手にはラグスの腰にぶら下がっていたラジオが握られている。ラグスが初めて訪れた街でユリエルが買ってくれたものだ。胸ぐらを捕まれ、足がつま先立つ。何事かと集まる人々のざわめきも、締め上げられる息苦しさも、ラグスには関係なかった。ただひたすらに取り上げられたラジオに手を伸ばす。

「それは僕の」

「はっ。てめえみたいなガキにこんな高価なもんが買えるわけがないだろうがよっ。まして、こいつあうちのとっておきよ。な、お客さん方もそう思うだろ」

店を囲んでいた客や野次馬は、ひそひそと無責任なことを口にする。冷たい目がラグスになげつけられる。違う、違う、と否定の言葉を口にするが、殺気立ちはじめた群衆には聞く耳もなかった。視線ばかりか石までもがラグスめがけて飛んできた。

闇に魅入られし者の恐怖に、自由を制約され生きてきた人々は、少しでも間違った者を見つけると集団でその者に制裁を与えた。行き場のない怒りのはけ口はやがて歪んだ慣習となっていた。その負の慣習は、闇に魅入られし者の沈静化したこの十数年、薄れはしたが消えることはなかった。

「ほら見る。みんなてめえが盗ったところを見てるんだよ」

「誰も見てないだろ」

不意に割って入った声に、店主は牙をむき出しにして睨むと、急に顔色を変える。

「よお、ゲイル。久しぶりだな」

「パオ口さんっ!？」

群れなす野次馬の間を割って出てきた男にラグスは見覚えがあった。その赤毛と軽い口調と容姿は、つい昨日までユリエルが護衛していた商隊の若き主のそれだった。

「や、これはどうも。パオ口の旦那にはいつも世話になりっぱなしで」

ラグスを威嚇していたのが嘘かと思われるような猫なで声で、店主はぺこぺこ声の主に頭を下げた。声の主は、日に映えた赤毛の前髪を軽く掻き上げると、大仰なため息を吐く。

「ま、な。俺様の口が堅いおかげで、誰かさんは自由に悪徳商法ができるってわけだからな。ちつとは感謝して貰わないと」

「へい。全くその通りで、こうやって日々感謝してますよ」

「で、今日はその恩人のダチにちょっかい出してるのは、どういう見よ」

「へ、こちらのガ…お坊ちゃんが、旦那のお知り合いで。いや、奇遇ですね。今、いいラジオをお持ちだったんで、見せていただいていたんですよ」

ぱつと手を放され、ラグスはむせこむ。さつさと持てと言わんばかりに、ゲイルはラジオをラグスに押しつけた。顔には満面の作り笑いを浮かべる。

「それじゃ、旦那。名残惜しいですが、もう店じまいです。またご縁があったら、お会いしましょうや。……オラオラ、見せもんじやねえぞ。さつさつと帰った帰った」

ゲイルは牙をむき群衆を追い立て、いくつかの商品をつかむと人混みに逃げるように消えていった。しばらく人々は騒然となったが、すぐに日常に戻っていく。ゲイルの姿が人混みに消えたのを確認すると、パオ口はラグスを振り返った。

「大丈夫か？ ラグス」

「は、はい」

背を丸めてむせ続けるラグスに、パオ口は近づく。はあはあ、と

荒い息を整えるラグスの頭にそつと手を乗せる。もう、大丈夫だと、不安をたたえる瞳にパオロはにっと笑いかける。触り心地の良い髪を少しの間なでるが、急に手をつっこみと、ぐしゃぐしゃとかきまわす。

「や、やめてください。パオロさん」

慌てて、パオロの手をふりほどこうと身をよじる。片手でラグスを抱え直すと、空いた手を使い応戦する。やっこのことでラグスはパオロから離れるも、髪は乱れ、大惨事となっていた。ぷーっとほおを膨らませるラグスと、頭をかきながら笑うパオロ。道行く人々は先ほどの騒動がなかったかのように、その光景を見て兄弟喧嘩か何かかと微笑ましそくに眺め、通り過ぎていく。

「もう、何なんですか」

唇をつきだし、きゃんきゃんと苦情を言うラグスの姿は、まさしく威勢のいい子犬だった。片手で前髪をかきわけ、一生懸命にパオロをにらみつけた。

「いや、なんとなく、な」

「なんとなくって……」

「飼い主に置いてけぼりにされた犬……みたいな顔してたから、ついな。でも、元気になったみたいだな」

「……」

「そついや、あの可愛い飼い主はどこに行っただ？」

陽気な声が頭上から降る。パオロは額に手を当て、人混みを見回している。パオロの身長は高くもなく、低くもない。いったて平均並だ。きよろきよろと見回したところでたいした成果もでない。助けてもらった礼をいう機会を失ったことに気づき、ラグスはどうしようかとそわそわする。

「ユリエルさんなら、今、仕事にいつています」

「本当に置いてけぼりの犬だったのか」

「犬じゃありません。だいたい、さっきのゲイルって人は何なんですかっ！」

真っ赤になつて怒るラグスをおもしろいおもちゃのようにパオロは見ている。

「まあまあ、そう怒るなよ。商人なんてやってればな、ああいう小悪党にはしょっちゅう出会うもんだ。ま、ゲイルなんかは、小悪党にも及ばないがな」

「悪い人と知り合いなのはパオロさんもそうだからでしょ。付き合っている人を見ればその人がわかるって、神父さんが言っていました」
その神父は裏できつと賄賂をもらっている、そう口に出そうになったのを辛うじて飲み込む。無理に現実を教えなくとも数年すれば、彼もいやでも現実を知ることになる。

「それにしても、ユリエルがいないのか。また頼みたかったんだけどな」

「仕事がつましくいったんですか？」

「まあね。伊達と酔狂で命はって街から街への交易をやってるわけじゃないさ。新たな荷を確保したからガイケラまで護衛依頼をしたかったんだが」

「断るわ」

間髪入れずにラグスの背後より声が答えた。その声にラグスは顔を輝かせ、振り返る。

「ユリエルさん」

「相変わらず冷たいな」

飼い主に駆け寄る子犬をユリエルは懐に入れ、パオロに冷めた視線を送る。

「悪いけど、依頼を受けた人間からは二つ目は受けないことにしているの。他を当たってくれる」

ラグスはユリエルの言葉にわずかに眉を寄せた。確かにユリエルが同人物から立て続けに依頼を受けることはあまりなかった。だが、そんな主義を持っていたというのは初耳である。

「なあ、そういわずにガイケラまで行ってくれないか。なんなら俺じゃなくてザックスの依頼にしてくれて構わないからさ」

「耳が悪いの。私は断った。しつこい男は嫌われるわよ」

「嫌よ、嫌よもっていうだろ」

ふざけた口調で二人に近づくパオロだが、彼の目は獲物を見据えている。それは商談を成立させようとする商人の目なのだろうが、ユリエルには自分と共通した臭いを感じた。

（ガイケラ…か）

ガイケラはザフィートに併設した街である。というよりも、ザフィートによって作られた街というのが正しい。ザフィートだけではないがこの世界の居住区は壁や柵に覆われ、闇に魅入られし者の進入を少しでも遅れさせるようになっていく。特に三大都市は電磁を利用したバリアを張っているため、出入りできる時刻が決められていた。そのため都市が開く時刻を待つ人々のために都市はガイケラのような街をつくりあげたのだ。信憑性はともかく、マラッサとの和睦が囁かれている今、ガイケラに行くのは余計な厄災を増やすだけであった。

「それにあんたじゃなければ駄目だ。昨夜みたいに赤い魔物に襲われたら次はないからな」

街の人々に聞こえぬよう耳元で囁くパオロに、ユリエルの無表情がわずかに壊れた。二人を見上げるラグスの目は不安そうに揺れている。いつ誰に聞かれるかわからない状況で大声で話せる内容ではなかった。民衆に聞かれたら間違いなく騒動が起きるだろう。それを承知でパオロはこの人混みの中でその話題にふれた。ユリエルにはその真意がわからなかった。

「私がいたとしても生き残る確証はない。昨晚はルフィアが微笑んだだけ」

ルフィアを信じないユリエルが、神の名を口にするのは、自分が闇狩であることを隠すため。闇狩であることがばれたせいで、起きた災厄の数は計り知れなかった。偽りの平穏でもそれを得るには闇狩であることが邪魔をするのである。

「そんなことはないだろ、だってあんたは愚…」

パオロの言葉は途中で消えた。硬質な触感を腹部に感じ、男は顔をこわばらせた。ゆっくりと向けた視線の先にあったものは想像と同じ物だった。ただの脅しではないことはユリエルの瞳が物語っている。とっさにラグスを見たが、彼女の一步後ろにいる彼には、尊敬する女の行動がわからないようだった。

「悪かった。他を当たるよ」

パオロが引き下がるのと同時に、ユリエルは踵を返した。

「行こう、ラグス」

「あ、はい」

ユリエルの後ろを歩き出したラグスは、助けてもらった礼を言うのを忘れていたことを思い出し、パオロを振り返った。硬い表情で立つ赤毛の商人に、ラグスは礼の代わりに小さく会釈をした。

遠くで教会の鐘が鳴る。市もそろそろ終わりを告げようとしていた。家路に向かう足も多くなる。ユリエルの背後を追うラグスは、その人ごみにぶつかった。

（あれ、今、誰かこつちを見ていたような）

すみませんと頭を下げ、ラグスは背後を気にしつつ、ユリエルの後を追った。

冷たい蛍光灯の光が、3人の男を見下ろす。窓辺に立つ男は、カーテンの隙間から夜空を見る。昼とは裏腹に雲が月を隠し、夜を一層闇に近づけていた。小声で交わされる会話は耳に届かなかったが、その内容は知っていた。

「やはり噂どおりですか」

顎下に手を組み、男は嘆息した。

「ええ、残念ながら」

それに答えたのは男の前に座る人夫だった。いかにも高官そうな男に多少言葉を改めてはいるものの、二人の関係は対等に近い。

「いえ、こればかりはザックス君たちのせいとはいえませんから。お気になさらずに」

「ああ、レジオンの言うとおりだ。赤い魔物が起き出したのは俺たちが悪いんじゃないからな」

そのとおりです、とレジオンは頷いた。ザックスがレジオンに語ったのは、最近の闇に魅入られし者の活動状況であった。最後に彼は自分たちが昨晚、それに襲撃されたことをつけ加えるのを忘れなかった。レジオンの前にはザフィートの周辺地図がローテーブルに置かれている。その一点から一点をつなぐ線を見るとレジオンは再度、ため息をついた。

「しかし、そうなるとガイケラまでの道中が心配です。ただでさえ和睦の件でジェルナの動きがあわただしいいうのに」

「あ、それについては、もしかしたら愚闇に護衛を依頼できるかも知れませんか」

ザックスの言葉に、パオロは顔をゆがめた。ユリエルに依頼を断られたことは、ザックスにも話はしてある。もちろん一回断られたからと行ってあきらめるつもりはなかった。現に今も、別の仲間にユリエルたちを見張らせ、もし夜中に街を立とうとしても連絡は来るようにしていた。必要とあらば、卑怯な手段を使ったとしても愚闇を従わせるつもりだ。だが、ユリエルにはそういう卑怯なことはしたくない。そんな甘い気持ちかパオロの中にあった。

（こつちも生死がかかっているから、そんな悠長なこといつてられないんだがなあ）

できれば納得すぐでついてきて欲しい。脳裏に浮かぶユリエルの冷めた瞳が、そんな思いすら拒絶する。知らずに、口元に苦笑が浮かぶ。ザックスとレジオンは別の話題に移っていた。その話題もありいい結果がでなかったのだらう。先ほどから二人の眉間には深い皺が刻まれていた。

（仕方がない。また明日、行ってみるか）

パオロがそう思ったとき、階下からあわただしく靴音が鳴り響い

た。

「大変ですつ。ジェルナが動きました」

その声が消えるより速く、パオロは動き出していた。

その音でユリエルは目が覚めた。寝静まった夜に響くエンジン音。都市でない限り、車が使える者など数が限られている。その数少ない中で、こんな夜更けにそれを動かすのは、心当たりが一つしかない。この街でジェルナに追われるようなへまはしなかったはずだ。早まって逃げて、怪しまれたら馬鹿をみるのが落ちだ。耳を澄まし、外の音に意識を集中し、様子を見る。追跡者とは考えられないような興奮した声が、夜の静寂を破る。

「……から、ラリー……って、赤毛のと、ちっこい……」

（赤毛の……あいつのとばっちるか）

ベッドから降りると、向かい側で寝ているラグスの寝台に近づく。肩を揺すり起こすと、さしてかからずにラグスは重い目を開けた。唇に指をあてがい、ユリエルは窓辺に立つ。ここからではよく見えないが、暗闇の中で確かに何かが動いていた。それも一人ではない。不意に服の裾を引っ張られた。見るとまだ眠い目をこすりつつも、ラグスは外出の準備を整えており、ユリエルの荷物を差し出す。何も言わなくても、何かから逃げるのだと知っている少年に、ユリエルは罪悪感を覚えずにはいらなかった。

二人の出会いは半年以上も前、山深いリスルという小さな村であった。その時、ユリエルはあてのない旅の途中に村に立ち寄った。得体の知れない旅人だった。一方、ラグスは村の教会で妹と二人で神父に養われていた。彼らの両親は七、八年前に流行った病で亡くなった。接点がなかった二人を結びつけたのが、闇に魅入られし者だった。狩猟に出ていた村人が襲われ、這々の体で生き残った者が村に逃げ帰ってきた。その後を赤い魔物は悠然と追ってきてい

た。その日、ユリエルは村を立つたが、嫌な気配を感じ、村に引き返した。その途中で、助けを求めるラグスに会ったのだ。闇に魅入られし者が死んだ時には村の過半数は食いちぎられていた。ユリエルは愚闇と知れ、彼女に助けを求めたとしてラグスは村人から迫害された。私刑にあつていたラグスを助け、村を出た。それから今日まで、二人で旅を続けてきた。

愚闇であることを隠したとしても 渡り鳥 である以上、平穏な生活とは言い難かった。二人で旅を始めた頃は、ラグスをどこかに預けた方が彼のためだと思っていたが、どういうわけか、彼はユリエルに心酔し、その後についてきた。今では彼を守ることが、何もなかった彼女の存在意義のようになっていた。

ようやく光の戻った目で、ラグスは不思議そうにユリエルを見つめる。闇の中で、彼女は微笑んでいた。

（大丈夫。今回も乗り切ってみせる）

右手に白銀の銃 ルアムーン を持つと、左手でラグスを抱き寄せる。

「ラグス。二手に分かれよう。私が注意を引いている間にできるだけ逃げなさい」

「住人のふりをすればいいんですよ」

幾分緊張した声が、確認を取る。ラグスなら一人で歩いていても住人に間違われるだけだろう。運が悪くても、スラムの子供だと思われる程度で、ジェルナに捕まる心配はない。そう経験からユリエルは知っていた。下手に一緒に行動したら、ジェルナに荷担した住人に何をされるかわからない。それはラグスも身をもって知っていた。

音を立てないようにゆっくりとドアが開けられる。

ラグスが裏口に回ったのを確認すると、ユリエルは小さく息を吐く。外套下のルアムーンの銃身を軽くなでると、ドアの外の人の気配を確認する。濃紺の制服を纏った男が二人、おもむろに進入してきた。

「こんな夜分に何の用？ 宿の主はまだ夢の中よ」

ドアから進入する外気が、ユリエルの髪を揺らす。

「ここにマラッサがいると情報があった。身に覚えがあるだろう」

ユリエルは心の中で舌打ちした。マラッサとは、またやつかいな嫌疑をかけられたものだ。そう思いながらも、表情は不適な笑みをつくり、相手を挑発する。外套の下ではルアムーンがジェルナ兵の足を狙う。

乾いた音と共に男の呻き声があがり、ユリエルはひるんだ敵を銃身で殴りつけ、外に出る。ジープと兵士が一人その近くにいた。対応が鈍い。その間に、敵から武器を奪い去る。どうやら地方兵でも下級の兵士ばかりであった。

（おかしい。ジープ一台なら四人いるはず）

辺りに注意を向け、潜んでいるはずの一人を捜す。宿の裏から人の声がする。

「おう、嬢ちゃん、その銃をよこしな」

兵士とは思えない声が路地から現れる。

「おっと、下手に動くなよ。でないとお連れさんが痛い思いすっかな」

「ラグスっ」

現れた男は、兵士ではなかった。柄の悪い口調と顔つきがユリエルに、ラグスから聞いた昼間の一件を思い起こさせた。

（逆恨みか。はじめから、ラグス狙いだったんだ）

自分の判断の甘さをユリエルは恨んだ。銃身が細かく揺れる。男に捕まったラグスは申しわけなさそうに彼女を見、近くのジェルナ兵に訴える。

「ゲイルは、こいつはっ、僕の物を盗んで売ろうとする悪党なんですっ。ジェルナは悪党の言うことを信じるんですかつ」

ゲイルの背後にいたジェルナ兵は、冷たい機械のような視線でラグスを観察する。口を噛みしめ、恐怖をこらながら、ラグスもにらみ返す。

「例え悪党の証言でも疑いがあれば調べるだけだ。悪党よりもマラッサの方がたちが悪いからな」

ほらみると、勝ち誇った笑みをみせるゲイルに、かっとなって、ラグスはその腕に噛みついた。

「痛えっ。このガキ、何しやがるっ」

道に投げ捨てられると、隣の兵士から銃を奪いとり、ラグスめがけて打つ。近くの土が舞い上がり、ラグスは身を丸めた。一発が、足の肉をえぐる。何ともいえない衝撃にラグスは叫び、足を押さえる。

「ラグスっ！ この」

銃を構え直し、ゲイルの頭をねらい打とうとしたとき、クラクシヨンとヘッドライトが邪魔をした。

「この騒ぎは一体なんですか！」

光の中から数人が降り立つ。

「私はレジオン。この街の執政官です。この騒ぎの経緯についてお聞きしたい」

レジオンと共に来た彼の部下たちはジェルナ兵たちの武器を回収し、ラグスの手当をする。ユリエルのもとにも武器を回収に来た。仕方なく渡すと、部下は彼女の背後に立った。監視か、とユリエルも一瞥をくれる。

「この街では約定により、ジェルナが動く折りは事前に私に連絡をするようになっていないはずですが、これはどういうことですか」

突然現れた執政官に、下級の兵士たちは顔色を変えた。ゲイルも萎縮し、きよろきよろと逃げ道を探している。

「この者より、あの二人と商人ラリー・パオロがマラッサであると情報を得た。その取り調べだ。先方に連絡をしなかったのは、情報が漏洩するのを阻止するためだ」

ゲイルと共にいた兵士が、言下に街ごときが口出しするなと含ませて、抑揚なく答える。

そのやりとりを静観し、逃走する機会をうかがっていたユリエ

ルに、背後の男が距離を詰めた。

「もうじき煙幕が張られる。それに乗じて奴らのジープで逃げるぞ」
やっとのことで届くのは、聞き覚えのある声。なぜここに、と思うが、現状で問いただすのは不可能なことだ。返答がないのを承知ととったのか、彼は続ける。

「ラグスはザックスが連れて来るから、安心して逃げろよ」

声が終わった瞬間、ボン、と破裂音がしたかと思うと、辺り一面を煙の幕が遮った。

「ごほ…な、何だこれは」

レジオンが煙の奥でむせている。演技なら、迫真の演技というものだろう。

「おいおい、ちょっと早すぎじゃねえ」

一人そう呆れるパオロの声に促され、ユリエルはジェルナのジープに走った。彼女が着くのと同時に、パオロも運転席に潜り込む。

「後はザックスだな」

煙の中に近づく人影を見つけ、ユリエルは手を伸ばす。一人、

二人……

（二人？）

そう思ったのが早かったか、ジープが動き出す。見る見ると煙の壁が立ち去っていく。

「逃がすな、追え」

ジェルナ兵の声が耳に残ったが、ジープはあっという間に、大通りを抜けた。細い路地をあちこちに走りながら、外門を目指す。何度も路地を曲がったため、どの方角に走っているのか、わかるのはパオロだけだろう。追っ手が来ないのに少し気が抜けたのか、四人目の招かざる客に視線が集まる。

「で、なんであんたまでいるんすか？」

ザックスの横には、ちゃっかりとゲイルが座っていた。ザックスに抱えられたラグスの足を、ちらちら見ながらゲイルは冷や汗を流している。

「い、いいじゃねえかよ。俺のお手製煙幕弾で助かったんだからよ」
「別に頼んでないしい。俺たちだってそれくらい用意してんだよ。」
つか、ゲイル、今、ここで飛び降りろ」

運転席からの無茶な言葉にゲイルの顔がさらに青くなる。ひいつと引きつった声を上げるのは、助手席から向けられた銃口のせいだ。
「鉛の玉がお好みなら遠慮なくどうぞ」

「二人ともやめてくださいっす。とりあえず、走れるだけ走ってから、煮るなり焼くなりしてくださいよ。ゲイルなら意気地がないから、それまでおとなしくしてますから」

ひどい言いようにも、今、死ななくてもいいのならば、ゲイルは何度も首を縦に振った。ラグスを早く安全な場所に連れて行くか、その前に仇を討つか。優先順位が明らかだけに、気持ちの整理がユリエルはつかなかった。外門に近づくに連れ、どの方角に向かっているのか次第に明らかになる。北の外門から最短でいける街はガイケラしかない。そこまでの数時間をラグスに傷を負わせた人間と一緒にいるというのは、理性で理解しても、感情が納得しなかった。ラグスは苦しそうにザックスの腕の中で呻いている。

「助けてもらったことには感謝する。けど、あなたは許せない。少しでもおかしいな真似をしたらその頭に穴が開くと思いなさいっ」

ひゅーっと、腹立たしげに前に向きなおるユリエルを、口笛が迎えた。なぜかうれしそうにパオ口の顔がゆるんでいる。ユリエルの視線に気づいたパオ口は、ニツと笑顔を向ける。

「やっぱりあんたも人間だったんだな」

その台詞にユリエルはどんな顔をしたのか自分でもわからなかった。ただパオ口がククッと笑っただけだった。

ジープはランコッドを抜けると、闇に沈んだ世界を駆け抜けていく。

夜明けにはまだ遠い。

夜の闇に広がる沈黙。ビルの谷間を駆け抜ける風の音がいやに大きく聞こえた。昼間の騒々しさとは違って代わり、今夜は恐ろしいほど静かだった。まるで幽霊都市のように。

雲の切れ間より、月の煌々とした輝きが闇に微かな光をもたらす。よく耳を澄ますと風の音に混じって、低い音が聞こえる。そればかりか、その風の中に、痺れるような腐った臭いがした。

闇に包まれた都市に、赤い星が散らばっている。

破壊されずに、いまだその光を輝かせている街灯が照らし出すのは、赤く染まった道と、その中の所々に転がっている人の一部分だった。

すでに誰もいないであろう都市に、生存者がいた。地上から数十階分離れた上空の一室、西の中心であるディオムのジェルナ支部に彼は生きていた。

青いレーザーが、目の前に迫る物体を貫く。

「ひいっ」

わずかに口から漏れる声は、目の前の恐怖により甲高くなっている。

目の前にいるのは黒ずくめの少年。月明かりで辛うじてその顔が見える。血が通っていないのかと思われるほどの白い肌と、血のように赤く染まった瞳。赤い魔物と同じ眼をした少年は、悠然とその場に立っていた。その眼は、恐怖に歪ませた初老の男をとらえて離さない。

ガシャンッ

後ずさりながら、男はテーブルにぶつかり、その上に置いてあった花瓶を落とした。そのせいでバランスを崩し、したたかに脂で覆われた体を打ったが、痛みは死の恐怖によってかき消された。手にしたレーザーガンが小刻みに揺れていた。それにすりつくように固く握って離さない。一步、また一步と変わらぬ歩調で近づいてくる少年に男は銃を向け、引き金を引く。

(…っ！)

青い光は少年の体内を通り抜け、背後の壁を貫いた。それでもなお、その歩調は変わらない。

「…あ、…ひぁ…」

命乞いをしようとしたのか、男は口を動かすが声にはならない。眼前で止まった少年を見上げる。口元が奇妙に歪んでいた。笑っているのかも知れない。少年は男の手から銃を受け取ると、近くに放り投げた。通信機のガー…という雑音が微かに聞こえる。時たま人語のようなものが聞こえたが、何を言っているのかはわからなかった。

「もう十分抵抗したな、ポリー!!リグルド。それでは、次は私の番だな」

男を見下ろす眼も声を冷たい。

「お前が知る　生き残り　は誰だ」

「あ、あれは私のせいじゃないっ。私の」

まるで関係ないことを口走るリグルドを、少年は軽くつま先で蹴った。人でない力にリグルドは腹部を押さえ、のたうち回る。少しの間痛みに声も出なかったが、落ち着くと、堰を切ったように話し出した。

「　生き残り　だな。私も所在は知らないが、バージルとステイルがどこかにいるはずだ」

最後の言葉は空気をわずかに振るわせただけであった。開かれたままの目が、自分自身に起きたことを理解できていない様子だった。胸にあいた穴から、血が流れ出している。

「あいつの居所は見当が付く。残るは、ステイル!!Z!!ウディールか」

地上から闇に魅入られし者の咆哮が轟く。少年は、顔を歪めて笑うと、屍に背を向けた。

(ここでの仕事は終わった。後はあいつの仕事だ)

赤から黒へ、瞳の色が変わる。耳に聞こえるのは、闇に魅入ら

れし者の悲痛な叫びのみだった。

翌朝、太陽が昇ると同時に、世界にそのニュースが流れた。

三大都市の一つ、西の中心都市ディオムが闇に没したというニュースが。

2章

ランコッドを抜けたユリエル一行が、街に到着したのはそれから数時間後であった。

パオロにせかされるまま、街の外で車を降り、急ぎ走るザックスの後にユリエルは続き、街に入った。彼女の頭の中はラグスの怪我で半分以上占められていた。止血は試みた。弾も運良く貫通している。後はどこか休めるところで静養させないと。前に行くザックスの広い背中からはみ出した細く白い足が、力無く揺れている。

（もつと早く別れていれば）

いずれこのようなことになるかと薄々感じていたのだが、幸いにも今日までたいした怪我を負うことなく旅を続けてこれた。その日々が長かったためにユリエル自身も、懸念をしながらもどこかで大丈夫だと高をくくっていたのだろう。渡り鳥には安全などないということを、ラグスと共に旅をしてきたつかの間の平穏の中で、知らずの内に忘れようとしていた自分がいたことにユリエルは闇の中で笑った。まだ自分は人間だったのかと、パオロの言葉を借り、自嘲した。

何度か道を曲がったところで、先頭を走るパオロが足を止めた。ここだとばかりに、明け放れたドアにザックスは迷わず消えた。早く、と辺りを伺いながら促す手に、ユリエルはためらった。ラグスの件もあり、後についてきたが、今になってどこに連れて行くのだと疑問に思ったのだ。そのことに今頃気がついた自分に嫌気がさし、軽く舌打ちする。その行儀悪い音を耳にしたパオロは、両手をあげて大げさに驚いて見せた。

夜の闇の中でも消えることの無い赤い炎を持つ彼の陽気さもこれくらいでは消えないようだ。背を優しく押され、ユリエルは足を動かした。ラグスが連れて行かれた以上、今更引くわけにも行かなかった。

「そういえば、ゲイルはどうしたの？」

「さあな。気がついたらとんずらしていたからな」

「そう」

声が微かに響いた。暗い、石に囲まれた通路をユリエルを前にして二人は歩いていく。思ったよりも通路は長く、複雑に横穴が開いていた。所々にドアがあり、試しに一つ開けようとしたが、鍵がかかっていて開かなかった。遠くで水滴が落ちる音が聞こえる。ザックスの姿は見えない。先に行ったのだろう。複雑な通路を迷うことなく歩けるのだ、ここが彼らの巣穴で、危険がないのは確かなようだ。

「あ、次、右ね」

思い出したかのように言うパオロは、ぴたりとユリエルに歩調を合わせている。決まってくついているわけではないのだが、もしユリエルが逃げ出したとしてもすぐに追いつける。そんな距離を保ったまま彼は歩いていった。まるでユリエルを監視しているかのような。さっきのレジオンと現れたことといい、パオロがただの商人でないことは明らかだった。そうこうするうちに足は行き止まりの前で止まった。目の前には何度か目にしたのと同じ扉があった。ノブに手を置く。このドアはさして抵抗もせずに開いた。

扉の奥は小さな部屋になっていた。作りからしてどこかの物置だったのだろう。壁にそって棚が作られ、木箱がいくつか置かれていた。今来たのとは別のドアが、四、五段の階段の上にあった。その扉が開き、ザックスが顔をのぞかせる。

「こっちつす。坊主は、今、怪我を見せてるっす」

ザックスが開けてくれたドアをくぐると、また別の部屋にでた。使用人部屋といった感じの部屋であった。広くない部屋に数人の男女がいた。その内の一人はユリエルも知った人物であった。ユリエルの肩越しに、パオロの声が飛ぶ。

「レジオン、そっちは大丈夫だったか」

街の執政官に対する口調では無かったが、レジオンが気分を害し

た様子はなかった。むしろにこにこ実を楽しげであった。

「ええ、ジェルナの下っ端に少し嫌みを言われたぐらいで、何ともありませんね」

白髪が目立つ口ひげをなでる仕草は、優しげな老人にしか見えなかった。老人といってもレジオンはまだ六〇歳を少しでた程度で、当人が自分をどう思っているかはわからなかった。都市での平均寿命は高く、六〇歳を過ぎる者はかなりいる。が、一方、村では闇に魅入られし者の襲撃などにより、極端に平均寿命が短かった。だから、一概に老人といってもその年齢差は各地域によって多少異なっていた。

「待つて。なぜランコッドの執政官が……まさか」

パオロとの会話を無理にうち切らせる。二人ともそのことに気を悪くしたと言うよりも、ユリエルの言葉にうれしそうに顔を綻ばせた。

「そうですね。ここはランコッド。ちなみにここは執政官の私邸です」

声の方に目を向けると、メイド服の女性が柔らかな笑みを見せる。その横には執事と思われる男が、渋面を作って立っていた。

「つまり、いったん外に出て、別の門から中に入ったってことね。林を通ったのは、どこに向かっているのかわからなくするためってことかしら」

「ビンゴ。頭がいい女って、俺、好きだぜ」

なれなれしく肩に置かれるパオロの手をさりげなく払い落とす。

「口が軽い男って、私、嫌いよ」

ころころと二人のやりとりを笑う女性にユリエルは向き直る。金髪を結い上げ後ろでまとめた姿は、どこにでもいそうなメイドであった。三〇歳を少し越えたくらいの年齢だろう。きっと家庭でも優しい母親だと思わせる女性だ。自分には決して手に入れないものを彼女は持っている。そんな勝手な思いこみが、ユリエルの口調を皮肉なものに変えた。

「それで、この集まりはいつたい何なの？ ついでに招待された理由も教えていただけるかしら」

向けられた棘を予想していたのか、女性は笑みを崩さなかった。そればかりか、ユリエルに近づきその手を取ると、彼女の深い緑の目を真っ直ぐに見つめた。

「どこから話をしたらいいのか分かりませんから率直に申し上げます。私たちの仲間になってください」

「仲間？」

困惑したのはユリエルのみではなかった。パオロやレジオンもそうくるとは思わずにいたらしく、それぞれが驚きを見せた。女性はただ、ええ、と頷くだけであった。

「後数日もすると、私たちにとって大きな催しがあります。それにあなたの力をお借りしたいのです。……駄目かしら」

「駄目かしら……って」

調子が狂う。それがユリエルの素直な感想だった。きっと彼女が話した内容は危険なことなのだろう。だが、まるで危険な感じがしない。遠足があるから手伝って、というような口調で話す女にただ困惑を見せるしかなかった。

「ちよつと待つて。まずあなたの名前を教えて。それから何があるの？」

「あら、ごめんなさい。私ったらまだ名乗ってなかったですね。私はマグナスⅡハウルセン。それから、彼はイーデンよ。後は皆知っているわね」

「イーデンはマツラサ唯一のデスクワーク専門だ。つまり、唯一の非戦闘員」

聞こえるほどの声で耳打ちするパオロに、イーデンはこめかみに青筋を立て歯ぎしりをする。なんとか平静を繕うと眼鏡の縁を押し上げ、観察するかのようにユリエルを見た。眉の間の皺は平素からそうであるかのようにくつきりと刻まれている。そのせいか大分年を取って見えたが、ハウルセンと同じ年なのだそうだ。

「ユリエルとかいったな。我々は、皆、ジェルナを打倒するために集まっている。手っ取り早く言えば、我々はマラツサの一員だ」

ハウルセンの話では埒があかないと見たのか、イーデンがその後を継いだ。パオロもザックスもレジオンも、それぞれに頷く。

「ジェルナとの和解は、はなはだ不本意だが、赤い魔物が活発化している現状ではいたしかたがないこと。それで、数日後に控えた和睦に、お前も参加させると言うことだ」

「イーデンっ！」

ハウルセンの声は、言われたユリエルよりも早かった。両手を腰に当てて、イーデンの顔を睨みあげる。本人は怒っているのだろうが、優しい顔に作った怒りは迫力に欠けた。

「そんな言い方は、失礼よ。私たちは自分から集まってきたメンバーなの。ジェルナのように強制するのなら、マラツサなんてない方がいい。私の考えにあわないのなら、無理にいてもらわなくてもいいのよ」

ハウルセンの講釈にユリエルは気づかれないように笑った。甘い。きつとイーデンはパオロから私が愚闇であることを聞かされている。だから、少しでも戦力の幅を増やすために強制してでも従えたいのだろう。その考えは実に利になつていた。愚闇を見つけることは、森の中に隠した木の葉を見つけるのと同じくらい至難だからだ。闇狩だとわかつた時点で強制的にジェルナに連行される世界で、愚闇で居続けるのは難しい。下手をすれば、ジェルナから命を狙われることもある。ユリエルは自分の過去を振り返り、ハウルセンの甘い考えを鼻で笑った。笑わなければ、自分の生き方を否定しなければいけなかった。

「ごめんなさい、ユリエル。イーデンが失礼なことを言って。私はあなたを無理に従わせる気はないの。お願いはします。だけど、決めるのはあなたです。あなたの意志をマラツサは尊重します。」

尊重か、ユリエルはそう思い、パオロとザックスを盗み見た。

「それを約束できるだけの力があなたにあるという証拠は？」

「あります。私が、マグナス」ハウルセンがマラツサのリーダーです。まだ小規模な組織だけどリーダーの命令は絶対ですから。安心してください」

「あなたが……リーダー？」

その驚愕の事実、ユリエルの脳裏で全てのことがつながった。ハウルセンは一応の信頼の元でリーダーになったのだろう。だが、その甘い考えは全てが迎えられたわけではない。今回のように彼女の知らないところで圧力を加え、従わすこともある。現に、パオロたちは、ラグスを連れて行き、ユリエルから隔離している。言葉には出さないが、拒否したら人質にされるのは目に見えていた。多分、ゲイルについても誰かが監視をしているのだろう。そうでなければ、いくら執政官の力があっても情報が流れたとき、ジェルナを追い返すことはできない。

（所詮、反ジェルナといってもやっていることは似たようなものね）他人はどうであれ、闇狩に対しては、ジェルナだろうと、マラツサだろうと変わらない。当人の意志を無視して強制的に従わせるだけだ。信じるだけ無駄なのだ。それはユリエルが今まで生き抜いてきた末で、見つけた答えだった。

「わかった。協力しよう。……ただし、条件が一つある」

「条件？ 何かしら。できるだけ期待に添えるようにします」

「簡単なことよ。私はマラツサには入らない。ラグスの怪我が治るまでは依頼を受けるけど、それ以外は知らないわ」

突きつけられた条件に一同は顔を見合わせた。できることならマラツサに入ってもらいたいと、少なからず顔に書いてある。パオロはあからさまに、どうせなら仲間になろうぜ、といってくる。ハウルセンは少し思案をしていたが、おもむろに口を開いた。

「それで今は十分だ」

発せられたのは、ハウルセンの柔らかい声ではなかった。低温の男の声。だが、それはユリエルの記憶の中にある声であった。

「ゼノ＝ウディウムっ！」

新たに部屋に姿を見せた男の目に映るユリエルは、驚きにわずかに目を見開いたが、すぐに怒りに変わった。ユリエルのその態度に、ゼノは苦笑した。パオロたちは二人を交互に見るしかなかった。

「旦那、もしかして知り合いなのか？」

ぽかんとパオロの開いた口から漏れた言葉にゼノは重々しく頷いた。

「しかし、あの二人が知り合いだったとはな」

「世間は狭いつて本当だったんっすね」

テーブルに並べられた皿は次々に空けられていく。レジオンは給仕係に空いた皿を下げさせた。

すでに夜は終わりがけていた。

どんなときにも食料の確保だけには余念のない二人に、夜食とは言い難い量の食事を作る方はたまったものではない。といっても、本日の料理を作っているのはハウルセンであったが。

「でも兄貴、これでユリエルさん、こっちの仲間になってくれるんじゃないっすか」

ザックスのささやきに、パオロは手を止め、フォークに刺さった肉を眺めた。レジオンもグラスを傾けながら、黙って聞いている。

「さあ、どうかな。何かもつとこう決定的なものがないと、ユリエルは無理なんじゃないかな」

「？」

「それはどういうことですか。よろしければお聞かせもらいたいですね」

肉を口に放り込んだパオロは、レジオンの問いに肩をすくめただけだった。フォークを持ったまま額を搔くと、グラスに注がれた液体を飲み干す。わずかな時間であったが、待たされる方にしては長かった。

「別に、何か根拠があつてつてことじゃないけど、よ。ま、なんて言うか、直感みたいなもんだな」

「直感ですか」

ため息混じりの声を、パオロは聞かないように口の中に食べ物を入れていく。そして、最後に残った添え付けの人参をこっそりザックスの皿に移そうと試みる。

「ちゃんと人参も食べないと駄目っすよ」

母親かよ、とつつこみたいのを我慢し、パオロは嫌々そうに人参にフォークを刺した。

「ま、それでも次のビックイイベントには出席してもらえそうだから、いつか」

フォークの人参を口に放り込み、パオロは横目でドアをちらっと見た。

（不本意だが。あとは、旦那に任せるか）

そう思うと、一気に酒で飲み干した。

パオロが見たドアの奥に、二人はいた。

静かな室内には、ラグスの寝息が聞こえるだけだった。ゼノが与えた薬草は鎮痛作用があるらしく、ラグスの寝顔は穏やかであった。その様子に、ユリエルの顔は自然にほころぶ。ベッドを挟んで立つゼノは、意外そうに、そして懐かしげにその様子を見ていた。

「思い出すな」

何を、と問いたげにユリエルはゼノを見た。

「お前と出会ったときも、こんな感じだったと思ってな」

「私と」

「ああ。血まみれで化物の死骸と一緒に倒れてたのを助けたときも、今見たいに看病をした。…あれからもう八年か」

目を伏し、ユリエルはラグスを見る。

八年前。ユリエルとゼノの二人が出会ったのは、半分崩れ欠けた小屋の中だった。ユリエルは一二歳で、ゼノは今と外見こそあまり変わらないが、二〇歳前後だったはずだ。

二人が知り合うきっかけとなった家の主は、その時すでにこの世に亡かった。各地を転々とし、大地に穴を掘る姿は、近隣の村人から狂人と思われ敬遠されていたが、彼、ムハルド・メリサルはそのことを大して気にもしていなかった。彼はジェルナの目を盗み各地の遺跡から過去の遺物を掘り出すことに一生を捧げていた。

現在、この世界の科学力は過去の遺物より遙かに劣っていた。特にレーザー式の銃は、火薬式のそれとは違い、現在の技術で製造することができず、遺跡から発掘するしかなかった。ユリエルの持つルアムーンのようなレーザーと火薬の両方を使える両式の銃は特に希少だ。それ故に、ジェルナは遺跡の管理を厳しく行い、渡り鳥による盗掘を阻止していた。だが、ムハルドは渡り鳥ではなかった。自分は考古学者だと誇らしげに語る姿は、ユリエルの中でいまだに生き続けていた。その彼が、旅のさなかにユリエルを拾い、知識と銃の腕、そしてルアムーンを与えたのだった。はじめて白銀の銃を手にしたとき、ユリエルはなぜ技術が失われたのか尋ねたのを覚えている。ムハルドはひどく悲しそうな顔で、そのごつごつした大きな手を彼女の頭に寄せ、

『ルフィアを……皆がルフィアを怒らせたのさ。だから、神の鉄槌がおきたんだよ』

と教えてくれた。彼女がどんなに馬鹿げたことを聞いても、彼は丁寧に答えを返した。その知識は広く、ありとあらゆることを不気味なぐらいに知っていた。特にこの世の成り立ちについては、まるで見てきたことのように詳しかった。ムハルドは、それが仕事だからさ、と穏やかに笑っていた。そんな彼が死んだのは、ユリエルがはじめて闇に魅入られし者を殺した日だった。ムハルドを訪ねに来たゼノと出会ったのはその翌日のことである。

「それにしても、元気そうで何よりだ」

「そうね。あなたも」

極力会話を避けようとするユリエルに、ゼノは苦笑する。

「そういうところは相変わらずだな」

まるで関心を示さないユリエルだが、ゼノも一向にそれを気にせず続ける。

「他者を避け、自分を見せない。出会ったときと変わらないな。それとも、ムハルドのことをまだ気にしているのか」

ムハルドの名に、ユリエルは一瞬緊張したが、それも注意深く見ていなければ気が付かない程度のことだった。ムハルドが死んだとき、あつたのは闇に魅入られし者の遺骸のみで彼の亡骸は肉片一つなかった。彼女はゼノに、闇に魅入られし者が食べたのだと伝えた。それ以上は、何を聞かれても答えられなかった。

「先生のことは関係ない」

追求を恐れるように、ユリエルはその話題を断ち切った。

「そうか、ならいい。それに、」

眠るラグスを見、ユリエルの横顔に視線を戻す。

「彼のおかげで変わったところもある」

「私が？」

「和睦の噂は聞いているだろう。昔のお前なら、真偽に関係なく危険な場所からは遠ざかったはずだ。それを他人の命のために冒すとは、変わったとしかいえないだろう」

ユリエルはゼノに向きなおると、自嘲気味の笑みが現れた。

「わかってるわ。らしくないってことぐらい」

「いや。その方がお前らしいと思うがな。それよりもここで会えたのは運がいい」

ゼノの声音が固くなり、渡り鳥のそれとなった。

「知つての通り、和睦の話だが、あれは事実だ。そこでお前に一つ頼みがある」

「断るわ」

問答無用の台詞にもゼノは引く気配をみせない。ゼノの言うとお

り、ラグスの怪我のために仕方なくここに来たのだ。たとえ金になつたとしてもこれ以上の騒動に巻き込まれなくなかった。

「あなたのジェルナ嫌いはこっちも承知の上のこと。ジェルナの鼻をあかすためにマッラッサについたみたいだけど、私を巻き込まないで私はマッラッサに入るつもりはないわ」

「交渉の余地なしか。嫌われたものだな」

「あなたにしてもパオロにしても、私を買いかぶりすぎている。ただの 渡り鳥 にジェルナと争えというの。冗談じゃないわっ！」

「闇狩が、ただの、と言えるのか」

ゼノは敢えてユリエルの逆鱗に触れた。冷静すぎる男に、ユリエルの声は大きくなる。

「好きでなつたのならその言葉、甘んじて受けるわ。でも私は、なろうと思つてなつたんじゃないっ！」

あまり見せないユリエルの激昂に、ドアがおそろおそろ開けられた。

「取り込み中悪いんだけど、そんなに大声だとラグスが起きるぞ。それから……ここにはマッラッサじゃないのもいるんだから少し声を落としてくれないか」

頭だけ出すパオロの忠告に、ユリエルは自分が激怒したことに気がつく。その気まずさからか、彼女は視線を避けるように部屋を出ていった。ザックスのうるたえながらも部屋の場所を教える声が二人の耳に届く。どうしたものかと、パオロは頬を掻いた。

「旦那、言い過ぎじゃないの」

パオロとさして変わらぬはずの年齢なのに、旦那と呼ばれても動揺一つ見せないゼノに、いつもの如く、パオロは心密かに舌を出す。「どういう知り合いか知りませんが、言つていいことと悪いことがあると思うけど」

「そうだな。だが、時として事実を突きつけなければいけないときもある」

「言い分はわかるけどよ。虫が好かないな。確かにどんなに隠そう

としてもユリエルが愚闇で」

「闇狩だ」

ゼノの訂正に、パオロは抗議の気をそがれた。

「どの呼び方をしても嫌うだろうが、蔑みの言葉よりはましだろう」
横に立つ自分よりも頭一つでかい男を、パオロはにらみつける。

結局、心配するなら最初から態度に見せろつとでかかったが、言葉を飲み込む。

（相変わらずいけ好かない奴だ）

言っていることが正当なだけに、さらに腹に据えかねる。もともと気が合わないのだから仕方がないと、これも毎回のことだが思い直す。

「ユリエルが闇狩である以上、ジェルナにつくか、その敵に回るかのどっちかでしかない。だからマグナス」マラツサのように、腹をくくるしかないって言いたかったんだろ」

刺々しさが隠しきれないパオロに、ゼノは嫌われ役が板に付いたなと自嘲する。

「パオロでさえ俺の言葉がわかったんだ。ユリエルもわかってくれる。それに、ユリエルが必要なのは俺だけじゃないだろ」

パオロもザックスもわかっていた。今のマラツサに一人でも多くの戦力が必要なことを。特に闇狩は闇に魅入られし者が活発化した今、喉から手がでるほど欲しかった。そのために、二人は騒ぎに乗じてユリエルをここに連れてきたのだ。

「そういえば、ゲイルだったか。そいつの足取りを追った者からそろそろつなぎが来る頃じゃないのか」

そんなこともあったな、とパオロは思い出す。基本的に中心メンバーを知らないように、つなぎや交渉は商人のパオロが担当していた。特にゼノは裏で情報の収集に当たることが多く、表に顔を出すことはほとんどなかった。それも彼が 渡り鳥 だからなのだが、表と裏、と大概ペアで評されるのもパオロには気に入らなかった。決して自分がゼノに劣るとは思わなかったが、明らかに他人の評価

はこの褐色の男の方が上なのである。

まだ文句は言い足りなかったが、そんな感情も子供っぽくって、さらにゼノに劣るようで気に入らなかった。腹立たしさを隠せないまま、パオロは無言で部屋を後にしようとする。

「和睦は間違いなく成立することになる。だから、ジェルナとの全面衝突はないぞ」

動きを止めた背中が無表情に応じる。

「それはどっからの情報だ」

「個人的な情報網だ」

暗緑色の目が白銀の男を射抜く。その目からは、普段の陽気さを感じられない。ゼノは知っている。陽気さの下に隠されたジェルナへの憎悪を。マラッサに集まった人間は程度の差はあれ、ジェルナを恨んでいた。今はまだ、復讐のための集団だが、いずれそれが変わることになるだろう。この組織に足りないのはマグナス「マラッサ」に代わるリーダーだけであつた。

（マラッサが大きくなれば、奴のもとに近づくのは必至だな）

そのためであれば、多少の恨みなど痛くもかゆくもない。また、その覚悟もしている。

「それで、その根拠は」

これを聞いた後、パオロは言葉を失うだろう。そんな予測とも言えない思いを持ちながら、ゼノは口を開いた。

「ディオムが闇に喰われた」

一人、暗い部屋でユリエルは息をついた。人前で声を荒げたのは久しぶりのことだ。興奮が収まるにつれ、緊張が疲労に変わっていく。倒れるように、ベッドに横たわる。ばやけた視界では夜が薄らぎはじめていた。

かつて夜は闇に魅入られし者の世界として人々から嫌われていた。

大流出　　が起きる前のことだ。夜、目を閉じ、明日も朝を迎えられるようルフィアに祈る。闇に魅入られし者の活動は、今が信じられぬほど活発だった。毎日どこかの集落が被害を受けていた。都市ですら防衛に徹するしかなく。他都市との交流はほとんど途絶えていた。それなのに、ジェルナはどこからかぎつけるのか、闇狩に目覚めた人間を連れて行くのだ。ユリエルがそれから漏れたのはただ運が良かったとしか言えない。だが、それが幸運だったのかは今でもわからなかった。

闇狩であつたことを恨んだことは数え切らぬほどであつたが、闇狩でなければ今まで生きてこれなかったのも事実である。ゼノに指摘されなくとも理解している。闇狩としての能力を持つ以上、ジェルナに入るか、マグナス「マラツサ」のように反旗を翻すしか選択肢はないということ。今はまだ、追っ手はないが、いずれ他の愚闇同様に自分も抹殺対象になるのだろう。そうやって今まで、ジェルナは不穏分子を排除してきたのだ。自分だけが例外などありえない。

ユリエルの腹は当の昔に決まっていた。服従するぐらいなら、戦うだけ戦って死んでやろう。ゼノのようにジェルナに対して恨みはなかったが、相容れないものを感じているのも事実であつた。それは一種の生理的嫌悪みたいなものである。

（だからといって、マラツサに入るつもりはないけど）

もし入ったら嫌でも人と関わることとなる。仲間意識なんてごめん被りたい。というのがユリエルの真情であつた。

ベッドに身を沈め、闇を感じる。ユリエルは闇が好きであつた。何もない闇に身を沈めると心が落ち着いた。闇が好きなどと知られたら、袋叩きにぐらいはあうだろう。運が良ければそのまま死ぬるかもしれない。この生き地獄で生き続けるぐらいなら、それも一つの手だろう。

静かな心地よさの中で不毛なことが浮かんでは消えてゆく。ゼノとの会話のせいか、いつしかユリエルは昔を思い出していた。

（そういえば、私が闇狩だと気がついたのは先生だったはず）

あれはムハルドに出会ったときのことだ。数匹の闇に魅入られし者にムハルドは襲われた。今は活動している数が少ないのか、一匹で活動することが多かったが、あのころは複数で動くのが普通であつた。多いときは数十匹の闇に魅入られし者が三日三晩、都市を食い散らかしたこともあつた。いつ補食されるのか、常に恐怖と隣り合わせの生活だった。

何故あるとき自分がそこにいたのか、すり切れた記憶に答えは無かつた。だが、ユリエルに差し出されたためと土だらけの手は今でも思い出された。

（先生は信じてくれた。悪魔の言葉を……聞いてくれた）

重くなる瞼の裏で、あの日の会話がよみがえる。

『……いたって……かえりたいって』

『君は彼らの気持ちが分かるのかい』

『……きえちゃった』

『そうだね。……でも、これでよかったんだ』

『……』

『きつと彼らは帰りたい場所に帰れたはずだ』

汚れた手を服で軽く拭くと、小さい子供の前にさしだす。小さなうつろな目が手、顔とゆっくり動く。

『僕はムハルドだ。一緒に行かないか』

しばし時間が流れたが、少女はその手に自分の血で汚れた小さな手を置いた。

時間は少し遡る。

ユリエルとゼノが話をしている頃、ザフィートでも話し合う者がいた。

眼下に広がる光の洪水を楽しむこともなく、ジェルナザフィート支部で舌戦が繰り広げられていた。

「何だとっ！ みすみす見逃せというのかっ！」

ガタンッと激しくデスクが叩かれ、目の前の画像が乱れた。デスクに置かれた通信機が浮かび上がらせるのは、枯葉色の髪をした二十代後半の青年であった。画像に映る者も、見る者も共に濃紺のジェルナの制服を見につけている。

「カシエルっ。貴様あ、いつから俺に指図するようになったあっ！」

空気を震わす怒号はたいいていの者なら腰を抜かすほどだった。カシエルは眉も動かさずに、小さく息をつくと、一回りも年上の男にもう一度、命令を告げた。意外なことにゴルウェイが興味を示したのはディオム崩壊ではなかった。

「ゴルウェイ軍事次官、先ほども申したとおり私は卿に命令をしているではありません。ブラウヒツチュ総帥の決定事項を伝えているに過ぎないので」

「ほう、それではカシエル軍事次官よ。何故今回の命令に限り、アーチボルド軍事長官ではなく卿が伝達をするのかそのわけを聞かせてもらおう」

顎に生えた自慢のひげをさすりながら、ザフィート市軍長ザン

ゴルウェイは答えて見るとにんまりと嫌みを含んだ笑みを見せた。

画面の奥でカシエルが齒がみしているのがわかると、鼠を追いつめる猫の如く相手をいたぶりたくなる。ジェルナ軍事部門一の好戦家で名を知られるゴルウェイの最近の狩りの標的は、マラツサと年下の同僚であった。

「確かにゴルウェイ軍事次官がおっしゃるとおり、今回に限り伝達が私になったのは不思議に思われようが、私も命令されてのこと。

理由を問われても答えようがありません」

「答えようがないとは、よく言ったもんだ。どうせ経済のあの女がでしゃばったんだろうが」

椅子ににふんぞりかえって座る。その見事な体格に、椅子が悲鳴

を上げた。どうみても高官の取る態度ではなかったが、その剛力の前にたしなめる者はいなかった。カシエルも以前はたしなめたが聞く耳を持たない態度に、その氣力をなくした。

「確かに経済次官が三部会議に出席なさっていました、それは経済長官が」

「甘いカシエル。そんなただの方便に決まっている。大方、ミラーの腰抜けは蛇女に食われただけよ。卿みたくな」

そんなこともわからぬのか、とカシエルを見下げる目が語っていた。

三部会議はジェルナ全体の方針を決める重要な会議であった。ジェルナは総帥の下に三部門を置き、総帥と各部門の長官、そしてジェルナ本部がある三大都市の一つルレスフィアの市軍長をいれた五名により三部会議は行われる。ただし、各部門の長官が欠席できない時に限り特例でその部門の次官が出席を認められていた。経済部門は現在、長官のフレッド・ミラーが療養中のため次官のP・ステアラが三部会議に出席していた。噂ではミラーの療養もステアラが毒を盛り、その地位を我がものにしようと謀略しているのだとささやかれている。そもそも軍事部門と経済部門の仲は決して良好とは言えなかった。元来、闇に魅入られし者をせん滅するために、ジェルナは結成されたのだが、結成して一五〇年以上も経てば、結成時の理念など埃のようなものだった。結成当初は、軍事と化学の二部門しかなかったのだが、次第に人数が増えたため、経済部門が設立されたのである。軍事部門がジェルナの主流であるため軍事部門はなにかと優遇措置が執られていた。例を挙げるなら、経済と化学には長官・次官共に一人であるところ、軍事部門のみは長官一人、各市軍長を兼ねた次官が三人である。三部会議も軍事部門のみ長官・次官の二名の出席が認められていた。経済部門も設立当初は軍事部門と折り合いが良かったようだが、扱う金額が巨額になるごとに、発言力を増し、大流出 至ってその地位を化学部門の上にのしあげた。軍事・経済両部門の軋轢が表面化したのもそのころである。

その苗床を利用し、ステアラが経済次官に就任したのが数年前のことであった。闇狩が高官を占めるジェルナの中で、非闇狩が高官になるのは難しかった。がここ最近、化学部門を口火に非闇狩が次官に立て続けになった。今年になり、不可能といわれた非闇狩の軍事次官に若きカシエルが就任したのにはステイラが裏で何かしたのだと、まことしやかに語られていた。カシエルにしてみればいい迷惑である。同じ軍事次官といっても、任されている都市により力関係があり、彼の担当しているディオムは、その中でも一番下だったのだ。上官三人が三人とも噂を鵜呑みにし、カシエルをステアラの飼犬と思っているのだから、風当たりは一層厳しかった。かといって追従もできない性格に恨めしさを感じていた。

「ゴルウェイ軍事次官の言も一理ありますが、その話題を議論するのはまた後日に。今は、先に申し上げましたが、ブラウヒツチユ総帥の指示通り、マラツサとの和睦を成立させ、一刻も早く本部にお戻りください」

「はっ、せっかく鼠どもを一掃できる機会だというのに、異例昇進した非闇狩に邪魔されるのは虫酸が走る。おい、カシエル、ディオムの市軍長殿に伝えておけ。赤い魔物に都市を食わせて、市軍長殿のみのうのうと生きておいでか。所詮、非闇狩には荷が重すぎるのだとな」

ゴルウェイはそこまで言うと、通信を一方的に断ち切った。椅子に深々と腰掛けると、デスクに太い足を乗せる。その時にデスクの上にあったグラスが落ちたが、わずかに目を向けただけであった。（あの小僧め。どこまで図太いんだ）

最後まで表情を崩さなかったカシエルに、腸が煮えかえる。発散できなかった怒りに、思い切りデスクに足を叩きつける。その轟音に、隣に控えていたラツツ市軍次官が姿を見せた。カシエルよりやや若いラツツは、二五歳とこれまた異例の若さで昇進をした非闇狩であった。カシエルの昇進の影に隠れ、その昇進が口にかかることは滅多になかった。その最大の原因はラツツが上官とただならぬ関

係にあつたからである。一部の者は、日夜問わずラッツを側に置きたいがために、自分の裁量で人事が動かせる市軍の次官にしたのだと上官の腐敗に嘆いた。事実、都市に常駐しなければならぬ市軍次官を、ゴルウェイは二度も定例の部門会議の折りにルレスフィアに連れてきていた。

ラッツは荒れた部屋を一瞥すると、真つ直ぐにゴルウェイのもとに近づいた。鼻息荒いゴルウェイの姿にやれやれと内心では嘆息をつきながら、男らしくない秀麗な顔に憂いを見せた。

「ご機嫌が優れないようですね。閣下」
「ラッツか」

差し出された手にすんなりラッツは身をゆだねる。

「本部からの通信とお見受けしましたか？」

「ああ、カシエルからだ。総帥の名を出せば何でもできると思つて若造め。和睦をしろだと。ふんっ、ブラウヒツチュも年を取つたもんだな」

「昨夜のアーチボルド長官からの通信の通り、作戦は変わらずに実行するように手配してあります。先ほどの通信の件も私以外知られておりません。後は、閣下が狩りをお楽しみになるだけです」

ラッツは妖艶に微笑む。市軍の中では男娼崩れと陰で言われているが、それがなんだ、とラッツはその笑みの裏で語る。武芸や戦術では他者に勝てないことをラッツはよく知っていた。だから、勝てるところで勝負をしたのだ。容姿だけは自他共に優れていると認めている。それを利用して何が悪い。負け犬の鳴き声はラッツにとって勝利を彩るオプシヨンでしかなかった。

「ですから、和睦までのあと数日の間に、閣下にご機嫌を直していただかないと」

下卑た笑みを見せたゴルウェイは、おもむろに立ち上がるとお気に入り部の腰を抱き、その顎に手をかける。

「もちろん、その役目はお前がしてくれるのだろう」

「閣下の仰せの通りに、私は従うだけですよ」

ゴルウェイの手に細く形のいい指を添える。榛色の瞳が妖しくきらめく。

「それではそのようにしろ。お前に見せてやろう。このザン＝ゴルウェイに睨まれたも者どもがどうなるかをな」

片手に花を抱き、豪快に笑うと、ゴルウェイは自室へと続くドアに手をかけた。

ザフィートより遙か北。この大陸の化学力を結集させた都市ルレスフィア。その都市の中心にそびえ立つジェルナ本部に、ポナート＝カシエルはいた。先ほどまでのゴルウェイとの無意味な通信に氣力をそがれ、与えられた執務室に入るなり、盛大に息を吐いた。ドアに背を預け、苛立たしげに前髪を掻き上げる。毎回のことながら狭量な視野しか持たぬ上官たちと話をするたびに体重が減る気がした。

二度目の溜息と同時にドアを叩かれた。

「軍事次官、いつまでドアを塞いでいるおつもりですか。職務妨害で訴えても構いませんが」

上官を上官とも思わない硬い物言いに、カシエルは無言で苦笑すると、部下のためにドアを開けた。声音と代わらない生真面目で堅苦しそうな男が冷めた目をしてそこに立っていた。プライドの高そうなエリート然としたその男は、上官に断ることもなくずかずかと執務室に入っていく。

「わずか数分、ドアを塞いだけで訴えられるのか。ジェルナの規則はいつからそんなに厳しくなったんだ、ジェイク」

ドアを閉め、カシエルはジェイクに近づく。眼鏡を人差し指で押し上げ、ジェイクは横目で上官を睨んだ。

「名前で呼ぶな。貴様にそう呼ばれるのは虫酸が走る。それから、私が問題にしているのは時間ではない。回数だ。貴様が上官と会う

たびに必ず部屋の前で待たされるのでは、職務に支障をきたす。そうなることは予測の範囲内だ。対処するのは当然だろう」

人の耳がないことをいいことに、ジェイクは敬語を使うのをやめた。言いたいことを言い終わると、彼は自分のデスクにつき、カシエルの存在を無視して仕事をはじめた。

「お前の意見はわかった。が、治せるかは自信がない。ジェイク、お前から言ってくれないか。ザフィート市軍長殿に素行を正すように」

「馬鹿なことを。ジェルナは実力世界だ。素行の善し悪しが気になるのなら、貴族社会にでもいけばいい。だが、……男を抱こうと興味はないが、公私混同は困るな」

うずたかく積まれた未決済の書類に、ジェイクは次々と目を通していく。その書類の山は、ディオム崩壊により生じた事務処理だった。ゴルウェイの先ほどの揶揄が思い出される。カシエルがルレスフィアにいたのは決して逃げたせいではなかった。最近、頻発に起こる闇に魅入られし者の事件にどのように対処するか、特別軍事会議を開くと市軍次官ともども呼び出されたのだった。もちろん、ゴルウェイもそのことは知っている。

（会議にもまともに出席しない奴が上官とは）

腹いせまがいの悪態を胸中でつく。だが、ディオム崩壊の事実が変わるわけではない。カシエルはその事実を知った時点で、現地調査に名乗りを上げたが、退けられた。その代わりに上官が言い渡したのは、監視付きの軟禁である。不幸中の幸いは、その監視役がジェイクだったということだ。ジェイクとは過去のいざこざのせいで自分のことを嫌っているのは知っていたが、闇狩でも非闇狩でも公正なルールで見るところは気に入っていた。

「苛つくのも結構だが、さっさと仕事をしろ。貴様の尻拭いなどやるつもりはない」

すでに半分ほど書類が片づいたジェイクは、しびれを切らして力

シエルを見上げた。

「ああ、それから、ワルトシュタイム市軍次官だが、先程取り調べが終わったらしい。担当官に知り合いがいたので、終わった時点でこちらに顔を出すよう伝えさせた」

ジェイクの事後報告にカシエルは頷く。ワルトシュタイムの取り調べは、どうひいき目で見てもカシエルの巻き添えを食らったものだ。事実がどうであれ、カシエルにはそうとしか思えなかった。軍事次官就任以来、何かにつけてカシエルのミスを捜し出し、あわよくば降格させようと上官たちは躍起になっていた。そんな彼らにデイオム崩壊は恰好の餌である。ここで少しでもカシエルの粗を見つけ、こじつけてカシエルを失脚させようと言うのだらう。そのためワルトシュタイムが入念な取り調べを受けたのだった。カシエルの処置にしてもすでに有罪が確定するのが目に見えている扱いだ。以前からその傾向はあったが、ここにきて重要な書類が一切まわされなくなった。罪が確定していないので、会議等の出席は認められてはいたが、彼の行動は常に監視されている有様だった。あからさまな疑いの視線とデイオム崩壊の事実の重さが、カシエルの神経をすり減らしていた。

（今は他人の粗探しよりも、闇に魅入られし者の異常行動の調査と緊急防衛、それと今後の対策を考えないといけないだろうに。なわばり争いをしている場合じゃないのがわからないのか）

彼は決してステアラの犬ではなかったが、こんな時には彼女の唱える軍事無能説に賛同したくなる。消えない苛立たしさに、ジェイクに向ける口調が刺々しさを増す。

「仕事をするにもその仕事がなくてね。仕事をさせたいのなら、軍事長官殿に言ってくれ。他人の粗探しで忙しいとは思うが。いや、有能な秘書官殿ならそれぐらい言われなくともわかっていたか」

ぴくりとジェイクのこめかみが微かに動いた。眼鏡の下の冷たい視線がさらに温度を下げる。舌戦が開始されようとしたとき、豪快なノックが割って入った。

「ワルトシュタイム、お呼びにより参上いたしました」

ノック同様、快活な声がドア一枚隔てているというのに、部屋に響いた。ちっと口の中だけで舌打ちをすると、ジェイクは上官の許可を得ずに入室を許可した。開かれたドアから、白髪の小柄な男が入ってくる。ワルトシュタイムは律儀に、上官に敬礼をする。

「疲れているところをお呼びだてして申し訳ありません。この後に休暇を出しますので、今しばらくおつきあいください」

カシエルの時とはうってかわるジェイクの口調には、尊敬の念が込められている。六〇歳に手が届きそうなワルトシュタイムは腐敗が激しいジェルナの中でも、珍しく騎士道に通じた人間だった。闇狩であっても鼻にかけることなく、日々己を磨くことを怠ることのない彼は、出世からは疎遠であつたが、人望は厚かつた。

「いや、エミリ力秘書官、その必要はない。この大事なときに休むほど老いぼれたつもりはない。時に市軍長」

「何ですか」

向き直つた敬愛する部下に椅子を勧める。ワルトシュタイムは断つたが、やはり徹夜と執拗な取り調べが堪えたのか、しぶしぶと腰を下ろした。

「ディオムの件ですが、我々も本部とは別に調査をしたらいかがでしょうか。本部のやりようにけちを付けるつもりはないですが、本筋とは違うことばかりをしているように感じられまして。赤い魔物の生態の特徴が少しでもわかり、せん滅への礎にでもしなければ、やりきれんわ」

最後の方は声が震えていた。本部から派遣されていたカシエルとは違い、ワルトシュタイムはディオムに暮らし、家族や友人たちがそこにいたのだ。特に先月、息子夫婦に孫が生まれたばかりだった。それを祝いに行ったのは、確か先週のことだ。無理矢理抱された小さな赤ん坊の重さが、カシエルの両腕によみがえる。

（ゴルウェイたちの言動に苛立っている場合じゃない。やることは他にある）

辛い仕事もろくはないのだ。この時間を無駄にする必要もない。そこまで考えて、カシエルは気づき、ジェイクを見た。先程、ジェイクが言おうとしていたのはこのことだったのか。なんだかんだといいつつも、結局、ジェイクも今回の件については上層部のやり方が気に入らないらしい。相変わらず素直じゃないなと思うも、頼がゆるむのは止められなかった。

「何を笑っている気色悪いぞ。何か勘違いしているようだから言っておくが、貴様が行うことは全て私を通じて上に報告されている。勝手に嗅ぎ回るのも結構だが、聞かれれば私は貴様がやっていることを報告するだけだ」

嫌いな奴に助言をするのはジェイクのプライドに反するらしい。照れ隠しのつもりか、早口でそう言う。ワルトシュタイムはジェイクの上官を上官とも思わない口調に驚き、口を開けている。カシエルの笑いに気がつき、老兵は背筋をのばし、秘書官はふんつと顔を背けた。

（聞かれればということとは、聞かれなければ報告はなしということか。それで十分だ）

さつきまで停滞していた思考が、急速に動きはじめる。それにあわせ、苛立ちも消えていく。

「それでは、これからの方針を決めよう」
行儀悪く、自分のデスクに腰を下ろしたカシエルは、その時になっではじめて思い出した。

ディオムの異変にいち早く気づいた者は各部門ごとに数人いた。カシエルもその中の一人であった。それはディオム市長長のリグルドに通信を入れたときのことだ。その通信から雑音に混じり人の話し声を聞いたはずだ。

「ワルトシュタイム市軍次官、ディオムにバージル、またはステイルという名の者はいないか」

「馬鹿か。ディオムの人間だけで何人いると思っている。名前だけなら何十人。下手をしたら何百人といるだろう」

聞かれた当人よりも早く、ジェイクが馬鹿にする。すでに居直ったらしく、口調を取り繕うのをやめていた。ワルトシュタイムも上官本人が、文句を言わないのに口を出すのも悪いと思ったらしく何も言わない。ただジェイクの意見に賛同の意を示した。

顎に手を添え、思いを巡らす。リグルドがその名を口にした後、誰かが答えたはずだ。抑揚のない、機械のような声。

『い 生き残り だな。私も所在は知らないが、バージルとステイルがどこかにいるはずだ』

『あいつの居所は見当がつく。残るは、ステイルⅡⅡウディールか』

記憶の箱から飛び出した会話に、カシエルは疑問点を見つける。
(リグルドのこの会話と崩壊に関わりがあるのか？ あるとしたら、生き残り とはなんだ？)

リグルドのことを調べると、経済部門に関わらなければならない。それはゴルウェイたちを喜ばせることとなるが、いまさら疑惑の一つ二つ増えたところでどうにかなるものではなかった。現地に行つて調べられない今、本部と同じことをしても無駄足だろう。ならば自分の勘に頼つてみるのも一つの手だ。

「ジェイクはリグルドの死因と、死亡時刻を調べてくれ。死亡時刻は襲撃前に死んだのか、最中かでいいからな」

「私まで狩り出すのか？ 手伝うと言つた覚えはないが。しかもポリーⅡリグルドだと。貴様が最後に話した相手について調べるのかそれで一体何がわかるんだ」

時間の無駄と言わんばかりの顔をジェイクはする。

「手伝えとは言っていないよ、エミリカ秘書官。これは上司からの命令さ。優秀な君のことだから命令無視をすることはないだろう」
「くっ」

執務を忠実にこなすのをポリシーとしているジェイクにとってカシエルの言葉は的確だった。プライドの高い彼は、命令無視をするよりも、嫌いな上司の命令が聞けないと思われる方が苦痛であつた

からだ。

「それで私は何をすれば良いですか」

「ワルトシュタイム殿には、苦痛だと思われるかも知れないが、知人の消息を探す振りをして、ディオムの全戸籍からバージル、もしくはステイル、Z、ウデールという者を探してくれ。それからリグルドとその両名の関係もだ」

「は、わかりました」

真面目に敬礼をするワルトシュタイムにつられ、ジェイクもおぼろげなりの敬礼をした。

3章

和睦当日。

その日、空は晴れていた。が、雲一つないとまではいかなかった。時折、雲に隠れ日差しが弱まるが、コンクリートの照り返しか、東部指令基地はやけに暑かった。この時期には珍しい暑さに、ユリエルは額を拭った。

（この時期にこの暑さとは異常ね。夏が思いやられる）

そんなのんきなことを考えつつ、空を見上げる。ちょうど大きめの雲が、日差しを遮っていた。その切れ間より太陽をのぞかせる。まぶしさに目を細め、顔を戻した。

（？）

が、何かあったのか再び空を見上げる。

「何かあるのか」

彼女の不審な動きにあわせ、パオロも額に手をかざし上空を見る。少し離れたところで、ゼノがこちらを見ていた。その側には、ハウルセンが立っている。

計画当初、彼女は居残り組であった。マラッサのリーダーが女であることは知られていない。それを逆手に取り、ゼノをリーダーとして和睦を執り行うというのが今回の計画であった。マラッサ設立当初からメンバーにいる彼の實力は皆よく知っており、それが最善策だと思われていた。ただ一人、当のハウルセンが、自分も和睦に立ち会うと言って聞かなかった。なだめすかすイーデンやレジオンの姿をユリエルは馬鹿らしげに眺めた。

「守りたいのよ。私は主人の……マグナス」マラッサの意志を守りたいの。そのためにマラッサのリーダーとなったのです。だから、こそこそせずにジェルナと対峙したい」

いつもの変わらない柔らかい声であったが、その声には見かけか

らは想像できない思いの強さを感じられた。彼女が甘い考えの持ち主であったのは確かだったが、リーダーとしての責務は紛れもなくこなしていた。それを裏付けるように彼女の手は、柔らかなそれとは違い、ごつごつとまめができていた。

「いえ、何でもないわ」

小さく頭を振るユリエルに、パオロらは視点を転じた。濃紺の壁がこちらを見ている。壁までの距離はわずか十数メートル。真意を見せるためか、見渡す限りのジェルナ兵は皆、素手であった。それに対してマラツサは全員が武器を携帯していた。だが、十人にも満たない人数と武器に比べ、その両方で圧倒的な量を誇るジェルナの軍事基地にあつては、それでも対等とは言いい切れなかった。

約束の時間はとうに過ぎていたが、ジェルナ代表のザフィート市軍長はなかなか姿を現さなかった。ハウルセンを囲むように立つマラツサ陣営にはしびれを切らしはじめた者もではじめていた。その筆頭を勝手では赤毛の自称エースだった。

「おいおい、いつまで待たせるつもりだよ。まさかジェルナがじらし作戦か」

相手に聞こえるようにぼやく彼に若い兵士がいきり立つ。どうやらジェルナ兵も上官の遅れの理由を知らないらしい。ただ単に知らないのか、それを言うに値しないのか。ジェルナ兵相手にヤジの飛ばしあいをするパオロたちを尻目に、ユリエルは一人落ちつきを保つ男に近づく。

「何も知らない下級兵をからかって楽しいのかしら。この遅れ、ゼノ、あなたはと思う？」

「問題にすることでもないな。ユリエルはザフィート市軍長がどんな人物か知っているか」

横に並んだユリエルの頭はゼノの肩ほどであった。その成長にゼノがわずかに微笑を浮かべたのをユリエルは気づかなかった。

「ジェルナの好戦家で好色家。闇に魅入られし者と同じで全てを破壊尽くすのが得意」

ゴルウェイの好色家はこの地帯では有名な話である。

この世界では長年ジェルナが闇に魅入られし者と戦ってきたため、それ以外の軍事力がなかなか育たなかった。それに目を付けたジェルナ経済部が運営の寄付金とばかりに金を集め、その寄付金の金額順に都市や街・村を守るようになった。

ゴルウェイがザフィート市軍長になった年、ひどい日照りが続き、多くの村が農作物が育たずに寄付金を集められなかった。その内の一つであったイエノ村は、金の代わりに市軍長好みの娘を彼が満足するまで提供したのであった。ゴルウェイはそれに満足し、イエノ村に十人の兵を在駐させた。二倍に増えた在駐兵に村長は気をよくし、次の年も娘を送り、同じ女は飽きたと返された話は彼の好色ぶりをよく物語った。

「お前の感想は？」

「見た目の派手さに隠されているけど、意外に緻密な計画をたてて、相手を追いつめるのは侮れないところね」

ユリエルの言葉にゼノは口端をつり上げた。

「人を見る目を育てたな」

「子供扱いするのはやめて。それで、問題ない理由は何なの」

「ああ。同じ女は抱かない趣味の男が、ここ半年の間、たった一人に夢中なのさ」

その言葉の意味を悟って、ユリエルは隠すこともなく嫌悪をみせた。

「つまり、和睦よりも女の方がいいってことね」

「女じゃなく男だ。日夜、側に侍らせるために市軍次官にしたほどだから、よほど相性がいんだろう」

「どちらでも同じこと。約束を守れないような奴と和睦を結んでも裏切られるのがおちね。あなたは自信があるようだけど、一戦あるのは必至ね」

ユリエルもあの後パオ口からディオムの件は聞かされている。パオ口にしても半信半疑、いや三信七疑といっても言い過ぎなぐらい

であつた。唯一、情報源がゼノだと言うこと以外信じられる要素が何一つ無い。ユリエル自身、その情報がもたらす利益を考えから除いていた。

「いや、和睦はなるだろう。だが、軍事がすんなり言うことを聞くかどうかは賭だ」

「衝突は起きないんじゃないの」

「全面衝突は、な。一戦もなく和睦になるとは俺も思つてはない」

「あら、パオロの口振りだとそう聞こえたけど」

「あいつは何かと俺に張り合うから、そのせいだろう。それにマラツサーの好戦家もあいつだ」

いつも達観している男の子供っぽい笑みは、ユリエルにとって意外なものであつた。出会つたときから完全無欠の男だったが、ここに来てユリエルは思う。ゼノにもきつと人には言えない重い枷があるのだと。

「それよりもさつきはどうしたんだ」

思いに沈みかけるのを阻止するように、話を振られた。横目で騒ぐ群衆を見る。一体何しにここに来たのか問いたくなるような幼稚な騒ぎは、まだ続いている。

「本当に何でもないわ。雲の上に何かがいた気がただけよ。きつと鳥ね」

「雲の…上」

不安げにゼノは頭上を見上げる。ユリエルもそれにならう。先程より、雲が多くなつていた。日差しが遮られ、幾分だが暑さが和らいだ気がする。

「飛行機か？」

「さあ、どうかしら？ 何かいたような気がただけで、確かに見たわけじゃないから」

「そうか。なら、気のせいだろう。もし飛行機ならとつくに攻撃を仕掛けてきているはずだからな」

言葉の終いの方で、声がかぶる。二人して振り向くと、パオロが

手で呼んでいる。彼の先には制服の違う、あきらかに高官とおぼしきジェルナ兵が立っていた。事態の進展を察したゼノは、愛刀の大剣を肩からおろすと足早にそちらに向かう。ユリエルも足を向けるが、ゼノについた嘘が気になったのか、もう一度空を見た。

雲の合間から見える空に、一抹の不安が胸をよぎる。

（何もなかった。だから何も起こらない）

声もなくつぶやく。何度も何度も自分の聞いた彼らの声をかき消すように。

それが、ユリエルが他人を避ける理由だった。

ザフィートから北西。ディオムから東に見える山の麓に生い茂る森。そこに彼はいた。

木々の間を縫うように微かに届く光は、辛うじて今が昼間であることを告げていた。彼、メーファーズはそこが所定の場所であるかのように倒木の幹に腰を下ろしていた。黒ずくめの中で彼の唇の赤がやけに目立っている。

（ここはどこだ）

今、目覚めたと思われるうつろな目が、地を覆う枯葉を映す。広げた手のひらには、落としきれなかった血がこびりついていて。それはリグルドのものだったが、彼には自分が何をしたのかすら記憶になかった。

（必要とされたからここにいる。それ以外に必要はない）

手から瞳を移すと、耳慣れた音が葉のささやきの中から聞こえてくる。骨を砕き、肉を喰らう音。見ると、ただれた肉の塊が群をなしていた。その手の中には、どこで採取したのか、衣服の残骸から村人とおぼしき人物があった。腸が引きずりだされ、それぞれが思い思いの場所を喰い漁っていた。闇に魅入られし者の口らしいところからは、白濁とした体液がどろどろとこぼれ落ちている。それ

は大地につくと、じゅわわ、と煙りをあげ、つもった葉を溶かした。周囲には独特の腐敗臭が漂っていた。

（私は彼らと共に神に従えばいい。ただそれでいいはず）

メーファーズは立ち上がると彼らの元に歩み寄る。彼の中の埋まらない穴が、その歩みを苛立たせた。自分は彼らと同じ、闇に魅入られし者で、神の僕。そう分かっているだけ余計に彼は自分でも気づかぬ内に苦悩していたのだ。

おもむろに止めた足下で、獲物を漁る赤茶けた物体を黒い瞳はとらえた。衝動的に、メーファーズは手を振り上げ、それに突き刺す。引き戻した手の中には、黒い楕円形のものが握られている。核を奪われた闇に魅入られし者は、仲間の前に崩れ落ちた。その肉を食わんと、我先に肉塊が動く。メーファーズは白煙を上げる手を一瞥し、その手で長い前髪を掻き上げた。

闇に魅入られし者である自分が、なぜ彼らを殺すのか、ルファイアより与えられた使命が、彼に苦悩を与えていた。

『タイ………カエ………タイ………』

赤い瞳を妖しく光らせながら、肉を漁る彼らの声は、木々を走る風と共に、メーファーズの周りを駆け抜けていった。

「私はどこへ向かい、彼らはどこに帰るのか」

誰に言うでもなく漏れた言葉に、遠くで誰かが鼻で笑った。手にした核を握りつぶすと、中から漏れ出た液体を彼は嘗めた。

「地獄に向かい、地獄に還るに決まっている」

前髪で隠された眼はいつの間にか赤く染まっていた。それに呼応するように闇に魅入られし者は動きを止めた。彼にひれ伏すかのように、姿勢を低くしたままうずくまっている。メーファーズが足を出すたびに、肉塊が割れた。ほぼ中心に来たとき、突然、メーファーズは笑った。冷笑と呼ぶに相応しい笑いだった。

「バージルが動き出したか。神を恐れぬ罪人め」

目だけでその方角をとらえると、再び歩みを進めた。

「ならば、我らも動くか」

つぶやきは、閃光を生み、辺りを包んだ。光が消えたときには、いつもの平穏が訪れていた。彼らがいたことを告げるのは、微かに漂うあの臭いのみであった。

東部司令基地はにわかに慌ただしい動きを見せた。和睦をなすために、ザフィート市軍長代理として現れた古参の市軍次官にマラツサは眉をひそめた。市軍長の下にはラッツを含め、数名の次官がいる。今回代理として現れた、シュハラルもその一人であった。

「お前らの気持ちも分からなくはない」

ため息混じりに苦笑するシュハラルもことの異常さに気づいていた。

今回の和睦はジェルナ総帥が取り決めたことだ。その代理としてゴルウェイがマラツサと書面のやりとりをすることになっていたのだが、それを自分の部下にやらせるというのだ。ジェルナ代表がいくら三大都市の市軍次官とはいえ、一地方の軍人が行うとは、誰が思いつくことであるか。

（市軍長になっても、あのいい加減さは治らない、か）

人知れず二度目のため息をつく。決して表には出さないが、この和睦に至るまでのやりとりを思い出すと、あと数十回はため息をついてもいい気がした。実際、和睦の件が伝えられたのはつい数時間前のことなのである。普段なら本部との交信に使われることのない下級兵の端末で、重大な事実はあるとザフィート支部東部指令部に伝わった。回線ジャックにより、かなり乱れた画面で応じたのは本部のカシエル軍事次官とその書記官であった。

『本日一〇を持ち、和睦をなすと、そちらの軍事次官殿に伝えているが、手はずの方はどのようなになっているか』

そう、鼻持ちならない口調で尋ねる書記官に、何のことだとばかり

んとするしかなかった己と部下たちを思い出し、またため息をつく。半ば諦めているが恨み半分の目で、ザフィート支部のある方角を見た。きつとゴルウェイは今もあの小綺麗な同僚を組み敷いているのだろう。

（つたく、好き勝手にするのはいいが、肝心なことは伝えるよな。オレやパスクにつけがまわるんだからよ）

ザフィート市軍の上層部の構成メンバーの半数はゴルウェイと共に歴戦をくぐり抜けてきた猛者たちである。それ故に、ゴルウェイの気性や性格は熟知していた。特に市軍次官のシュハラルとパスクはゴルウェイの両腕と呼ばれる存在で、今回のマラツサ掃討戦の指揮も委ねられていた。思いも寄らぬ本部の接触で大きくその計画が変更させられたが、シュハラルらにこの機会を逃すつもりはなかった。上司同様に彼らもまた経済部門が目障りだったのだ。

「大変遅れて申し訳がない。私はザフィート市軍長ザン・ゴルウェイの代理を務める二・シュハラル市軍次官である」

ザフィート南部出身者特有の黒い肌に白いものが目立つ髪は、ゴルウェイよりも体格は劣るが風格を備えていた。その声に、ハウルセンが足を出すよりも早く、ゼノは一步前にでた。焼けつく風が白銀の髪をなでる。

「ゼノ・ウディウム。マラツサの代理だ」

「代理だと」

「ああ、ジェルナとはリーダーが直々に来ることを条件にされたが、そちらも代理の代理。文句はないだろう」

通常なら、その一睨みで他者を屈することができたが、ゼノの眼光もシュハラルに負けず劣らずに見えた。二〇年以上戦場にあり、赤い魔物による凄惨な現場を幾度と無く見てきた自分が、一瞬でもひるみそうになったのを巧妙に隠すと、渋々了承の意を伝える。隙あらば、隠し持った銃で撃ち抜いてやろうと思っていたのだが、シュハラルは断念せざるを得なかった。一対一は分が悪い、そう長年の経験が告げていた。ゼノがシュハラルの企てに気づいていたかは

分らないが、ハウルセンが名乗りを上げていたら、銃弾を浴びていたのは必至だろう。

ゼノとシュハラムの和睦会談は静かに進められた。そもそも和睦の原型はすでに決まっており、残すはこの儀礼的な書面のやりとりのみだった。百メートルほど離れた位置で並ぶ両陣営。その中央付近で、立会人のもとにゼノとシュハラルは書面に記入していく。マラッサの立会人はザックスが、ゼノの指名のもとになった。パオロも彼の思考が読めたらしく、気取られないようにハウルセンの側に立っている。いつ不測の事態が起きても、彼女を守るようにだろう。もしかしたらはじめから二人はこうするつもりだったのかも知れない。一人、マラッサの輪から離れた場所で、ユリエルは状況を見守った。何が起きてもいいように、ルアムーンを手にし、背後にも注意を注ぐ。

時折、やはり気になるのか、上空を見上げる。

書面の交換はもうすぐであつた。それが終われば、和睦はなる。

何か起こるのなら、そこである。マラッサに緊張が走る。

「来るっ！」

不意に背後から上がったユリエルの声に、パオロたちは振り向いた。それ幸いにと、隠れていたジェルナ兵が銃口を向ける。

「ちっ、やっぱりいやがったか」

咄嗟にハウルセンの前に立ち、盾となるパオロ。その彼をも押しわけ、ユリエルはゼノに、いや、そこにいた人々に向かい叫んだ。

「逃げろっ。闇に魅入られし者が来るぞっ」

その必死な叫びと、口にされた名に、辺りが騒然となる。中には鼻で笑おうとした者も……

「な、何か振ってくるぞ」

その声はジェルナ兵より上がった。狙撃用のライフルを構えた兵の中からユリエルの叫びが消える前に。すさまじい轟音が頭上より響く。隕石かと思われるような物体が、地上に落ちてきていた。ゼノは素早く身を翻し、地を蹴った。シュハラルも数歩、出だしが遅

れたが、陣営に走る。

ズダーーーーン

盛大な衝撃音と共に、コンクリートが割れ砕け、辺りに飛び散る。逃げ遅れたシュハラムの背を石の塊が襲う。地面に叩きつけられ、背に走る痛みに顔が歪む。それでも、身の危険を感じ起きあがろうとした時、それが動いた。一瞬、シュハラルは自分の身に何が起きたのか分からなかった。ただ口から飛び出る赤い液体が目に入っただけであった。再び地面に叩きつけられたとき、彼はすでに屍となっていた。

ぐぐぐううううううぐうううう

長い唸りと共にそれは、シュハラルの内蔵を引きちぎり喰らった。血色の瞳が物足りなげに周囲を見渡す。

「う撃てえっ」

その声に、ライフルを構えた兵たちが四方から鉛の弾を降らせた。市軍といってもその半分は闇狩である。相手は立った一匹。ことはすぐに片づく。誰もがそう思った。

（違う。私が聞いたのはあいつの声ではない）

目の前で繰り広げられた凶行など目にもくれず、ユリエルはその異常さとまどった。目の前にいる闇に魅入られし者から何も声が聞こえなかった。

（どうして何も言わない！）

他の闇狩がどうかは知らなかったが、ユリエルは闇に魅入られし者の声が聞こえた。攻撃が当たれば痛いと呼び、常に還りたいと懇願する彼らの声が、嘘のように目の前の魔物からは何一つ聞こえなかった。それは、つまり……

「逃げるぞ、ユリエル」

突如腕をつかまれ、ユリエルは意識を戻した。眉間にしわを寄せ、ゼノが逃げるようメンバーに伝えていた。

「何でだよ。闇狩がこんなにもいるんだぞ。たかが一匹、恐れることはないだろ。それに、今逃げたら、ここに来た意味がない」

くっつかかるのはやはりパオロだ。他のメンバーもその意見に同意らしく、それぞれ首を縦に振っている。銃撃は、最初の勢いはないが、とぎれぬよう続けられる。闇に魅入られし者は飛んでくる鉛の弾を煩わしいハエと変わりなく思っているのか、片手で軽々とはじき落としていく。中には地に落ちずに、ジェルナ兵に打ち返されるものもあつた。あまりの煩わしさにか、闇に魅入られし者はその体軀からは想像できぬほどの敏捷さを見せ、兵の塊へ突撃する。それが飛んだと理解した次の瞬間、彼らの体は痛みを覚える暇もなく、後方にはじき飛ばされ、そのまま絶命した。運悪く生き残った者は、骨が外にはみ出したまま地獄の苦しみを味わい息絶えた。

「おいおい、一体どうなつてんだよ。なんで核を撃たない」

ゴミのように蹴散らされていくジェルナ兵を見て、マラッサの空気は一度も二度も下がった。誰もが身を震わし、死の恐怖に支配されていく。

「撃たないんじゃない。撃てないのよ。何せ核が見あたらない」

「何だどっ」

ユリエルに詰め寄り、パオロはその肩をつかむ。

「こんな場所で、冗談はよせよ」

口調はいつものように軽かったが、込められた力とその視線には冗談を強く切望していた。肩の痛みに少しだけ苦痛を顔に表すも、ユリエルはきつぱりと首を横に振った。

「だから逃げると言っただ。今からでも遅くない。気づかれる前に行くぞ」

全員が死を意識する前に、ゼノが最後の希望を与える。パオロはちつと悔しそうに舌打ち、ハウルセンは他のメンバーに指示を飛ばす。こんな時にもあの柔らかい口調はそのままだった。誰もがこのまま気付かれずに逃げられる、そう思いはじめたとき、ユリエルはまたあの声を聞いた。それはマラッサの頭上からであつた。

「来るっ。みんな、伏せてっ」

声が消える前に閃光が生まれ、辺りはまばゆい光に包まれる。そ

の中から轟音と共に、肉の塊が飛び出していく。マラッサのメンバーの頭上をすれすれのところで移動していく。仮にかすつてもいたら、きっと生きてはいられなかっただろう。それだけの高速と重量でいくつもの影が現れる。

『殺せ』

光が消えるその前に聞こえた声にユリエルは頭を上げた。

「嘘っ…すよね」

目の前に広がる絶望はそう声にするしかなかった。あの独特の臭いが鼻につき、皆むせはじめ。空を切つて、そう表現するしかできない出現をした闇に魅入られし者は十数の群をなし、空から振つてきた闇に魅入られし者に対峙する。

「殺せ」

その化物の群の中央に立つた黒ずくめの少年は、軽く右手を振る。その動きにあわせ十数匹の似てもつかない塊の群が、一匹に襲いかかる。辺りには、まだ数十の兵士がいたが一向に構う素振りを見せない。

「どういうことです。これは。赤い魔物が同士討ちだなんて」

たった一匹だというのに、それは恐ろしく強く。同胞を切り裂き、喰らうていく。その化物同士の殺し合いに巻き込まれた兵士の絶叫と、化物の唸りが基地中を駆けめぐる。

「ユリエル、他にはもう来ないのか」

半身を起こしたままで、ユリエルは闇に魅入られし者の群に見入っていた。肩をつかまれ、ようやくパオロの存在にユリエルは気がつく。ため息混じりながら、もう一度同じ事を聞くパオロに、ええ、と上の空で答えるのがやっとだった。

ぐぎゃああああああつ

生きたまま食いちぎられた闇に魅入られし者の絶叫に、ユリエルは耳を塞ぐ。食いちぎられても、腕をもがれても、核を潰されるまで何度でも再生していく彼らの絶叫は、人間のそれと対して変わりなかった。

ずさあつ

切り裂かれた腕が、ユリエルの脇に落ちる。その風圧で、頬に一筋の赤い線が描かれる。たたりとこぼれ落ちていく血にすらユリエルは動揺しなかった。彼女の目が捕らえるのは辛うじて塊の中で判別できる黒ずくめの人影だった。

「この混乱に乗じて逃げるぞつ。ユリエルっ！」

腕を捕まれ、ユリエルは「分かった」とつぶやくと、後ろ髪を引かれるのをぐつとこらえ、戦場を駆けだす。しばらく行ったところで、ユリエルは後ろを見た。もう戦火の中心からだいぶ離れ、化物もかなり小さく見える。

（メイファーズ？ ……まさか）

「あーあ、折角の楽しい舞台が台無しですよ。これでは」

雲の上。その遙か上空に、ゼノが推測した通り、一機の軍用輸送機がいた。

その内部の大型スクリーンに映し出される地上の映像に、その前に立つ男は芝居がかったように両手を広げ落胆を示す。その割に表情とその口振りは落胆というには遠く及ばなかった。それもその男の特性というものなのかもしれない。

「まあ、実験体のテストにはこれほど相応しい演出はないのですが、ね。おやおや、マラツサは撤退しますか。賢明ですね」

ぴぴぴぴぴ……

突然鳴る無線の無粋の音にわずかに顔をしかめるが、上官からの連絡だと知ると、途端ににこやかになる。おもむろにスクリーンを消すと能面のような部下から、帰還命令を伝え聞く。

「それでは、帰りますか。サンプルも十分取れましたから」

ゆっくりと旋回し、来た道を輸送機は誰にも知られずに戻っていた。

遠く基地の方から聞こえる機械音とは違ういくつもの唸りに、ラッツは顔を上げた。額に張り付く髪を軽く掻き上げる。

「どうした、ラッツ。気が散ってるな」

自分の肉体の上にまたがっているラッツの胸に手を滑らせながら、ゴルウェイは不機嫌をにじませる。昼間っから何をしているんだとも思わなくもなかったが、ラッツは這い回る手を捕らえ、その指先を嘗めた。

「ええ、先程からやけに騒々しいなと。鼠狩りの成功の花火ならいいんですけど」

もう一度というように、節くれ立った指をラッツの口に押し込む。従順に舌を使うラッツに気をよくしたゴルウェイではあったが、この耳障りな音が銃声でないのはわかっていた。行為の途中から闇に魅入られし者の気配をわずかに感じていたのだ。マラッサの連中が血迷い、奴らを利用したのだろうとたいして気にもとめなかった。シュハラルとパスクなら上手く処理するだろうと思っていたのだが、まだ気配が消えないのを見ると手間取っているらしい。ゴルウェイの目に戦士の光を見たラッツは、あっさりとその指を放した。起きあがるゴルウェイに迷ったが制服を渡す。その配慮が当たっていたらしく、ゴルウェイは上機嫌にそれを受け取った。

「さつき風呂に入って、正解だったな。シュハラルたちが手こずっているようだ。少し出てくる」

「私も参ったほうが」

自分の制服を素肌に羽織っただけのラッツは、ベッドの上から制服を着込んだゴルウェイを見た。服を着てもそうでなくても筋肉質な体型はごまかせなかった。

「いや、お前はここで、勝利の美酒を用意しておけ」

「仰せのままに」

差し出された手に唇を寄せたその時、慌ただしく扉が開いた。

「ゴルウェイ閣下」

その勢いのまま入った兵士は、その部屋の様子に一瞬自分の役目を忘れた。上官の好色やラッツ次官との関係も理解してはいたが、現実にはその情交の余韻を見せられるのでは違っていた。だが、兵士は間一髪のとこで我に返り、規定通りの挨拶をした。

「何だ。騒々しい。大した用でなかったら貴様は狙撃の的にしてやるぞ」

声を荒げたわけではないが、低く不機嫌を隠さない声は、兵士の背筋を伸ばすには十分だった。もとよりゴルウェイの顔つきからして、他者を威圧するのに言葉は不要であったが。

「申し訳ありません、閣下。パスク次官が至急、閣下とお会いしたいとのことですよ」

「パスクが？ 何事だ。あいつらしくもない」

自他共にゴルウェイの右腕と確信し、その期待に応えてきた男の慌ただしさなど実に久しぶりのことで怒るよりも先に驚きがでた。自分に問われたのかと思った兵士は、しどろもどろで切り出す。

「それが、私にもよく分からないのですが、作戦実行中に化物が降ってきたと」

「なんだとっ！ そんなことがあるわけないだろうっ」

「ですが、パスク次」

「貴様では埒があかぬ。パスクの通信をこちらに回せ」

今にも殴りつけられそうな勢いに、兵士は縮み上がる。上手く了解の返事もできぬまま、部屋を逃げるように出ていく。ラッツは素早く制服を身に纏うと彼の背後に立つ。これぐらいで震えているようでは、出世など望めなかった。

「空から降ってくるとは。仮にそれが事実なら、赤い魔物は空を飛べることに。もし故意なら」

「いわれるまでもないな」

この世界で飛行機を使用しているのはジェルナのみである。もし

それが利用されていたとすれば、大方、軍事部門を蹴落とそうとするステアラの陰謀であろう。ゴルウェイの目に炎がくすぶりだす。隣室に姿を見せると、待機していた兵たちが一斉に敬礼する。画面の中でパスクも簡単な礼を取り、すぐさま口を開く。

「ゴルウェイ。大変だ。シュハラルが喰われた」

気性の荒い上官を呼び捨てにできるのは、長年戦友として共に過ごしてきた証である。その気の置けない友からの戦友の死に、ゴルウェイはさすがに瞠目した。しかし、すぐに落ち着きを表面に戻す。

「何があった」

「作戦通り、書面の交換が行われるのを待っていた。が、聞いたと思うが、空から一匹、化物が降ってきた。そいつに構っている間に、気がつけば群をなして現れやがった」

いつも慎重な行動を心がけるパスクの慌てた口振りに、事の異常さがひしひしと伝わってくる。

（こうなったらあれを使うか）

側に控えるラッツを手で呼ぶと耳打ちする。その様子を画面から見ていたパスクが、急ぎ付け加える。

「ちよつと待て。もう少し様子を見させてくれ。奴ら同士討ちをはじめたんだ」

「同士討ち？ 赤い魔物がですか」

ラッツの驚きに、パスクは徐々に本来の平静さを取り戻したのか頭を使いはじめ。ゴルウェイはただ黙ってパスクの考えを待った。「そうだ。多勢に無勢って感じだったが、最初に降ってきたのがやけに強くてね。そっちにもこの唸りが聞こえないか」

ああ、これは奴らの、納得しながら頷くラッツに、パスクは耳に栓をする仕草をした。だいぶ離れたここまで聞こえるのだ、基地ではどれほどのことか。

「しばらく静観して、数を減らさせる気か。分かった、お前の采配期待しよう。だが、あれの使用は許可しておく。後方にも置いておけば安心だろう」

「ああ、そうさせてもらう。何せ一〇は軽くいるからな。それとも少し人数をよこしてくれ。新入りの非闇どもが喰われちまったからよ」

分かった、そう口を開きかけたとき、画面が真っ白になる。乱れる映像に、パスクや彼の部下の慌てる声がとぎれとぎれに聞こえてくる。だが、それも長くは持たなかった。ぷつりと唐突に映像は切れ、暗い画面に変わる。その異常さに息を飲んだラッツは、辛うじて残った思考により、窓際に立ち基地の方角を見た。そして、白い光に包まればやけている基地を目にする。

「基地に偵察を。対赤の武装をさせておけ。それから、分子分解の準備だ。いつでも発射できるように。それから、アーチボルト長官に連絡を」

次々に部屋を出ていく兵士を背景に、ゴルウェイは作戦失敗の報告をいかにするかを考えはじめていた。

後に、この事件は《バルバディッシュ神槌戦争》のはじまりとして歴史家たちに語られることになる。

4章

窓のない、だがそれなりの広さを持った部屋の中央には、重厚なテーブルが置かれていた。その両脇には濃紺の制服を着た数人の男女が腰を下ろしている。流れる沈黙に自ら口を開こうとする者はいなかった。一人、護衛を両脇に連れ、遅れてやってきた者が、席に着く。皆一斉に立ち上がるとそろって敬礼をした。護衛がいなくなるのを待ち、ブラウヒツチュはゆっくりと答礼の敬礼をした。機械じみた目が、会議の参列者を見回していく。ブラウヒツチュの敬礼が終わるまでは、敬礼をやめることができないのだが、わずか数秒のことがあまりに長く感じられた。

「了承しているとは思うが、此度の会議には特別に軍事次官全員の出席を許可したことを伝えておく」

着席してすぐに、ブラウヒツチュが口を開く。三部門会議のはじまりである。

ジェルナ総帥ブラウヒツチュを中央に、右側に軍事長官アーチボルト、ルレスフィア市軍長メルリス・ウエザー、ザフィート市長ゴルウェイが座り、それと向き合う形でルレスフィア市経長（経済次官）ステアラ、科学次官シエロ・ハウント、ディオム市軍長カシエルが座った。経済長官ミラーは病気療養中のため欠席。科学長官に関しては実験があるのでということだった。あまり姿を見せない科学長官だが、そもそも化学部門は地位も低く、変人が多くいるため、長官が欠席したところでさして他の部門から非難を浴びることはなかった。

「ハイアドーラ科学長官は今回も実験室から出てこなかったのですか」

口火を切ったのは上機嫌のステアラだった。今回の緊急三部門会議の意図はみな知っている。ディオム崩壊に立て続くように、ザフィートとの東部司令基地に多数の闇に魅入られし者が侵入した件に

ついてである。間をおかずに急激に活発化が進む闇に魅入られしに
対する対策を見つげるために彼らは集合したのだ。一度ならず二度
までもへまをした軍事が大口を叩けるはずがなく、またステアラに
つけ込む隙を与えた形となり、ステアラにしてみればこの会議は軍
事部門を追い越すまたとないチャンスだった。

「ええ。今行っている生体強化の研究がモルモットでだいぶ成果を
上げておりますので、そちらを離れられないようです。総帥をはじ
め皆様にはいつもご理解をいただいて助かっていると長官も申して
おりました」

目の前にある見えない溝を理解しているのかどうか怪しいほど、
ゆったりと場はずれな感じでシエロは言う。常に丸眼鏡の奥の目を
細め、笑みを消さない男は、白衣姿のまま会議に出席していた。こ
れも見慣れた風景になった他のメンバーは誰も口にはしない。科学
のいかれた連中に何を言っても無駄だと思っていた。

「それにしても、この度は大変なことですね。軍事の方々には何と
言えばよいのやら」

同情めいた言葉は、そのにやかな表情のせいで反感を買っしか
なかった。初対面のゴルウェイに睨まれてもシエロは動じず、変わ
らずに笑んでいた。

「そうですね。科学次官。この失態の数々、どのようにお考えかお
聞かせ願いたいものです。アーチボルト軍事長官」

はじめから部外者の科学部門から今回の失態を口にさせ、軍事を
追いつめようとするステアラの狡猾な作戦に、アーチボルトが何か
言うのを遮るようにテールブルが派手に悲鳴を上げた。ブラウヒツ
ユがその蛮行にわずかに眉をひそめたがそれだけだった。

「遮るようで悪いが、経済次官。今回の経緯について一つお伝えし
たいことがある」

「早速言い訳ですか」

鼻で笑うように言い放つステアラは、蛇と称されるようにねつと
りとゴルウェイに視線を巻き付かせた。愉快そうに形作られた赤い

唇から長い舌が出てきそうな雰囲気を放っている。今にも一戦の危機かと思われたとき、ブラウヒツチュはかつんとテーブルを軽くならした。

「総帥の前で失礼いたしました。私の失言です。…では、ザフィート市軍長殿、その報告とやらをお聞かせもらえませんか」

先程のゴルウェイの行為を揶揄するようなやり方に、歯ぎしりをする男の手を隣に座るウエザーが押さえた。その手を振りきり、ゴルウェイは一つ咳払いをする。

「すでに報告を受け知っている方もいらっしゃると思いますが、ここでもう一度報告させていただきます」

ブラウヒツチュに向き、そう許可を取ると、悠然と座るステアラを見た。

「四日前に起きたザフィート襲撃事件ですが、生存者の話によりますと一つ腑に落ちないことがあります。最初に襲撃をした一体ですが、証言をあわせますと雲の上より降ってきたとのことですが」

「闇に魅入られし者は空も飛びますか」

新発見とばかりに嬉々として声を上げるシエロを、黙っているとばかりに睨む。

「その可能性もありますが、飛行機で何者かに故意に運ばれてきた可能性の方が高いことを報告いたします。さて、ジェルナしか扱えないはずの飛行機を使って誰があんな事をしたか、今調査している最中です」

「可能性と調査中ですか。どちらも推測の領域とは。それに、科学次官の言うとおり闇に魅入られし者の特性かもしれないでしょう。そう故意説にこだわる必要もないと思います」

言外に経済部門、ひいてはステアラの存在をほめかしたはずが、あっさりとかわされ、逆にナイフを向けられる。

「ですが、これはゆゆしき問題だと思えますけど。もしこれが事実なら、個人の醜い目的のために、赤い魔物をせん滅するというジェルナの創設理念を食い物にされ、我々人類の希望が失われかねない

でしょう。今だからこそ、不穏な芽は早めに摘み、後方の憂いを断つべきだと思いますけど」

ゴルウェイに任せていられないと判断したのは、ルレスフィア市軍長ウエザーであった。けぶるような金髪は優雅に波打ち、テールの上にこぼれていた。灰色の髪をひつつめて後ろに流すステアラはお世辞にも美しいとはいいづらかったが、それとは対照的にウエザーは兵士とは思えないほどの美貌を誇示していた。

「まるで誰がやったのかわかっていらつしやるような口振り。すでに犯人の目星がおつきならさっさと捕縛し、闇に魅入られし者の餌にでもしたらいかがです」

「ええ、それも時間の問題でしょう。数日の内に首謀者を総帥の御前にお連れいたしますわ」

自信たつぷりの笑みは、咲き誇った大輪のバラのようであった。目の前の蛇がなすすべなく鷹に捕まるのを想像しただけで、心が躍る。経済次官と平等に対応するのも馬鹿馬鹿しいとわざと口を閉ざしていたアーチボルトも、鷹の目と称される鋭い眼光を消すことなく、口元だけで笑む。

「それは結構なことです。では、その間に、経済が軍事に代わりマラッサの掃討をしておきましょう」

「な」

ガタンっ！

手を震わせ立ち上がったゴルウェイの背後で、椅子が盛大な叫びをあげた。歯を見せ威嚇する猛獣にも、灰色の目は揺らがない。ゴルウェイの筋骨隆々とした腕にかかれば、あっけなく屈服してしまいそうなほど細いステアラだったが、彼女が持つその冷静さは不気味なほどであった。

「何を驚く必要が。先の二つの事件から闇に魅入られし者への対策は早急を要するのはおわかりであろう。軍事が背信者を探すので手一杯なら我らがまずマラッサの息を断ち、真の意味で後方の憂いを断つしかないであろう」

「誰が手一杯だと」

吠えるゴルウェイをステアラは一瞥もしない。その感情の読めない目はブラウヒツチュに向けられる。

「総帥。どうか我ら経済部門にマラッサの掃討を許可願います」

「総帥。掃討は我ら軍事部門の管轄。血迷った経済次官のお言葉など耳にされませぬよう」

沈黙を破ったアーチボルトがステアラに続く。

十個の目はジェルナ総帥に注がれる。ただ沈黙を守り、会議の成り行きを見守っていたブラウヒツチュは入室してきたときと変わらぬ機械じみた目のまま一同を見渡す。

失礼にならない程度で視線をはずしていたカシエルはくだらないやりとり、机の下で音を立てないように指で自分の手を叩いていた。軍事も経済も自分たちの権力の拡大にこだわるだけで、本当の意味での恐怖が足りない気がした。子供の頃に感じた恐怖を目の前の高官たちはどこに置き去りにしたのか、首をひねる一方である単体で行動していた闇に魅入られし者が群をなしたことに、なぜ注意しないのだろうか。苛立ちを募る一方であった。

「化物相手には負けましたが、人間相手なら絶対負けません。どうか俺に汚名返上の機会を」

自分の顔の上を通りかけた視線に、ゴルウェイは胸を軽くこぶしで打つ。そこで止まった目が、ゴルウェイを観察する。

「ゴルウェイ。お前にはまだ力があるのか」

ジェルナは実力主義。上官になればなるほど一度の敗戦が大きくのしかかる。まして自らの失敗は許されない。背筋に冷たい汗が流れ落ちるのを感じながら、ゴルウェイは敬礼した。

「あります。失敗したときはこの命いかようにも」

「わかった。マラッサの件はゴルウェイに託す」

今一度、敬礼をするゴルウェイにはもう興味ないとばかりに、ブラウヒツチュは視線をはずす。ひらひらと手を振り、シエロがそれと呼ぶ。

「総帥。でしたら、ディオム市軍長にも機会をあげた方がよいのではありませんか。ディオム崩壊はザフィートの一件とは違い、市軍長の非はありませんから。いつまでも閉じこめていても仕方ないと思いますよ」

不意に話に持ち上げられ、カシエルはシエロの影で嘆息した。できればこのまましゃべることなく閉会にまで持っていきたかったのだ。あまりにもくだらない会議におべっかを使う気にもなれなかった。元々使う気もなかったが。

「いえ、私は」

「挽回の機会はいらないと言うか」

「非闇に次官は荷が重すぎるのでしょうか」

ブラウヒツチュの問いに答えたのはアーチボルトだった。口調こそは丁寧だが、彼だけは一度もブラウヒツチュを見なかった。

「アーチボルト。私の采配に不満があるのなら直接言ったらどうだ」
九十度の角度で混じる視線を交わす気は二人にはなかった。

「滅相ありません」

頭を下げるときでさえ、アーチボルトは彼が望む席に座る男の顔を見なかった。いくら自分の方がその任に相応しいと思っていたとしても、この状況で逆らうような馬鹿ではない。これで自分への追求は無くなったかと思ったカシエルであったが、向けられた冷たい視線に胸中だけで舌打ちする。

「今は私個人の名誉より、人類の危機を優先すべきかと。もし御温情いただけるのなら、その後に賜りたく存じます」

「ほう。己より他人を優先するか」

試すような口振りに、カシエルは注目を浴びる。軍事からの蜂の巣にされそうな痛い視線と灰色の勧誘の視線に居心地を悪くする。救いは隣の脳天気な賞賛だろう。それはすごいですね、と手を叩くシエロはこの状況を理解しているのかも疑わしかった。

「ジェルナとはそういう組織ではありませんでしたか。人類の敵、闇に魅入られし者を倒すために立ち上がった者たちの組織だったと

理解しておりますが。それが争いあい、化物に黙って喰われるようでは本末転倒ではないでしょうか」

（矛盾しているな）

目立ちたくないのなら適當にごまかせばいいのに、それをしないで余計に目を付けられる自分自身にカシエルは胸中で苦笑した。反対側から向けられる三種の殺気。そういえば、とカシエルは思う。目の前に座る上官たちは皆そろって闇狩だが、部署の違うこちらは偶然にも非闇だったことに気付く。

（まるで闇狩対非闇だな）

皮肉な考えに、口元が緩みそうになる。それもブラウヒツチュの鋭い視線にぶつかり、姿を消す。ただ見られているだけだというのは、体に緊張が走った。

「わかった。いずれその方にも機会を与えよう」

助かった。視線をはずされ、カシエルはなぜかシ胸をなで下ろした。

「それでは、これにて散会とする」

ブラウヒツチュの合図と共に、全員が起立し敬礼する。

世に名高い三部会議は、冷戦を露わにして幕を閉じた。

三部会議閉会后、執務室に戻ろうとしていたカシエルは、名を呼ばれ足を止めた。

総帥室や特別会議室などがある機密棟から軍事棟に続くブリッジのことだ。ルレスフィアはジェルナの本部ということもあり、他の都市に比べ基地の規模が大きい。そのため中央に位置する機密棟を囲むように各部門ごとのタワーが建っている。それぞれのタワーはブリッジによりつながっていた。そして街は、ジェルナ本部を中心に同心円を描き広がっている。

振り向くと、白衣に身を包んだ男がへらへらとカシエルに向かい

手を振っている。横を通り過ぎる兵たちはその様子に眉をひそめる様子もない。その様子から、いつものことなんだろうと推測された。「何か私に用ですか」

呼び止められる理由がわからずカシエルは悟られぬように気を引き締めた。墓穴を掘って首をはねられる危険を、今の地位になつてからカシエルは常に気をつけていた。そんなことをつゆ知らず、シエロは相変わらず笑みを浮かべている。

「はい。届けていただきたいものがありまして」

脇に抱えていたデータを差しだす。化学部門にデータ解析を依頼した記憶はカシエルにはなかった。極秘裏に行っているディオムの件で部下の二人が依頼した可能性もあったが、上官に発覚の危険がある内容なのでその可能性はすぐに項目から削除された。

「これは？」

「ああ、この間のディオム崩壊の現地データの解析結果です。ちょうど会議前に終わったので、お持ちしたんですよ」

「次官：自らですか」

思わずカシエルは問い直していた。それほどにシエロの行為に驚いたのだ。

確かに重要案件は情報漏洩の防止のために会議の後に直接資料を手渡しすることもある。ディオム崩壊も確かに重要項目ではあったが、データの解析など次官自らがやる仕事でも、直接、持つてくるほどのことでもなかった。なにせ化学部門が解析したデータは、軍事内でさらにまとめ上げられてからカシエルたちの元に届くのが普通であつたからだ。

「ええ。なかなか興味深いデータでしたよ。こんなにもサンプルが多く採れることなど滅多にないですからね」

楽しそうに語るシエロに、カシエルはわずかに眉を動かした。万単位の死をサンプルの一言で片づけるシエロの神経を疑ったが、人の命よりも実験を重視する化学部門のマッドサイエンティストの噂はカシエルも耳にしていたので、これがそうかと何とか我慢した。

もしここにワルトシュタイムがいたとしたら、平均的な感情だと思っ
っているカシエルですら一言いいたいのをこらえるのに苦労してい
るのだ、情に厚い彼なら一喝ではすまいだろう。

「そうですか」

なんとか口に出た相づちに、気をよくしたのかシエロはさらに続
ける。

「ここしばらく単体で行動していた彼らが、ディオムの一件では数
十匹もの群となって行動していたようなんですよ。黒の時代ですら
最大十数匹なのに」

「数十！……ですか」

闇に魅入られし者の集団化ばカシエルも予測していた。が、その
あまりの数の多さに驚きが隠せなかった。冷静に考えてみれば、数
万という人間を殺しているのだ。それなりの数がいたのは当然とい
えよう。今でさえ一匹現れた闇に魅入られし者を倒すのにかなりの
犠牲を払うとうのに、黒の時代以上の群をなすと聞いて最悪の想像
が脳裏をよぎった。自分の幼年期を振り返り、カシエルはさらにぞ
つとする。

黒の時代。歴史に詳しい者でなくともその名と暗黒時代の名を知
らない者はいない。それは闇に魅入られし者が活発化した恐怖の時
代だった。暗黒時代には十数年で総人口の三分の二程度まで人類は
喰われたと伝えられている。それもまだ百年前の出来事である。暗
黒時代より規模は小さいが、十数年前に収束した黒の時代も常に恐
怖が専横していた時代であった。毎日、世界のどこかで滅ぶ村や街
があった。幼い頃に見た人間の食いかけを思い出し、胃液が逆流す
るような気持ち悪さがこみ上げてきた。

「はい、そうなんです。それだけの数が群をなすと、我々人類は
もう滅びるしかないんですかね」

悲壮な考えですら、シエロはその口調を変えない。柔和な笑みを
たたえたまま他人事のように語る。何がそんなに楽しいのだと思う
が言及する気にもなれなかった。

その時、失礼します、と二人の次官の立ち話に割って入る声があった。白衣を身につけているのでどこの所属かは一目瞭然だった。ぼさぼさの髪と目の下にできた隈が徹夜の研究を伺わせる。

「シエロ次官。ハイアドーラ長官が三〇二に至急とのこと」

一気にそう伝えたと直立不動に固まる。シエロはちよつと思案するように顎に手を当てると、メッセンジャーに先に戻るよう指示する。

「すみませんが、私はこれで。データの件よろしくお願いします」
そう言い終わるのも待たずに、シエロは歩き出していった。

カシエルは運良く入ったデータに目をやるとブリッジに向かう。
(コピーを取ってから、ジェイクあたりに戻してもらえば問題はな
いか)

頭に残る先程のシエロの話に、それこそ三部会議に取り上げるべき議題ではないだろうかと思い、ジェルナの腐敗を再認識し、深いため息をついた。

「これで良かったんですか」

カシエルと別れ、別の方向に歩いていったシエロは、真っ直ぐに呼び出された場所に戻ることなく、機密棟の一室に立ち寄っていた。その手には新たにはじまった実験の研究費に関する書類が握られていた。目の前にいる人物から渡されたそれを形通り確認する。

「書類はそれで十分だ。カシエルの件もあれで上出来だろう」

ひつつめた灰色の髪を弄ぶステアラに、シエロはそうですかと暢気に答えた。書類に書かれた金額の丸が提出したときより一つ増えているのを見ると、内心でややおやと呆れてみせる。

「いいんですか。こんなにもだして」

「いくらあっても足りない連中が、何を真面目なことを言う。それよりも」

「わかってますよ。例のものでしょ。後数日もしたらできますよ。
可愛くラッピングでもしてお届けしますから、ご心配なく」

可愛い。その言葉とからきし縁のないステアラは、シエロの皮肉

を鼻で笑い、好きにするがいいさ、といい残し退出した。誰もいなくなった部屋でシエロは軽く伸びをする。「さて、私も行きますか。長官が呼びですし。……それにしても」

（私は策謀巡らし、同士討ちさせるよりも、みんなまとめてこの手にかける方が得意ですし、好きなんですけどね）

開くドアをくぐりながら、相変わらず笑みを絶やさずに、科学部門へのブリッジへと歩き出していく。

ゴルウェイの標的の一人は、あの和睦の一件から数週間経った今もザフィートにいた。ザフィートのジェルナ東方支部のタワーを背に、彼は都市の外れへ歩く。都市の作りは街に比べ至ってシンプルである。中心に行けば行くほど上級な人間が住み警備が厳しくなる。その逆、都市の城壁の近くは、ごみ溜めと呼ばれるスラムや裏街道まっしぐらな人間のたまり場であった。都市の警備をかくくぐるその地域は、闇のギルドがしきる無法地帯。だが、その闇のギルド無くしては都市の上層部が成り立たないのだから変な話である。

その無法地帯へと続く道を食べ物が入った紙袋を片手に、赤毛の男は鼻歌交じりで歩いていく。

「にしても意外だよな」

汚くなる街の外観をしげしげと眺めながら、二、三人の年端もいかない子供がぼろを纏って寄り添いあうのが目に入る。手にした袋の中身とその子供たちを交互に見ながら、パオロは空いた手で髪を掻く。この食べ物をやったところで、周りに潜むぎらぎらした目の野郎どもに奪われるのは目に見えていた。かといって素知らぬ顔で通り過ぎるのも、良心が痛んだ。

（中途半端な施しはかえって良くないよな）

袋の中から取りだしたパンを行儀悪く歩きながら噛みちぎる。食べるのが下手なのか、パンのかけらが一つ二つと、パオロの口から

逃げ出していく。点々と落ちたパンくずを小さな子供たちは手に取ると、また一塊りになってかじる。大人には見向きもされない本当に少しの量だが、何にもないよりはましだろう。その様子を目の端に引っかけるとパオ口は一人顔をゆるめる。

（俺も甘いな）

数歩先のところで、ずんぐりした男が変な顔でこちらを見ている。

「何、気色悪い顔してんだ。赤いの」

「誰が気色悪いんだよ。っていうか赤いのっていうな」

二人して、崩れかけたビルの細い階段を行こうとして、足を止める。

「おい、俺が先に来たんだぞ。お前は後から来いや」

「ゲイル。お前が太すぎるのがいけないんだろう」

「何を。俺のは筋肉だ。脂肪じゃねえ」

「何もデブっていったわけじゃ」

階段の入り口で、他の住人のことなどお構いなく騒ぐ二人に、数人の人間が遠巻きにそれを眺めていた。どちらも一步として譲らない。どちらが先に昇ってもたいして変わらないのであるが、どちらの立場が上かを示したいらしい。この地域を縄張りとしていたゲイルは先輩としてけじめをつけたいらしく、パオ口にしても今までの経緯上自分が上だと譲らなかった。

「二人ともいつまで入り口を占拠しているつもりだ」

階上から降る声に二人して見上げる。普段から長身のゼノが下から見るとさらに大きく見えた。ちっと、パオ口は舌打ち、目を背けた。

「ゲイル、早くしないと。ラグスが待ちくたびれるぞ」

「おう、そうだった。ありがとよ、白いの」

どすんどすと勇ましく足を慣らし、細い通路を歩いていく。その様子にくたびれた木の板がよく抜けないと毎回パオ口は感心する。「赤と白は俺の故郷だと縁起がいいんだ」ゼノとパオ口がいがみ合っているところに、現れ、二人の髪の色を見てそういったゲイ

ルは、それから二人を白いのと赤いのと呼ぶようになった。いくらパオロが名前を呼べといっても効果はない。

「ったく、いつまで赤いのって呼ぶ気だ」

後から上がってきたパオロのつぶやきに、ゼノは口元をゆるめる。

「気にいらぬのか、赤いの」

「ああ、お前とセットだつてことがな、白いの」

並んで歩き出すが、パオロはムキになって一歩先に行く。外の見た目よりも中は複雑で、結構な数の住人がそこに住んでいた。建物の一審奥は、ここらへんでは唯一の酒場につながっている。その奥にはこの都市の闇のギルドがある。ゲイルがそのギルドに顔が利くという話を聞いたとき、パオロはあまりに意外すぎて開いた口がふさがらなかった。小心者で小悪党なゲイルが、闇に暗躍する連中と知り合いというのが結びつかなかったからだ。闇のギルドといえば、暗殺や盗みなどを提示額にあわせて請け負う何でも屋である。渡り鳥 が縄張りを持たないのにたいして、こちらは各都市や街に必ず一つはギルドとして存在する。もちろん 渡り鳥 でない限り、ギルドに属していない者が縄張りを荒らせばギルドの者に消されるという仕組みである。都市や街の上層部もギルドを黙認する変わりに彼らに自治を徹底させていた。それが上層部のいうことを聞いて行っているものはかなり疑問ではあるが。

「ゲイルがこんな隠れ家を持つてたなんてつくづく人は見かけじゃないよな」

「そうだな」

律儀に独り言に返事をするゼノに、パオロはひゅーと口癖ならぬ口笛癖を披露した。

「ま、黙って逃げてれば良かったものをわざわざ戻ってくるなんてホント見かけじゃないな」

「ああ。今もラグスの包帯が切れたのを調達していたしな。案外いい奴なのかも知れない」

「そうだったのか。だったらそういえばいいのによ」

そしたら通したのに、口の中でもごもごばつが悪そうに言っているパオ口の後ろ姿をゼノは微笑を浮かべ見守っていた。その姿は、若かりし日を彼に重ねて思ひ出す老人のような深い目だった。

二人がザフィートの　ごみ溜め　に居着くことになったのは、東部司令基地での闇に魅入られし者の襲撃を回避してコンラッドのレジオン宅に戻ったことによる。突然の帰還も予測にあつたレジオンやイーデンだったが、ハウルセンらの興奮した様子に眉をひそめ、語る内容に口を開けっ放しだった。

「つまり、闇に魅入られし者が同土討ちをはじめたということです
か」

半信半疑で口にするレジオンに、ハウルセンをはじめとするマラツサの主要人物が次々に首を縦に振っていく。

「本当に突然現れたのか。誰かの陰謀とかではないのか？。そんな非現実的なことが起こってたまるか」

「実際起こったんだから仕方がないだろ。信じたくないのもわかるけどよ。なんせその場にいた俺ですら、未だに夢でも見たのかと思ってるから」

「俺もつすよ、兄貴。でも、ユリエルさんが叫んでくれなきゃ、俺たちみんな逝ってたつす」

パオ口の後に続いたザックスの言葉に、三人は口を閉ざした。いきなり黙り込む三人に居残り組とザックスは首を傾げる。話題に上がった当の本人はラグスの様子を見に席を外していた。パオ口は廊下が続くドアを未練そうに眺めていたが、埒があかないとばかりに口を開けかけた。まさにその時、ドアの外から女性の甲高い声が騒がしく鳴り響いた。執事服を着たイーデンは、嫌そうな顔を作り、ドアに手をかけた。

「お待ちください、お客様。勝手に出ていかれては、困ります。主人に確認いたしますので」

ドアの隙間から飛び込んできたうわずった声に、一同は腰を浮かした。イーデンは眉間の皺をさらに深くして廊下に出る。彼の目に

は、ラグスを背負ったユリエルとその彼女を制止しようとしていた数人のメイドが目に入った。メイドはユリエルから少しでも遠ざかろうと腰を引いている。その理由はすぐにイーデンの知るところとなった。ユリエルの手には白銀の銃が握られていたのだ。メイドたちを下がらせ、イーデンはユリエルの前に立った。いつの間にかレジオンもその後ろにいた。

「ユリエルさん、これはいったい何の騒ぎですか。お話があるのならこちらの部屋でお聞きしましょう」

「その必要はない。勝手に行かせてもらっわ」

銃口をイーデンの頭に向け、ユリエルは足を進める。留まるとばかり思っていたイーデンは思わず、後ずさったが、レジオンにぶつかり逃げ場を失った。迫り来る恐怖に声を上げそうになる。

「どうぞこちらに」

肩をつかまれ、イーデンはレジオンの後ろに押しやられる。ジェルナを相手に街の利権を守ってきたので荒事に慣れているのか、レジオンはひるむことなく近くの部屋を指し示す。その手の方をユリエルは一瞥する。ハウルセンの笑みが視線にかすったが、その動きを止めることはなかった。背に感じるラグスの息づかいが、少し早くなった。できるだけ傷ついた足には触れないようユリエルは力を抜こうとする。

「折角ふさがった傷をむやみに悪化させる必要もないと思いますが」
誘いに応じないユリエルを口説くよりも、彼女の弱いところをついた方が早いのを悟ったレジオンは早速方針を変える。わずかに背後を気にするユリエルの気配を見て取る。

「ユリエルさん、僕を…置いて行って……」

首筋をなでるのはかすかな呼気。服を濡らす汗が、ラグスの痛みを伝えた。

「ごめん、ラグス。……もう少しだけ耐えて」

銃口をレジオンに向け、引き金に手をかける。その瞳に迷いはない。

「通してくれないのなら、力づくでいく」

ざわめきが起こる。だが、それは彼女らの周辺ではなく、意外にも玄関の方角であった。

「何事だっ。騒がしいぞ！」

イーデンの怒声にいくつかの悲鳴が応じる。その声をかき分けるようにずんぐりした男がこちらに向かってくる。少し太めの体格だが、見るからに脂肪よりも筋肉が多いのがわかる。男はこちらに気付きのしと歩き寄ってくる。

「お、いたいた。嬢ちゃんに坊主」

「ゲイルっ。何しに来た」

いきなり向けられた銃口に、げつと唸ると、反射的にゲイルは両手をあげる。その手から、がさりと床に袋が落ちた。

「……薬草……？」

レジオンのつぶやきに、ユリエルは説明を求めるように小さく顎を振った。ゲイルは居直ったのか、それとも気恥ずかしいのか頭を掻くと、口元をゆるめた。

「いや、そのよ。……ほら、俺の逆恨みで坊主が怪我しちゃったただろ。ちよつとびびらせてやろうとしただけなのによ。ジェルナの虫野郎がこと大きくして……だからよ」

「それで、これってわけね」

つま先で軽く布袋を蹴るとがさがさと乾いた葉が顔を見せる。その衝撃で碎けていく葉を、ゲイルはしゃがみ込み小さな破片も拾い集めていく。ユリエルは冷やややかにその様子を見る。

「気に入わねえからって、蹴るなよな。こいつは貴重な奴なんだからな。その分すんげえよく効くんぞ」

「リシュルの葉……か。ゲイル」

「おう？ 何だ」

「償う気なら、どこか落ち着いて過ごせる場所を探して」

立ち上がったゲイルの横をユリエルはラグスを背負い歩き抜ける。袋を抱え、意味も分からずに、レジオンたちの顔を一度見やるとゲ

イルも小走りでその後を追う。キーキーとイーデンの何かわめく声を玄関の重いドアを思いっきり閉めて塞いでやるとゲイルは陽気に声をかける。

「どうしたんだ嬢ちゃん。仲間割れか」

「そうよ。お利口な人間とは付き合つてられないわ」

ふつと背中が軽くなり、ユリエルは振り返る。彼女の三倍の太さはあるう腕に軽々とラグスを抱きかかえると、薬草の入った袋をユリエルに押しつけ、ゲイルは走りだす。

「そんならついてきな。とっておきの場所を教えてやらあ」

人混みに消える二人の後をこっそり付けたゼノとパオ口は、そのままユリエルらと共に　ごみ溜め　にいついたのであった。

ゲイルが用意したこの隠れ家は　蜘蛛の巣　とこの一帯に住む者から呼ばれている場所であった。外見は小さな古びた廃墟なのだが、中は広く細い廊下があちこちに呼び名通り蜘蛛の巣のように伸びている。たとえジェルナが彼らを捕縛しに来て、全員捕まらないように考えられた住居だそう。

すでに何回曲がつたか忘れてしまうほど曲がつた角をもう一つ曲がつたところで、思いだしたようにパオ口は口にする。

「いつになったらユリエルは俺らを信用してくれるのかな」

「さあな」

日に最低でも一度は繰り返される同じ会話。問いも答えもさして変わらずそれは習慣になりつつあった。

「だが」

いつもならそこでとぎれる会話を珍しくゼノは続けた。その意外さはパオ口に足を止めさせ、彼を振り向かせた。目的地はすぐ手の届く場所にあったが、一度それを視界に納めるとパオ口は紙袋を抱えなおす。

「いいのか。お前はここにいて」

「そついう旦那は？　俺よりも頼りにされてると思うけど」

ここ一週間、　蜘蛛の巣　でかわされる噂は二人にとっていい話

はなかった。耳ざとい連中が集めた、ジェルナのマラッサ討伐はすでに知らぬ者がいないほどであった。現にマラッサの嫌疑を掛けられた街や村がジェルナに襲撃されているという。今のところマラッサでは実害は出ていないようだが、行動範囲が狭められるのは危険である。現に見せしめとして襲撃されたディオム付近では自衛策として外からの人間を厳しく監視しているらしい。徐々に南下しているジェルナを見るとはじめからマラッサがザフィート地方にいるのを知っていて、少しずつ追いつめているようだ。はじめこそ見当違いな所を攻撃しているジェルナをあざ笑っていたが、その思惑にたどり着くとのんびり構えているわけにはいかなかった。だが、ゼノもそのことに気がついていないはずであったが、一向に動く気配を見せない。一人あたふたするのも癪に障るのでパオロもなんとなく動かずにここに留まっていた。

「俺の勝手な行動は今にはじまったことじゃないからな。承知の上だろう」

言外にパオロを拒絶する意志が読みとれた。

「へえ。んじゃ俺もたまには勝手に行動しようかな。ユリエルも仲間にしたいことだし」

そうだそうしよう。ゼノの行動に反発したいがためについてしまった思いつきが、本当に良さそうな気がし、パオロは頷いた。だからユリエルの名が出たときわずかにゼノが眉を動かしたのを見過ぎしてしまった。

「ユリエル…か。そういえばお前はなぜついてきたんだ？」

「なぜ…って」

言葉を濁したパオロは、質問されてはじめてその疑問にいきあたった。あの時はゼノがユリエルの後をつけていくのを見て、抜け駆けされたと思っについてきたのだ。だが、当のユリエルは頑なに心を閉ざしたままで、なぜあの時、闇に魅入られし者が来るのがわかったのかさえ答えてもらっていない。人を口説くのも商品と変わらないとパオロは思っている。説得にかける日数や労力もすべて相手

のなすであろう働きを考えて行つ。パオロはそう決めていた。これは彼が尊敬する祖父が商人としてはじめて彼に教えたことであつた。その信条からいくとユリエルには時間を割きすぎている。いつもならすぐに諦め、別のを探しにいくというのに、それともはじめて見た愚闇だからであらうか。

（将来性を見込んでつてやつかな）

「そりゃ、もちろん口説くためさ。ユリエルちゃん、可愛いし。で、旦那は？ 旅仲間だったからか」

軽口で自分への疑問をごまかす。浮かべた作り笑いをゼノは全てを見透かすような目で見る。

（この目だ。きっと俺の作り笑いなんてお見通しなんだろうな）

笑みを消すつもりもなかったが、いつもの如くパオロは内心で舌を巻く。時たまこんな目を見る機会があるが、そんなときはゼノとの差を見せつけられた気がした。あと何年生きたらあの目になるのか。それとも年数ではないのか。素直に負けを認められない自分がつくづく情けなくなる一瞬である。

「そんなところだ」

（よく言うよ）

ゼノが真実を口にしていないのは、この数年間の彼とのつきあい
で熟知していた。ゼノが語ることは少ない。とりわけ彼自身のこと
については何一つ語ろうとしなかった。闇に魅入られし者がはびこ
るこの世界ではそれもよくあることであつたが、彼らは皆、闇に魅
入られし者を恐れ口にしないのに対し、彼は違つた。うまくそうだ
と隠しているが、パオロにはそう思えて仕方なかった。幾度もなく
生死をともしたが、彼を信じ切れないのはそれが不信感になつて
いたからだつた。

（だけど、俺を追い払いたいののは、ユリエルに近づけたくないから
か。旅仲間とは聞いていたが）

二人の仲が友好関係にないのはすでにわかつている。聞いた話か
らすると二人が出会つたのはマラッサとゼノが出会う前。ユリエル

がラグスと同じ年ぐらいの時のことになる。

（何かを聞き出されたくないのか。だが、それなら仲間にようとはしないだろう）

「ゲイルではないが、変な顔をしてどうしたんだ」

考え事をしていたのが顔に出たのか、ゼノはため息混じりに聞いてくる。

「変な顔じゃ」

ゼノに詰め寄る勢いは、女の声にかき消される。

「あら。色男が二人で何をしているのかしら」

ふふふ、と意味ありげに笑う。口元にほくろのある艶っぽい女は、ドアを片手で押さえながら、肩に垂れる長い髪を別の手で払った。

「獲物をどう落とすか相談中。ウェプソープは手当か」

胸元が大胆に露出した女が手にした籠にパオロが目をやると、ゲイルがどこからか用意するリシユルの葉が数枚入っていた。酒と紫煙の似合いそうな危険な艶を見せるウェプソープは意外にも占いを生業にしている。村と違って科学が発展している都市では、占いという非科学的なものはあまり受け入れられていないが、薬草の調査という別の面でかなり重宝されていた。実際、ごみ溜め の入り口付近には、人には言えない傷を治してもらいたいとウェプソープにつなぎを頼む人間を仕事の相手にする子供たちができるほどであった。

「それなら可愛い門番が動けないうちの方がいいわ。今も一人だけらしい機会じゃないかしら」

「いないのか？ ユリエルは」

「自分で確かめなさいよ。失恋の鉛の傷はいつでも癒してあげるわ。特別価格で、ね」

気を引くような流し目を二人に見せると、ウェプソープは逆の方向に歩いていく。彼女が歩きたびに、あちこちから誘いの声がかかっている。軽く肩をすくめたパオロは、開け放たれたままのドアを二、三度叩くと中に入った。

「よっ！ ラグス、具合はどうだ」

「あ、パオ口さん。お帰りなさい」

壁際に置かれた粗末な寝台に、ラグスは上半身だけ起こしていた。その脇には先に行った背はさほどないが体躯のいいのが座っている。おかげでラグスはパオ口を見るのに左右に頭を移動しなければならなかった。

「おう、遅えじゃないか。さっさとよこしやがれ」

パオ口から食料の入った袋をひったくると、お世辞にもきれいとは言えない食器に、鼻歌交じりにゲイルは盛りつけていく。ゲイルが座っていた場所に入れ替わりにパオ口は腰を下ろす。

「あーあ、すっかり親父代わりだよ。あのおっさん」

生き別れた息子を思い出したという理由で、ラグスを気にかけるゲイルはここに移って以来、父親代わりを率先してやっていた。はじめはパオ口のちゃちゃに激怒していたが、すっかり慣れたのか、へへと鼻をこするだけである。

「大変な奴に目をつけられたな、お前。あれじゃきつとくたばるまでつきまといてくるぞ」

「そうですか？ 僕、うれしいです。父さんがいた記憶があんまりないから」

はにかむラグスの表情は、少なからず日陰に生きてきた三人にとってはまぶしかった。情報の少ない山深い村で生まれた彼は、確かに誰よりも純朴に育ったのだろう。だが、渡り鳥と共に旅してきたのだ。その素直な性格は生まれ持ったものだろう。ドアの横に背を預けていたゼノはわずかに目元をゆるめ、目の前で繰り広げられる団らんを見つめた。それは自分には縁が無くなって久しい光景であった。

「あ、でも、一生ってことはないですよ。早く怪我を治してまた旅に出ますから」

渡されたパンはこれでもかと大胆にレタスやハムが挟まれていた。どう食べたらいいいのか、ラグスは困り顔でその巨大なサンドイッチ

を眺めていると、早く食べとばかりにうれしそうなゲイルの目にぶつかる。おもいつきて口にはおぼると中身が溢れた。その横でパオ口はゲイルの目を盗んで果物をつまみ食いする。

「んな、危険なことしないでよ。どうだ、俺と一緒にここで暮らさねえか」

縁の欠けたカップに牛乳をなみなみと注ぐゲイルは、ユリエルがいないのに目を付けてそんなことを聞く。ゲイルの息子はラグスより随分年上らしいが、その大きな手がなでる黄色い頭を彼とダブラしているのは端から見ていてもよくわかった。

「俺が馬鹿なことして怪我させちまったから、こんなこと言うのはおかしいけどよ。もしよかったら」

「ありがとうございます。だけど、僕はユリエルさんがそうさせてくれる限りついていきたいんです」

献身的なゲイルにすっかり怪我のことを水に流したラグスだが、丁寧につきぱりと申し出を断った。気まずげに頭をかくゲイルが、やっぱだめか、と小さくぼやく。

「で、そのユリエルはどうしたんだ」

壁にもたれたゼノの声にラグスをはじめてその存在に気がついたようであった。目を丸くしてサンドイッチを皿に戻す。

「えっと」

「また何も言わずに出ていったのか」

返答に困るラグスに助け船をだすと、しっかりと頷いた。蜘蛛の巣に移ってから、ユリエルはたびたび何も言わずに、姿を消す。以前はどこに行くにもラグスにそれとなく言うてから行くのに、ゼノやパオ口がいるからかふらつといなくなるのだ。それも二人に気取られぬようにいなくなる。どこへ行っているのか聞けばいいのだが、ラグスは自分にはその資格がないからと聞けずじまいでいた。（一緒にいさせてもらっただけでも迷惑なのに、わがままなんていうては駄目だ）

本当はユリエルの不在が不安で溜まらないのだが、そう自分に言

い聞かせる。彼女がいなるときに、ふと村を襲った恐怖が蘇る。そんなとき、死ぬほどユリエルが恋しくなるのだ。甘えてはいけな
いと言いつつ聞かせているのに。

「それにしてもよ。お前たちっていつもどう旅しているんだ。やっ
ぱ俺と同じで街道を通るんだろ」

「えっと、街道はそんなに通らないです。どちらかというと森や林
とかそういうところを」

「森だあ。赤い魔物の住処じゃねえか。なんでそんなところ通るんだ
よ。自殺行為もいいとこだぞ」

「余計ないざこざに巻き込まれたくないって。ほら街道を通るとた
まにジェルナの人に会うから」

理由無く森に行くのが自殺行為だという認識は、都市の人間でも
知っている事実であった。生態があまり知られていない闇に魅入ら
れし者だが、その多くが森からやってくることから、森は彼らの住
処だと認識されていた。そのため、森での狩猟や薬草採取が困難で、
森で取れる者は貴重品として都市では高値で取引されている。現に
ラグスの治療に使っているリシユルの葉も森ではありふれた薬草だ
が、貴重品扱いされていた。

「勘がいいんだろ。この前の時も奴らが来る前にわかってたみ
たいだからさ。な、そうだろ、ラグス」

話がいい具合に流れているので、パオ口は探りを入れることにし
た。ユリエルに直接聞いても埒があかないのはすでに実証済みであ
る。だったら連れから少しでも手がかりを手に入れ手の内を増やす
しかない。

（俺の勘が当たってるなら、ユリエルは赤い魔物の存在を事前に察
知しているはずだ）

闇狩がどういう者なのかはいまいちわからない。だから、そのこ
とが特殊か一般かなど到底わからなかったが、もし闇狩が誰でもそ
うならきつと今よりはましな世界になっていたはずだ、とパオ口は
勝手に結論づけた。

「そうですね。僕は他の人がどうなのかは知らないけど、ユリエルさんは凄い人だと思います。だって、赤いのが見えない内からいることがわかるんですから」

「へえ、あの嬢ちゃんかねえ」

ユリエルが闇狩だと知らないゲイルは半信半疑で聞いていた。ユリエルのこととなると尊敬の念が強くなり、誇張気味に話すそれがあります。疑念を抱かせるのだろう。だが、正体が知らない方が都合なので、ゼノもパオロも何も言わなかった。ラグスも闇狩のことを言うつもりがないらしく、巧みにその言葉を避けていた。

「耳がいいのか？ 見えない内ってことは、音で判断しているんだろ」

あの細い腕で 渡り鳥 をしていることすら、銃口を突きつけられさえしなかったら信じなかったと、豪語したのだからゲイルはあまりユリエルの腕をよく思っていないようだ。確かに年も若いし、見た目も凄みに欠けていて、一見すると信じられないのは、同じ体験をしたパオロも認めるしかなかった。はじめに会ったときは、長年信用してきた 止まり木 のオーナーを見限るところだったのだ。いろいろあつて仕事を依頼したが、掘り出し物だったのはいうまでもない。

「そう…だと思えます。うん、そうです。確か一緒に旅をはじめた頃にそんなこと言っていましたから」

「そんなこと？」

思わずパオロは繰り返していた。その声の大きさは少し不自然だったかも知れないが、ユリエルの謎に一步近づけると思ったらしい口に出ていたのだ。背後でゼノが動く気配がする。

「はい。えっと、聞こえるって。僕には何も聞こえなかったんですが」

「何もそんなに驚くことあねえよ。俺の生まれ育った村にだって、音で獲物を見つける奴あはいたよ。それと同じさ」

前のめりになっていたパオロの背を、気持ちよく叩くとゲイルは、

「仕事の時間だ」とぐるぐると腕を回して部屋を出ていく。景気のいい足音が遠ざかっていくと、その音に被さるように人の声がする。取って食うのが当たり前前の 蜘蛛の巣 では珍しく彼は他人に慕われていた。

くしゃと苛立たしげに赤い前髪を掻き上げる。期待の大きさに比例して失望も大きい。はあ、と盛大にため息をつく。パオ口を不思議そうにラグスは見た。

「ラグス、よく思い出してくれ」

いつの間に近寄ってきたのか、ベッドのすぐ脇にまで来たゼノの硬質な声に緊張を覚えた。低い声は人に聞かれるのを拒んでいた。

「はい」

「ユリエルは、その時、声が聞こえると言わなかったか」

すぐに思い出を検索しはじめるラグス。パオ口は不審そうに二人を見比べた。まさかユリエルが闇に魅入られし者のうなり声を聞き分けたというのか。あれだけの音なら誰にでも聞こえるはず。そう頭を巡らしていると、思い出せたらしくラグスが顔を上げる。

「確か、ユリエルさんは、声がするっていったんです。何の音がするんだろって不思議に思ったから、たぶん、間違いないと思います」

「ちょっと待てよ。じゃあさ、ユリエルは遠く離れた奴らの雄叫びがわかるってことか」

「いや、それは違うだろう。あの時、現れた闇に魅入られし者は咆哮をあげてはいなかった」

パオ口の思惑を察したゼノは直ぐに否定する。困惑にパオ口は顔をゆがめずにはいられなかった。

「じゃあ、一体何を聞いたっていうんだ。俺たちに聞こえない何かを聞いているとでもいうのか」

やけくそのパオ口の台詞に、ゼノは思案する。口元に当てた手が、唇にふれた。

「はつきりとは断定できない。だが、多分そうなのだろう」

苛立たしそうなパオロと珍しく当惑するゼノを交互に見やりながら、ラグスはユリエルに降りかかる追求を思い、自分の失言に後悔した。

ゴルウェイにマラッサ討伐の命が正式に降りてから、東部司令基地もザフィート市街にある支部もにわかに慌ただしくなった。そうでなくてもこの間の和睦の一件で警備が二段階近く嚴重になっていた。支部は主に経済の管轄部署が多く、政府関係者や民間人も多く出入りをしている。いつもなら政府関係者など一部の者には免除している身体チェックと持ち物検査が今では特例なしに全員が対象となっていた。そのチェックを行うゲートの入り口に一人の女が花を持って立っているのを、ラッツはここ三十分ほど向かいのカフェから眺めていた。

他の者が休む暇なく忙しく働いているのが嘘のように、ラッツはのんびりとコーヒーの香りを楽しんでいる。別にさぼっているわけではなかった。なにせ仕事という仕事が無かったのだ。もともと鶴の一声で今の役職についたラッツは、皆知るように上官にのみ奉仕すればよいわけで、上官の体が空かない現在、邪魔にならないように外で時間を潰すのが仕事となっていた。自分が戦闘向きでないのはラッツも承知の上だったが、デスクワークなら他者と同等には働ける自信はあった。事実、作戦を立てるのは好きなのだ。だが、ゴルウェイをはじめ周りの人間はただの見た目がきれいな人形ではないかと思っているようだ。それはすでに経験済みのことであるというのに、毎回腹立たしく思うのが、滑稽で仕方なかった。

（実力を認めて欲しいなら、娼婦の真似などするものか）

自嘲じみた思念を消すただけに、何をするでもなく立ち尽くす女から視線をはずさずに、ラッツは少しだけ苦いコーヒーをすった。おもむろに立ち上がると、ラッツは店を出た。支払いはいっ

も通り、つけておいてくれるだろう、そんな些末なことを思いながら、足は女の方に向かう。頭からつま先まで黒で統一している様は誰が見ても喪服としか思えなかった。帽子から垂れたヴェールが表情を隠していたが、おおむね予測はついた。

「おい。そこで何をしている」

ラッツの呼び声に、女はわずかに顔を動かしたが、それだけだった。近づくと思っていたより若いことに気がつく。碧の、何を映しているのかわからない瞳がぼんやりとラッツを映している。空の明るさとは縁のない陰鬱な感じである。

「何も。ただ立っているだけ。それでも罪になるんですか」

手持ちぶさたと立ち続ける女への好奇心から声をかけてみたが、女の投げやりの声に関わったことに後悔を感じた。どこにでもいる喪服を着た女なのだが違和感を覚えてならなかった。きつと遺族を失った失望のせいであろう。勝手にそう決めつけると感じた違和感を頭の隅に追いやった。俯いたまま女は、ときおり様子を伺うかのようはこちらを見る。

「問題は行為じゃない、ここにいます。いらぬ疑いをかけられ連行されたくはないでしょう」

いつもの癖で敬語で話してしまったことに気づき、ラッツはごまかすように咳をした。すっかり職業病になってしまった口調は今日明日でなせるものではないと諦める。実際、敬語なしで話すのは落ち着かないのだ。そんなことは露も知らずに女はヴェールの下で碧の瞳を気取られぬように光らせた。握っていた花を一瞬さらに強く握りしめると、その腕で目の前の胸に叩きつけた。白い花びらはらはらと落ちた。

「それが何っ！　だつたらあの人をかえしなさいよっ」

ヒステリックに女は叫ぶと、ラッツの胸を叩く。花は地面に落ち、低いヒールに踏みにじられた。

「紙切れ一枚よこして死んだって、どういうことよ」

女の言葉にラッツはこめかみを痛めた。思い至ることはある。先

の騒動で数十に及ぶ兵が化物の餌食になった。そのほとんどは食いちぎられ、誰なのか判別するのも難しいほどであった。そのため、遺族には殉職としたための紙が送られた。女が口にしたのはそのことである。闇狩は進んでジェルナに入隊するためたとえ死亡してもその通知が遺族の所に届くことはない。通知が届くのは非闇の兵のみである。そして運が悪いことに、あの時、兵のほとんどが非闇であった。まさか闇に魅入られし者が現れるとは誰も予想しなかった。だから、マラツサ相手だと侮り、闇狩を出さなかったのだ。通知を受け取った者の中には、死んだ理由も遺体もなくいぶかしく思う者もたくさんいたに違いない。だが、皆、ジェルナを恐れ、女のように口にしなかった。

（母のようになるのを恐れたんだ）

ラッツの脳裏に自分によく似た母親の顔が浮かぶ。相手はジェルナではなかったが、自分たちの手に負える人間ではなかったのは確かだった。

「なぜ遺体がないの。それとも見せられないとか」

愛する者の生還よりも遺体に固執する女にラッツは奇妙な感じがしたが、興奮した人間の言葉だと切り捨てた。金切り声とはいかないまでも矢継ぎ早に飛ぶ言葉と手にいささか動揺を見せる。胸を叩く手を抑え、落ち着かせようとするが聞く耳を持たない。今は人通りが少ないのでいいが、人だかりができる前に決着を付けたかった。あまり大事になると女を処罰しなくてはならないし、次官の地位にある自分がこの様な些末なことに関わっていたら、心証の良くない自分を蹴落とそうとする者どもを喜ばせることになるだけでもあったからだ。早く退去させねば、それだけがラッツの頭を埋め尽くした。

「まさか闇に魅入られ……」

「違う。あれはオルファアの」

しまった。つい口走ってしまった名前をごまかそうとする前に、女はラッツにすがってくる。

「オルファア？ 何なのそれは。この前の地震と関係があるんでしょ」

止まるどころかより言葉を乱射する女に、数人の人がこちらを見ながら通り過ぎていく。視界の端にその光景を捕らえてもう駄目だと短く嘆息する。女の腕をつかむと、近くのビルの隙間に連れ込む。大通りから見えない位置までくると、乱暴に手を放した。周囲に目を向け、人影がないことを確認する。

「痛いわね。こんな所に連れてきてどうするのよ。それよりもあの人が何で死んだのか教えて」

身の危険も感じずに、鳴き続ける女を哀れっぽくラッツは見た。

失言で漏らしてしまった秘密を何度口にする女に、微塵の同情も湧かなかった。理解していないとはいえ、変に周囲に混乱をまき散らすのも自分の立場に良くない。それにどうせのうのと暮らしてきたのだから。少し結末が早くなったとしても底辺で生きている者とは幸せの率は多いはずだ。気が付かれぬ様にホルダーに手をかける。銃のずっしりとした重みに手が触れる。ちらりと横目で見る女は、変わらずにわめいている。最後に真実を教えてやるのも一興だろうか。ふと湧いたイタズラ心に、ラッツは深刻そうな顔を装う。

演技なら誰にも負けない自信があった。

ゲウ・ク・オルファア

「残念なことに、多くの兵が闇に堕ちし者の手に」

驚きで手で口を塞ぎ、女は硬直する。その瞬間を逃さぬように銃が抜かれた。

「ラッツ次官！」

後少し引き金に力を加えれば、それで終わりだったのに、駆けつけた足音に阻まれる。

「こちらでしたか。上官から通信が入ったそうです」

「上官から？ わかりました。すぐ行きます」

ホルダーに銃を納めると、まだ何かいいたそうにしている下士官に目を向けた。彼は女と銃を交互に見ると、状況を察知したらしく口端を歪めた。その薄ら笑いはよく見る種のものであった。金でど

うにでもなる人間の証拠だ。

「頼めますか」

「はい。ここでは人目に付きますから、外でやります」

「そうしてください」

おびえる女の腕をつかむ男を確認すると、素知らぬ顔でラッツは歩きだす。ゲートの前で、一瞬、絶妙のタイミングで下士官が現れたことに思いがいったが気のせいだろうと、軽く頭を振るとそのまま中に入っていった。

後に残された兵士と女は、ジェルナの車に乗り込むとそのまま門に向い、真っ直ぐにザフィートを出た。車は一时间ほど走り、近くの林の中で止まった。追い立たせるような声を上げ、兵士は女を降ろす。そして、女は必死に車から逃げるように声を上げた。

「もう大丈夫だ。あとで銃声の一、二発鳴らせば誰も疑わないだろう」

「そう。意外に簡単ね」

鬱陶しそうに帽子を放り捨てる。現れた顔はユリエルのものだった。

「まあな。でなきゃ、俺みたいなスパイを雇うはずがないだろ」

にやりと笑う男は律儀に、ファン・レイウンと名を名乗った。

「今回はまともなものを選んだじゃないか。墓場男爵は相変わらず元気かい」

数年来会っていない上司からの連絡を読むいつもの癖なのだろう、大して気にとめた様子もなくそう付け加えた。ええと短い返事にファンは肩をすくめる。その仕事すら目に入れることもなく、ユリエルは数枚の書類に目を通していく。それが今回の依頼の報酬だった。

二人の共通人物である墓場男爵は 蜘蛛の巣 に住む闇ギルドの古株である。 蜘蛛の巣 に移って以来、ユリエルは何度となくジェルナに足を運び、少しの情報でも得ようと様子をうかがっていた。そんな彼女を今回の橋渡しにスカウトしたのが墓場男爵であった。

いかめしい名前にはそぐわない骨張った矮躯な老人である。ただ窪んだ眼球から飛び出した目がぎらぎらと光っているのが嫌でも頭にこびりついた。ファンにいわせれば生まれたときから老人だとしてもおかしくないということになる。実際、誰も彼の年齢を知るものはいない。ある日 蜘蛛の巣 にやってきてそのまま居座っている。数十年前から、彼はそのままの姿なのだという。墓場に片足をつつこんだまま生きながらえている彼を、人はいつしか墓場男爵と呼ぶようになったのだという。

読み終えた書類を返すと、ファンは別のディスクを取り出した。

「これを男爵に。それで仕事は終わりだ。ああ、そうそう、他に聞くことはないか」 ぱん、ぱん。二発の銃声が空に放たれる。

鳥たちが一斉に飛び立つ。ゆっくりと落ちていく葉とともにユリエルの視線も落ちていく。

「闇に堕ちし者」

「やはり、そうきたか。詳しくは知らないが、赤い魔物の新種の名だつてよ。なんか化学部門のお偉いさんがつけたとか。嫌だね、まったく。この世の終わりつてやつだな」

「そう」

その響きにまるで用意していたかのような感じを受けた。ふとムハルドの声がよみがえる。

『闇に魅入られし者は、闇に愛された人つて意味なんだ』

もう使われなくなつた古い言葉さ。

なぜ彼がそのことを知っていたのか、その時は疑問にも感じなかったが、ある考えが浮かんでくる。

（先生はもしかしたら彼らが生まれた理由を知っていたのかもしれない）

誰にも使えないといわれる古代の遺物を、当然のように扱い、見てきたかのように歴史を語った。不審な点はいくらでもあったのだ。そして、誰にも語ることのなかった彼の最後。

疑問は次々に新たな仲間を連れてくる。

（そういえば、先生の知り合いってゼノしかいなかった）

「んじやな、生きてたらまた会おうぜ」

そんな台詞を残し、ファンは車に戻った。エンジンが稼働する音が林に響く。

中断されなかった考えに思いを巡らせながら、街道沿いに足を進める。程なくして、舗装された道に出ると、待ちかまえたように一大のトラックが止まる。相手の顔を確認すると、ユリエルは助手席に乗り込んだ。

無言で差し出される手に、預かったディスクを乗せる。その代わりのように小さなあごが指し示すのは、彼女の古びた外套であった。「こんな手の込んだことする必要があったのかしら。あなたが直接いつでもよかつたんじゃない」

巧みに運転するのは、墓場男爵その人であった。

「顔を見られたくないんさ」

それに、と彼は続けた。

「安全はそう安くはない」

「同感ね」

ふん、と鼻を鳴らし、車を止めた。荷台にいけと手で示され、不審に思いながらそれに従う。後ろから墓場男爵もついてくる。ぼろぼろの幌をかぶった荷台には使い方もわからない機械が転がっていた。いろいろな部品がむき出しに付けられている。それはムハルドが自分で作っていた計器を彷彿させた。

「あなたが作ったの」

「わかるのか」

すでにかすれたうわずった声は、驚きというよりも喜びのほうが多く含まれていた。首を横に振るユリエルに、がっくりと頭が垂れた。そのまま自作の機械に先ほどのディスクを入れる。小さな画面のついたそれは、さほど大きくない音と光をだし動き始めた。画面に流れる数字と文字の羅列を嬉々として墓場男爵は眺めた。ディスプレイから放たれる淡い光が、幼児のようにはしゃぐ老いた男を浮

かび上がらせた。

「それがあなたにもわかるの？」

「わしにも？ お前、わし以外にも機械を扱えるやつを知っとるのか」

「知っていたわ」

「いた？」

画面から顔を上げ、ユリエルを見た。彼女が答えるのをじっと待っている。

「死んだわ。もうずいぶん前に」

そうか。画面に顔を戻すと、やっと聞き取れる程度のつぶやきが漏れた。知り合いでもないだろうに、彼の落ち込みようはひどかった。そのまま沈黙が二人の間を埋め尽くしていく。ういいういん、とモーター音だけがせわしなく鳴いていた。

「そんなに物珍しく見るでない。昔はわしみたいたのはぎょうさんいたんじゃ」

縫いつけられた視線に答えたのか、独り言のようにしゃべりだす。

「昔」

「ジェルナのできるそのまた前さ」

当然のように語る墓場男爵にユリエルは眉間に皺をよせた。

ジェルナ設立は約百五十年も前のことである。またその原型ができたのはさらに遡り約二百年前である。その前に栄えた文明などユリエルは知らない。世界の歴史の規範とされている聖書にも神の鉄槌により世界がはじまって以来、今ある文明以外の文明など書かれていない。いや、そんなことよりも人間が数百年も生きられるはずなどないのだ。何を馬鹿なことをいつているのだろう。

哀れみを含んだ目で見ていたのだろう、墓場男爵はそんなユリエルを見て声を立てて笑った。ヒィヒィと笑ったびに息が漏れる音がした。

「やはりお前は 生き残り じゃないな。だが、それを知っとる」

「 生き残り ？」

ユリエルの疑問を無視して、墓場男爵は自分の前に座るよう指さした。はじめはためらったが、なおも示すのに観念し、ユリエルは腰掛ける。知り合ってまだ日が浅いが、墓場男爵の生気がみなぎり生き生きした様子などここ数年来見られていないことなのは何となく察しが付いた。その呼び名の通り、彼はいつも陰鬱で口数が少なかった。いや、そのはずだった。

「そうじゃな。お前、闇に魅入られし者の意味を知つとるか」

「ええ。闇に愛された者でしょう」

ヒュー。何がそんなにうれしいのかユリエルの答えに墓場男爵は笑う。他にはどうだ、そうユリエルの答えを求め手招きする。時たま、思い出したように画面に目を落とす。つられて目を落としたユリエルだったが淡い黄緑色の画面を流れていく文字の羅列はやはり意味不明なものであった。

「それは古代語だとか?……ちょっと待って」

自分でそう口にしてユリエルはあることに気がつく。

「それじゃ、闇に堕ちし者は? それも意味があるの」

「闇に堕ちし者? 何じゃそれは。今度は闇に落つこちたのか」

「それも古代語?」

はやる気持ちを抑え、唇を動かす。知らない内にそこは乾ききっていた。それに連動するように喉も乾きを訴えはじめた。

「ああ。そうじゃな。ん、待て。じゃったらこれを付けたのはわたし同様 生き残り か」

のんびりと自問自答する墓場男爵に、気持ちのみが焦り、きつい口調を叩きつける。

「ジェルナよ。ジェルナにもそれがある。だから、古代の遺物を集めるんだわ」

ジェルナに遺物を扱える者がいるのなら、彼らがそれを集めるのもうなずける。そして、それを破壊するためにムハルドがあちこちを彷徨っていたことも。

納得顔のユリエルを墓場男爵は不思議そうに見つめた。それか

ら、ディスクに入っていた情報を読みとりながら、言った。

「何を誤解しとるんだ。ジェルナに 生き残り がいるなら集めるまでもねえ。そいつの指示でもつとすごいのもで作れるさ。ま、わしみたいのならちっぽけなものになるがね」

「嘘」

信じられないようなユリエルのつぶやきに、墓場男爵は自作の機械を指し示す。呆然とそれを眺めるユリエルの目の前で、墓場男爵は思いっきりその機械を引き寄せた。近づけたり遠ざけたり、挙げ句の果てには自分の目をこすりその画面を見た。

「た大変じゃ。ら、ララ」

「どうしたの」

機械と製作者を交互に、説明をユリエルは求めた。

「ラ、ランコッドじゃ。次の、次の標的はランコッドじゃ」

「何ですって」

咄嗟に墓場男爵の小さな肩をつかむ。ごっつん、と派手な音を立てて、機械が落ちた。その拍子に、画面の光がプツリと切れた。

「ちっ、ここも収獲なしっすか」

飯屋の入り口でザックスはため息をつく。情報収集にランコッドから北に数人のメンバーを引き連れて彼は訪れていた。目新しい情報はいまだ何一つ得られていない。

（もう少し足を伸ばすか、ひとまず帰るか）

とぼとぼと歩き始めたザックスの耳に、複数のざわめきが聞こえる。何だ、と彼らが指さす頭上を見る。そこには蜂のように大群をなし南下する黒い塊がいた。

それはまさしく、ユリエルがランコッド襲撃を知ったのと同時刻のことだった。

5章

「そうか、奴は現れたか」

「はい。推察通りに」

暗い室内に機械音のみが響き渡る。時折、ぐぼぐぼ、と容器の中の液体が空気を出した。

「それとあいつの居場所はわかったか」

「それらしき人物は確認しております」

巨大な円柱の容器を目の前に、濃紺の制服に身を包んだ者は背後に控える部下の報告を聞く。

「そのほかの首尾は」

「上々です。今は鷹と蛇に鼠を与えていますので」

周りで働く者どもは、まるでその二人の存在にも気が付かないように黙々と動く。その動作は実に機械的で、表情も人形のようにであった。

退出の命令がでた男は、上官を残しその部屋をでる。ドアが開くに合わせ、胸ポケットにしまっていた眼鏡をかける。今までの表情は消され、信じられぬような柔和な笑顔が浮かび、光に満ちた廊下に足をだした。

「大変だっ。大変だあっ」

ドアを開けるなくても誰だかわかる足音を、さらに音量を上げ、ゲイルは今にも壊れそうな廊下を駆けた。前方後方から飛んでくる罵声や苦情も彼の足音にかき消されていく。

「ったく、誰だよ。うるせえ……って、ゲイルじゃねえか」

一〇数メートル先の振動を足の裏に感じ、パオロは開けたドアにつかまりため息を付く。その間に足音は絶叫に取って代わる。

「どけ、どけえ。足が止まんねえ」

普段ならさほど気にならない傾斜も、百キロ近い弾丸には天敵である。

「うわっ。来るんじゃ」

無意識にドアを盾代わりにしようと動いたが一步遅く、ゲイルと共に室内に転げ込むこととなった。ラグスは毛布を引き寄せ壁際に丸くなっていたが、あまりの惨劇に恐る恐るベッドの縁に這う。ドアの横の定位置にいたゼノはやれやれと小さく息を吐く。

うーんとゲイルのうなり声がするのでその無事は知れたが、その下敷きとなったパオロは声もなく埋もれている。

「パ、パオロさん。平気ですか？」

しゃがみ込んで顔が埋もれているだろう、ゲイルの胸の下を精一杯のぞく。返事はないが、指がぴくぴくと動いた。無事である。ほっと気を抜くと、二人に近づく足音に声をかけた。

「どうするんですか？」

「放っておきたいところだが、このままだとパオロが窒息するからな」

細い木の幹ほどの腕を掴むと力一杯に引く。食いしばった歯の隙間から短いうめきが漏れるが、ゲイルは少し浮いただけでびくともしない。一度力を緩めると短くかけ声を出し、もう一度引つ張る。少し動く、と下からも力が加わり、ゲイルは派手な音をたててひっくり返った。ぜえぜえと仰向けのまま、パオロは思いつきり肺に酸素を送る。ゲイルもさっきの衝撃で気が付いたらしく、痛そうに頭を抑えながら身を起こした。

「ててて、何しやがんだ」

「それはこっちの台詞だ。お前、人を殺す気か」

首元を抑えて、まだ苦しそうにしているパオロは、犬歯ををむき出しににらみつけた。「悪い悪い」と頭を掻くゲイルに、怒る気も萎え、体の調子を見るようにあちこちを動かしていく。その様子にこれといった怪我がないのがわかると、ラグスはよかったと知らずに漏らしていた。

二人が落ち着くのを待たずにゼノは尋ねた。

「そんなに慌てて何があった」

その問いに、自分が駆け込んだ理由を思い出したゲイルは跳ね起き、ゼノに迫る。

「そうだ、大変なんだ」

「大変大変って、それじゃわかんねえよ」

パオロの茶々に、がると一々反応するゲイルをなだめ、その先をゼノは促す。ゲイルもことの重大さを思い出し、パオロと一時休戦を心に誓う。いざ話そうとすると、何から話したらいいのか迷い、口を開けたり閉めたりと繰り返すばかりで、なかなか言葉が出ない。それをまた茶化そうとするパオロを目で制し、ゼノは助けをだす。ゲイルの大変をそんな重要なことじゃないと決めつけたパオロは、片腕を回してベッドの端に腰を下ろした。いいんですかと目で語るラグスに、あいつにまかせるとゼノに向かい顎を向ける。

「落ち着け、一度に全部話そうとするな。まずは一番大事なことを」
「ランコッドが攻撃されちまう」

説明半ばで張り上げられた声に、パオロは腰を浮かした。今朝方聞いた噂では、ジェルナは昨日ルレスフィア北東のケセラを襲撃し、制圧に手こずっているという。次に狙われる場所も、フェナーという北方の村が濃厚という話だ。鵜呑みにこそしなかったが、いきなり南下するとは思っていなかっただけに、この情報を信じることができなかった。いや、そうしなくなかったというのが正しいだろう。

「馬鹿なことを言うなっ」

「それはどこからの情報だ」

ゲイルに掴みかからんとするパオロを自分の背で押さえ、的確な質問を飛ばす。その冷静な姿に、気が高ぶってわめくことしかできない自分を思い知らされ、パオロは余計に腹が立った。おもむろに自分の頬をぱしっとはたくと、冷静になれと言い聞かせる。その音にゲイルは変な顔をしたが、ゼノに答えをせかされ口を開く。

「墓場の爺様からだ。さっき仕事をしていると、ジャンが来てよ」

「ランコッドが攻撃される、と」

大きくゲイルは頷く。それから、思い出したようにポケットをさぐる。出てきたのはぐちゃぐちゃの紙。それをゼノに押しつけると読め読めと手で繰り返す。ゼノが紙面に目を落とすと、パオロがその跡を継ぐと口を開きかけたが、ゲイルはその質問を予想したのか、コツを掴んだのか信じてもらおうと口を動かす。

「墓場の爺様は、陰鬱な爺様だがよ。手に入れる情報はピカイチだ。特にジェルナに関する情報には狂いはねえ。なんせ通信機を使えるんだぞ。ラジオじゃなくてな」

「通信機だと。さすがザフィートの闇だな」

皮肉っぽく口角をあげるパオロに、ゲイルはけつと吐き捨てた。

だが、パオロの反応はいたって普通の反応といえた。科学がジェルナに掌握されているこの世界では通信機も都市の、それもかなり発展した都市のそれも市長などわずか数人にしか民間人には与えられていないものだからである。通常、街・村の長や商人はラジオで情報を得る。非法合をモットウとする輩は、危険を犯して遠くまで遅れるラジオの電波に情報を載せるか、各地点に人員を割いて擬電波と呼ばれる短距離にしか遅れない電波を駆使してリレーするかどちらかであった。噂では通信機は、遠くにいる人間の姿を見ながら話ができるそうだが、実際どんなものかは想像もつかなかった。それが 蜘蛛の巣 にあると誰が想像するだろうか。

ゲイルも口では自信たっぷりに誇ってみせたが、内心では実際見たこともない機械にはらはらしていた。なにせ 蜘蛛の巣 にいる住人が手にする外部情報も大半は電波リレーによるものであったからだ。墓場男爵が持っている秘密の情報源を見た者は、ほんの一握りである。

（たぶん長やその周辺の人間だけだろう。でも、俺は墓場の爺様を信用すらあ）

頼る人間もなくザフィートに流れてきたまだ若かったゲイルを拾って 蜘蛛の巣 に居着かせてくれたのが、墓場男爵であった。あ

の日から十数年。豪快なゲイルとは性格こそ合わないが、あの日の恩と信頼は変わらずに存在した。

「だが、嘘ではないようだ」

目は文字を追っていたゼノは、顔を上げると、手にしたメモをパオロに差し出す。受け取ったのを見ると、本文に目もくれずに最後にかかれたサインを見るよう指し示す。

「ムハルドの弟子 ユリエル」シークエンス？ これが何だって…
…待てよ。おい、何でユリエルの名前があるんだ」

「ユリエルさんがその墓場のおじいさんと一緒にいるってことです
か？」

不安そうな顔をラグスは一層曇らせる。ランコッドにいるマラッサの人たちのことも心配だったが、まだベッドから出ることにすらできない自分の足に、ユリエルに置いて行かれるのではないかと不安が募る。彼女がいなくなると言うことは、あの恐怖が忍び寄ってくるのと同じことである。

「だろうな。だが、名前だけでは信用してもらえないと思ったのだろう。だからそんな書き方をしたんだ」

「ムハルドって、あのとき話してた、先生だっけ」

荷物などほとんどないが、パオロは素早く支度を整える。対するゼノは自分の荷物から何かを取り出すと、不安に揺らぐラグスの手にのせた。ずしりと思い感触が、薄い布から手に伝わっていく。細いひもをほどこき、中をのぞくとハーツやネルガ硬貨が詰まっていた。はじめて目にする大金に目を丸くし、言葉を失った。その驚きに不安も一瞬でその影を潜める。

（これで一人で生きろってこと。やっぱり、僕は）

ここに置いて行かれるんだ。不安が絶望に変わっていく。視界がゆらぎはじめる。

「ゲイル。悪いがラグスを預かってもらえないか。こちらが一段落ついたら迎えにくる。だから」

「おうっ。それなら任せとけっ。一時と言わずに一生ここにいちま

えよ」

急に自分の提案が受け入れられる形となり、ゲイルは上機嫌で承諾する。

「それじゃ、このお金は」

「気にするな。俺からの餞別だ。金はないよりあった方がいい」

「でも、こんな大金」

「それなら、半分をお前に、残りの半分はゲイルと墓場の爺様とやらに渡せばいい」

準備の整ったパオロは、ドアの前で話が終わるのを今か今かと待つ。まだ何か言いたそうなラグスを、ゼノはこれで終わりだと言いつ切る。

「それが当座の迷惑料だ。ゲイル頼んだぞ」

豪快に胸を叩く音がする頃には、二人は廊下に飛び出していた。

曲がりくねった廊下を、疾走する男たちの後にいくつものドアが開き、何事かといくつもの顔が次々に現れる。

「で、どうやって戻るんだ」

「まずは、ユリエルと合流が先だっ」

あつという間に外に出ると、目の前にそびえる巨大な門を目指す。

星が見え始めた街道を、一台の小さなトラックが、黒煙を巻き上げて街道を駆けていく。ガコンガコンと歯車がずれたような音が止まる気配を見せずに辺りに鳴り響く。街道を照らすライトが、時折乗り上げる小石に一瞬切れる。

ガイケラを立つときには、すでに日は傾きだしていた。ザフィートの衛星都市して知られるガイケラは、ザフィートに訪れたが入都市希望を待つ人や、そういう人間を狙って商売する人間が集まってきた。そのせいか治安が悪く、わけありの者が集まるには最適の場所でもあった。

そこにあるギルドの出張所で落ち合った三人は、墓場男爵の年代物の車を借りてランコッドに向けて出発した。街道を通るか否か、ガイケラを立ててすぐに意見が分かれた。ザフィート近くの小高い森を突っ切れば最短距離でランコッドに向かう。街道を行けば森を迂回することになる。不穏な情報が飛び交う現状では、早急に到着することが先決だと主張する声もあったが、二対一で街道に行くことになった。限りなく黒に近かったが、情報の真偽がわからない以上、目立つ行動は避けた方がいい、それが一致の意見となった。左に森を見ながら、街道を登っていく。車中には不思議な沈黙が流れていた。

「ここを登り切ればタニージャだ。そこまで行けばランコッドが見渡せる」

運転席から飛ばされる言葉に、荷台の二人は顔を上げた。

「わかったわ」

そう応じたユリエルが視線を落とすと、パオロがどこから銃を取りだし、暗がりでは弾薬の数を確かめている光景に遭遇した。タニージャからは三〇分ほどの距離だが、気の早さを感じた。

（これが普通なのか）

人と常に一定の距離を保って接してきたユリエルには、気がせくほど守りたいと思った人間はいなかった。最近ではラグスに対してそれなりに親しくしているが、それに値するのは疑問であった。それ故、パオロの行動に普通を感じユリエルは自嘲気味に息を付いた。その空気の動きを感じたのか、パオロの動きが止まる。

「どうした」

少し早めの言葉に、彼の興奮が伝わってくる。

「いえ、何でもないわ」

「そうか……。ちつ、なんだかみつともないな」

髪を掻き上げる仕草が、破けた幌から差し込む月明かりに、浮き上がる。そのままぐしゃぐしゃと髪をかき回すと、はあ、と大きく息を付いた。

「なんか、お前もゼノも落ち着きまくっててよ。一人焦っているのがカッコ悪。ゼノはともかく、お前よりは年上なのによ。もう少し」

「私は……普通ではないから」

すねた声を遮ったユリエルの声からは何も感情が読みとれなかった。ただその事実を伝えるのみだった。渡り鳥で、闇狩で、愚闇で……。言葉にすればたつたそれだけだが、ユリエルが生きてきた道はその容姿からは想像も付かないほど過酷なものだったのは確かである。その白い手を血で染めたことは一度や二度ではなかったはずだ。

（俺やマラツサの誰よりも過酷な生き方をしてきた）

その時、ふとゼノたちとかわした疑問を思いだす。ランコッド襲撃の衝撃ですっかり失念していたが、落ち着かない暗がりでその疑問を口にする。

「あのさ。普通じゃないって、もしかして赤い魔物の声が聞こえるってことか。ほら、和睦の時も奴らが来る前に」

衝撃は突然だった。轟音が聞こえたかと思うと、車体が大きく揺れる。轟音は立て続けに繰り返され、車は動きを止めざるを得なかった。

「どうしたっ。何が起こった！」

叫ぶパオロの声に、しばしの沈黙が流れた。焦れてもう一度口を開けようとしたとき、

「わからない。とりあえず急ぐぞ。しっかりつかまっておけよ」

そう言い終わらないうちに、車は今までにない唸りをあげ、坂を上がっていく。その間にも爆撃の音と地響きは続いていた。村を区切る木製の柵が見えてくるにしたがい、夜が赤く染まっていく。その様子は、破けた幌の隙間から荷台にいる二人にもわかった。音と地響きが止まったのと同時に、車も止まった。車から転げる様に飛び出した三人は、走って高台から街を見下ろす。そこには炎に飲み込まれたランコッドがそこにあった。

「畜生っ！ 遅かったか」

土を蹴り上げるとパオロ。ゼノは夜空に動く黒い点を仰ぎ見ている。その何機かはランコッドの周辺に着陸している。声なくその光景を啞然と見つめる三人。今からランコッドに向かつても無駄なこととはみな理解していた。下手に近づきジェルナに睨まれるよりは、はじまった惨劇が落ち着くのを待つしかなかった。それがわかつているだけに、余計に苛立ち募る。

「ちよつと待つて。……あそこ」

指さすユリエル。その先には膝丈の草原に隠れ目を盗みながら坂を駆け上ってくる人の姿があった。乗り出して見るパオロはあつと短く声を上げた。まだ遠いシルエットに知り合いの面影を見たのか、パオロは歩み寄り、その足取りはいつしか速度をあげていた。

「ニル。無事だったか。何があったんだ？ リーダーは？」

矢継ぎ早の質問に、ニルは息荒く呼吸し、しばし待つようパオロに触れた手で訴えた。粒の汗が次々に額に噴き出て、落ちていく。濡れた銀髪とよれた服からは、いつものきっちりした彼の姿を想像することはできなかった。

「わかりません。私はタニージャから戻るところだったんです。いきなりの爆撃に驚き、慌てて逃げて」

そこまで一気にしゃべると、大きく息を吸う。まだ苦しいのか、深呼吸を繰り返している。その背をなでつつも、パオロは街中の様子を少しでも聞き出そうと質問を繰り返す。ユリエルとゼノはその周辺に目を向けると、何人かの人間がニル同様に草原に這いつくばってタニージャに向かっていた。

パンパン、パンパン

草原にも銃声が聞こえてくる。見ると、タニージャ側の門の辺りで、数人のジェルナ兵が逃走する人々に威嚇射撃をしていた。

「まずいな。パオロ、話は上に行つてからだ」

「わかった」

ニルに肩を貸し、二人は登っていく。ゼノ、ユリエルとその後に続く。

タニージャ村の門の周辺には、開門を待つ避難民が群をなしていた。何人かの男女が木でできた門を叩き、助けを求めている。だが、大半のものは昼間の暑さが想像できないぐらいの夜の冷え込みを防ぐために、見知らぬもの同士が固まりあい暖をとっていた。ユリエルたちはその群から少し離れ、ザフィート大森林の近くに腰を下ろした。そこは街道から反対の位置にあり、乗り捨てたトラックから最も遠かった。パオロはニルを座らせると、ふらっと避難民の群に足を向ける。それをユリエルは目で追うがすぐに視線を戻した。「もう歳だと認めないといけませんかね」

口では若い者には、といつも言っているが、五〇代半ばに近づいた体は確実に年老いていた。ニルは呼吸を整えると、大丈夫だと背をさするゼノに笑みを見せた。

「落ち着いてからでいいから、事情を話してくれないか」

「何が発端なのかは、私も知らないですよ。タニージャに用がありそちらにいたら、飛行機が群をなしてランコッドの上空を旋回するのを見て、一目散に戻ったのです。ですが、すでにジェルナの攻撃がはじまっていて」

「ジェルナの攻撃はさっきの爆撃からじゃなかったの」

ニルはユリエルを振り向くと、首をきっぱりと横に振った。レジオンの秘書は、かつて銃口を向けられた相手でも恨みも嫌悪も少しも表情に出さなかった。

「違います。推測ですが、駐在している部隊が最初に動いたのですよ」

頭に宿屋での襲撃が浮かぶ。あの時同様、夜に奇襲をかけたのだろう。だが、その後に大軍が迫っているのに、少数の部隊で突撃することに意味があるのだろうか。突然の爆撃の方が、衝撃と混乱は強いと思うが。

「狙いはレジオンか」

「考えたくはありませんが、多分そうでしょう。あの方は何かとジェルナのやり方を否定してきましたから」

「レジオンの首を確実に取るために、駐在している部隊が動いたのかしら」

闇に落ちたつぶやきに、ニルはわからないと力無く首を振った。肩を落とした姿は知り合って間もないユリエルが見ても随分老け込んだ気がした。何か言おうかとゼノが見上げたが、背後から近づく音に首をやった。見ると村とは別の方角から身をひそめながらも、パオロが小走りで戻ってきた。

「どうだった」

慌ただししい戻りに、二人は顔を見合わせたが、パオロに問いかける声は言ったて普通だった。

「最悪だ」

感情のない彼らしくないつぶやきに、ニルは彼の足にすがりつく。「レジオン様は」

パオロの様子に予測は付いていたが、それでも長年ともに辛苦を重ねた者の最後を耳にするまでは望みを捨てられない。その気持ちは三人にも伝わっていた。恐れるように、パオロはニルを視界に入れなかった。何度もためらうように唇が上下に動く。

「…殺された」

ようやく絞り出された言葉は素っ気なくレジオンの一生を閉じた。「そ…んな。都市ではないとしても、レジオン様は執政官。取り調べもなく裁かれるなど」

「聞いた話だと、夜襲を仕掛けてきたジェルナに抗議したら、マラツサだと言いがかりを付けられて、その場で射殺されたそうだ」

「射殺。……あの方が、そんな」

地面に崩れ落ちたニルは、呆然と射殺の二文字を繰り返す。その横でパオロは拳を地面に叩きつけた。

「事実とはかく、あちらも手段を選んではいられなくなったということがある」

どこか作ったような冷静さに、ユリエルはゼノの歪みを見た。自分と同じ押し殺した感情の果ての冷静さを。

「そうじゃないっ！」

「パオロ？」

「俺のせいだ」

叫びに近い声に驚き、差しだしてしまったユリエルの手を軽く払うと、暗い怒りを帯びた目が闇に混じる。

「きつと和睦の時だ。今まではなかったからと高をくくっていたから。だからっ」

「そんなことは」

ニルの優しい否定を遮り、パオロは続ける。

「いや、間違いない。街の奴らも俺が出入りしていたからレジオンが狙われたんだと言ってたしな」

「…」

「そればかりか、ランコッドの奴ら、レジオンを死に追いやったマラッサを恨んでやがる。見つけたら血祭りにして復讐するってよ。こうなったのもみんな俺のせいだ」

目に見えないナイフを己に突き立て、パオロは悔しそうに唇をかむ。握った拳も小刻みに震えている。誰も声を継ぐ者はなかった。沈黙が夜を一層色濃くしていくようだった。はあ、と疲れたニルのため息が現状を物語っている。

マラッサの一員として、経済的にも優れ、メンバーの安全を確保してきたレジオンの喪失はまだ勢力の弱いマラッサには痛恨の痛手であった。それに加え、リーダーをはじめランコッドにいたメンバーの行方が知れない今、ジェルナを相手にする以前の問題である。

「一度、戻った方がいいよね」

どれぐらいたってからか、ぼつりとユリエルがつぶやいた。丘から見下ろしたランコッドはすでに火も消え始め、辛うじて闇に浮き上がっているのが見える程度だった。

「そうだな」

ゼノの同意にパオロもうなづく。頭に昇った血はすでに引いたらしく、上着に片手を突っ込んで照れくさそうに髪を掻き上げている。

これからの方針がなんとか決定したのを見ると、ニルは立ち上がり三人の若人の顔を見回した。暗がりによく見えなかったが、老年は何かを決心したらしく居住まいを正した。

「私はここに残りましょう。ここで少しでも情報を集めて、後方支援を行ったほうがよろしいでしょう。……なに、心配はいりませんよ。ここら辺なら知り合いも多いですからね」

「……そうか。悪いがそうしてくれると助かる」

「おやおや、パオロさんがそんな口をきけるとは思いませんでしたね。少しは成長されたようですね」

まるつきり子供扱いされパオロはむすつとする。口元に微笑を浮かべたニルは、ルフィアに旅の加護を祈った。誰も見上げぬ夜空に一筋の星が落ちた。

ぱちぱちつと暖かい炎の中で、小枝が悲鳴を上げる。それを見つめながら、でかかったあくびをかみ殺すと、パオロは手近な枝を放った。その拍子に、自分に寄りかかる人影がわずかに動いた。パオロは瞬間身を固くしたが、ユリエルが起きないのを知ると彼女が寝やすいように体勢を直した。

見張り役を勝手出たゼノが、様子を見てくると森に消えてからだいぶ立つが、近くにいたる気配はなかった。

（ま、旦那なら何があっても大丈夫か）

明かりのせいで一層濃くなった森にむかって肩をすくめる。それよりも、と肩の辺りの体温にパオロは困惑げに視線を落とす。先程から静かな寝息を立てているユリエルを見ると、ため息混じりに頭上を見上げた。枝を振り上げる木々の奥に一つ、二つ星が瞬いている。

（役得か……にしても）

一枚しかない外套のせいで男とくつついて寝ることになったにもかかわらず、大して気にもとめずにパオロに寄りかかったまま眠る

ユリエルに、範疇外なのかそれとも安全牌だと思われるのか、どちらにしてもあまり男としてはうれしくはなかった。栗色の髪が寝顔を隠していたが、それはどこにでもいるような年頃の娘のそれと同じだった。見た目は何一つ変わらないのに、その細い腕で何匹の赤い魔物を屠ってきたのか、服の上からその腕にそつと触れる。漏れた声に慌ててずり落ちた外套を直す振りをする。

「ん……メ」

「目？」

「……メーファーズ」

微かに震えた空気が紡いだ言葉に、パオロは眉を寄せた。まるで異国の言葉のような、そんな響きの言葉をどこかで聞いたことがあるようなそんな気がした。その名に思いを馳せようとしたとき、苦しそうな息づかいが耳に飛び込む。のたうつユリエルに驚き、慌ててその身体を押さえる。外套がずり落ち、冷気が襲いかかるが構っている場合ではなかった。

「嫌っ……いかな」

腕をふりほどこうとするユリエルを、たき火から遠ざけようとかむ。そのパオロの手が誰の手に変わっているのかわからなかったが、忌々しい悪夢に毒づいてやりたかった。

「ユリエ……いてっ」

「……っ」

呼び声と目覚めは同時だった。強い力で払われた手を抑えたパオロは、目の前で荒い息をするユリエルの背を見た。冷静で強い闇狩の姿はどこにもなく、小刻みに震える肩がやけに弱々しく見えた。声をかけていいものか悩んだが、パオロは結局かけることにした。

「大丈夫か」

拾い上げた外套を背にかけてやる。荒い呼吸の下から、短い言葉が聞こえた。よく聞き取れなかったが、パオロは聞き返さなかった。ユリエルの脇に座り直すと、思い出した冷気にくしゃみをした。

「あー、そっぴやゼノの旦那は、どこまで行っただんだか」

赤毛をかき回しながら、気まずい沈黙を破ろうと辺りを見回す。

相変わらず闇に没した木ばかりがあるだけで、ゼノの姿も気配も感じられなかった。いなくなつてからの時間を思えば不安がよぎるが、旦那だから、と意味不明の理由でそれはうち消された。それよりも小さく漏れたため息の方に気を取られたといった方が良かったか。

「……よく、見るのか」

聞こえていないかのように、振り向きもせずにユリエルは身を抱えた。その質問に一切答える気はない。無言の拒絶を感じたがパオロも引く気はなかった。

「さつき、寝言でメーファーズつて言つてたんだけど」

その言葉に反応し、ユリエルは身を硬くした。赤々と燃える炎を見つめる瞳に、感情を読みとることはできない。もしこれを言つたら、ユリエルは自分の前から消えるのではないか。そんな気持ちが芽生えたが、パオロは自分の疑問をぶつけていた。

「俺の記憶違いじゃなかったら、和睦の日に後から現れた赤い魔物に向かつてそういつてなかったか」

ユリエルは顔を上げた。が、そのまま固まり動くことはなかった。

しばらくの間、燃えてはじける木の音だけが世界に響いていた。

「あー、やめだやめだ」

飛び起き、木々の間から覗く星空を見上げる。

「辛気くさいのは性に合わないんだ。悪いな、さつきのは忘れてくれ。……こんな世の中だ。言いたくない過去なんて山のようにある。残念ながら、……俺にもな」

赤い魔物がいる限り、この不幸の連鎖は終わらない。見上げた空に輝く赤い星を睨む。あの星によく似た光にどれだけの不幸が生み出されたのか。気がつけば握った拳に力が入り、じんわりと汗がでていた。

「……の……くま」

「？」

微かに聞こえた人の声に、パオロは視線を落とし、同じようにあ

の赤い星を見上げていたユリエルと目があつた。

「何か言つたか？」

パオ口はわざとそう聞いた。それがユリエルの過去に触れることだと察せられたから、わざと引き返せるように問い直した。一瞬、口を閉じかけたが、形のいい唇はしつかりとその言葉を刻んだ。

「ヘッジの悪魔」

「ヘッジ…の悪魔？ ヘッジって、黒の時代の終焉となつた村だろ。それが一体」

とまどうパオ口の視線から、一度ユリエルは目をそらした。その目はほんのわずかだが、深淵の闇を慈しむが如く微笑んだように見えた。

「気になるなら、調べればいいわ。私が言えるのはここまでよ」

再び向けられたその表情は、すでに平素のユリエルであつた。

風に揺らされながら静かに輝く銀糸。肩をわずかに過ぎた髪は、邪魔されることなく風と戯れている。蒼海に似た瞳は、目の前に広がる砂漠を食い入るように見つめていた。

それは進じがたい現実。

そこは闇なのか、ただの黒なのか。何とも言い表せない空間がゼノの周囲に広がっていた。

（まるで浮いているようだな）

そう彼が感じてもおかしくなかった。その空間は足下からさらに下に向かつて進んでいた。

目の前の空間が歪む。かつての故郷は乱れ消え、贖えない過去が突きつけられる。体は硬直して動けない。いや、動かせないといった方が正しかったが、ゼノにはその気もなかったのでどう表現しても同じことであつた。

底に浮かび上がったのは何も知らなかった無力な過去のゼノ自身。そして、もう一人。白衣に身を包み、長く闇色の髪を持つ女性がい

た。彼女は頭を押さえ、悶え苦しんでいる。髪を振り乱し、上体を屈め、すさまじい叫びをあげて喘いでいる。聞こえるはずのない叫びをゼノの記憶は蘇らせる。決して、ゼノに助けを求めようとしなかった彼女は、雪のような白い肌を鮮血に濡らしていた。痛みから逃れようと力が入ったのか、爪が自らの皮膚に食い込んでいた。

その異常さに恐怖した過去のゼノは目を背け、感情のない今の蒼い眼は、その様子をじっと見つめていた。

悶え苦しむ女が、憎しみに満ちた目でゼノを睨みつける。

「っ！」

そこにあつたのは女の紫の瞳ではなく、赤く淀んだ闇に魅入られし者のそれであつた。そう思った刹那、像は乱れた。微かに風を体感じはじめ。それは徐々に強くなり、やがて突風になる。目を開けているのも辛いその中で、わずかに開けていた目が捕らえたのは一人の少年。それだけは、今までの映像とは違い、生身の人間のようにあつた。

それ違い様に二人の目が合う。さっき見た赤い瞳と同じ眼に。

「っ！」

そこでゼノは現実に戻された。

「はあ、はあ」

乱れた呼吸を整える余裕もなく、当たりを確認する。手探りで木の幹を探すと、背を預け、そのまま地に崩れ落ちた。額からこぼれ落ちる滴に、急速に体温を奪われていく。火照った体にそれは心地よかった。

（あの男は、まさか）

体の疲労に比べ、頭の中は意外なほどに静まりかえっていた。脳裏に刻まれたあの赤い眼が、身震いを起こさせる。闇に落ちし者に続き現れた赤眼の少年に、ゼノは拳を大地に叩きつけた。

（あいつはアレを完成させたのか。それにしても……バージルのあれといい。面倒なことを）

随分使い込まれた剣をつかむと、踊るように空を切った。見え

ない何かを断ち切るように。

（二度と繰り返すか。あんなことを二度と繰り返して良いはずがないんだ）

剣を手にしたまま、ゼノはパオロたちのところに向かい歩きだす。「忘れるな、ゼノ」ウディウム。お前が何のために生かされているのかを」

闇によぎるのは先程見た一面砂漠の世界。それは二度と蘇ることのない彼の故郷だった。

そんなゼノを頭上のあの赤い星が静かに見下ろしていた。

夜は更けたばかり、まだ夜明けにはほど遠かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008q/>

闇垢戴天

2011年4月3日16時57分発行